幻想郷を、雷狼竜と共に

篠崎零花

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※リメイク予定

とあることが原因で幻想入りした青年、神風結輝。

何故、己が幻想入りしたのか分からない上に、そばにいたのは同じく幻想入りしたジンオウガ。

何故かしゃべる上に、彼にやけになついている。

その上、不思議なことに大きくなったり小さくなったりできる。

幻想郷も彼が知る幻想郷ではないようで……？

※こちらは先代巫女と行く幻想郷生活『ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１３５９５５／』と世界観を共通しております。流れ的に続編扱いになるかと思われます。

※当作は二次創作なため、様々なキャラクター崩壊がありえます。なるべく沿うようにはしますが、それでも個人的な主観があるのでご了承ください。

※それでも平気という方はどうぞ、適当に楽しんでいってください。

※未完を含めまして、二作ほど書いてますが、文才はさほど変化し

てません。なので、それでも気にしないぜって方は斜め読みでも読んでもらえるとありがたいです。

目次

第１話　幻想入りにしては雑 ―― 1
第２話　そんな紹介（こと）で大丈夫か？ ―― 14
第３話　雷狼竜と巫女２人と幻想郷巡り ―― 22
第４話　俺は雷狼竜と現在の情報を知る ―― 30
第５話　計画性は残念？ ―― 38
第６話　はじめての ―― 46
第７話　手合わせ ―― 54
第８話　面倒な人（？）だと思ったけど ―― 66
第９話　ジンオウガは〇〇だった？ ―― 73
第１０話　気まぐれ吸血鬼のお茶会 ―― 81
第１１話　雷狼竜はある意味苦労人 ―― 89
第１２話　雷狼竜は〇〇〇〇をされる ―― 98
第１３話　俺と雷狼竜は大図書館で ―― 108
番外編やｉｆなど
番外編　とある少女との女子会 ―― 118
番外編　雷狼竜のとある一日 ―― 125
番外編　博麗の巫女の企みもどき ―― 137
幻想郷縁起　ＥＸＴＲＡ ―― 144

第1話　幻想入りにしては雑

――――近くから目覚ましとほぼ同じ大きさの音が聞こえたのをきっかけに、俺は起床するときと似たような感覚を覚えた。
…周りが見慣れないな…。一体、ここはどこなんだ？
さっきまで学校にいたはずなんだが……昼休みの時の俺の身になにが起きたんだ……？

『あ、起きた。ご主人、僕が分かりますー？』
「あ、あー……？」
とりあえず、声のようなものが聞こえた方へ顔を向ける。
どうやら俺はそのどこか知らないとこに仰向けで寝転がってるらしい。
それに隣にいる奴がでかい。見上げても体全体が見えないほどだ。
見覚えのある形だが、俺を襲ってこない以上、敵対してるわけじゃないんだな。いや、そもそも心配そうに声？をかけてきてるんだからありえない……か？

とりあえず、起きあがりながらこいつのことを見える範囲で考えてみるか。
全体的に青い鱗、腕や頭部には黄色の鱗。そして、人間でいう腹部辺りや首回りに見える白い毛……。
お前、ジンオウガか？いや、どう見てもジンオウガだな。
やけに大きいからか、それとも実物だからなのかあんまり見えづらい部分もあるが、ここまで特徴がハッキリしてりゃ、さすがに分かる。頭部の上の方に角のようなものが２本もあるしな。

確か狩り人と呼ばれる自身の分身を使った人が４人で狩りを行うゲームとかに出てきたはずだよな。
基本捕獲しまくった奴だからちょっとした特徴でも分かるが、たぶ

ん俺だけなのかもしれない。狩猟したのなんて数えるほどだったはずだしな。

『んー…とりあえず、なんともない？一応狙ってくる奴はしりぞけてはおいたから大丈夫だとは思うんだけど。うーん、あ、そうそう。悪いけどまだ恩は返せそうに――――いや、そんなちょっとじゃ返せそうにないね。そもそも恩といっていいのか怪しい代物（しろもの）だけど』

「なんのことを言ってるんだか分からんけど、ありがとな。平気だよ」

そういうとあからさまにホッとしたような――――雰囲気でしか表情は分からないが――――感じになった。

一応、もう少し詳しく周りを見た感じ、ここは林どころか少し森っぽいな。いや、むしろ林か森か微妙なところか？

…ん？派手な巫女服を着た少女が『あ、その子？急にご主人の方へ近づいたから手加減して気絶させたよ。さすがに雷光虫は使ってないから、死ぬことはないはず。そもそも僕自身のだから、手加減もなにもない気がするけどね』

手加減とかそういうのって関係あるのか…？

いや、それよりもさっきから俺のことを〝ご主人〟と呼ぶのはなんだ？

あとしれっと考えてることを読むな。

「そ、そうか。それよりも、お前と俺に関係性ってあったか？」

『あ、あぁー……まあ、そうなるよね。僕は元々ここにいれなかったはずだし、そもそもこうやって話すのは初めてだしね。とりあえずご主人にいきなり捕まえられて、手厚く育てられたジンオウガだと思ってよ』

うん、その、あれだ。

口は動いてるだけって感じとは言え、お前のような喋るジンオウガっていたか?!むしろ今さら驚いてる俺もおかしいとは思うけどさあ！

「ん、んん……」
あ、そうこう話してたら巫女服を着た少女が起き……ん？なんか様子がおか
「――――ってやっぱりジンオウガじゃないの！」
「あれ、お前…分かるのか？あとジンオウガも落ち着け。な？」
俺がそういうと少し警戒を解いてくれたのか、睨み付けるだけになった。
なんで俺の言うこともちゃんと聞くんだ…。いくらジンオウガが可愛いからって驚かないわけじゃないんだぞ…？
（なるほど……もしかしたら、この外来人が今まで無事だった理由ってそばにいたジンオウガにあるのかもしれないね）
「ええ。外の世界で今も有名かなんて確認できないけど、狩り人として遊ぶゲームで…確か同時に４人まで遊べるんだったわね？」
「それでもだいぶ知ってるじゃないか。……それで、ここはどこなんだ？」
『だいぶ…じゃなくてむしろその通りのような…』
お前な…。
小声でいう辺り、空気を読もうとしてくれたのかもしれないが、もう喋ってることを気にしない方がいいのか？
……むしろ驚きが１周まわって冷静になってるんだよな。色々ありすぎなんだよ…。学校での出来事といい、こっちに来るとかといい。
「幻想郷よ。んで、今いる場所は博麗神社に近い林の中――――って近い、近いわよ」
（まさかここまで反応されるなんて思ってなかったからすっごくビックリした……。いや、若干引くぐらいの反応しか…外来人ならありえるかも、だけどさ…私はそう感じる余裕すらなかったから分からないけど）
「あぁ、悪いな。んで、幻想郷なのは確かなのか？」
目の前の少女がこくこくと縦に頷くのを見て、ようやく理解した。

なるほど。何故かは知らんが、俺はここへ来てしまったようだ。
『あぁ、だから君が近寄ってからというもの、誰も僕達のそばに寄ってこなくなったのか』
「……それはあんたの影響もあるわよ。なんかしてたんでしょう？でなきゃ下級妖怪といえど、霊華がいても動じずに正体を見てくれって頼んでこないもの。一応霊華にもしてたし……正直言って、驚きでしかなかったわね」
ま、まあ、幻想郷とやらだし、妖怪とやらぐらいはいるよな。
と、いうかそもそものことしてなかったな。
「そ、そうか。ならひとまず安全な場所に案内してもらう前に――俺は神風結輝（かみかぜゆうき）って言うんだ。お前は？」
「なるほど、結輝ね。んで、そっちはジンオウ「ジンきゅんでもいいんじゃないか？」あだ名をつける流れじゃないからそういうのは後回しにしてもらうわよ。それで、私は博麗霊夢（はくれいれいむ）よ。それでジンオウガには悪いんだけど、あんたってあのゲームでいう最大サイズに近いのかやけに大きいのよね。可能ならでいいんだけど、小さくなれたりしないかしら？」
あっさり否定するのか…。
いや、むしろ後でならいいってことどよな？その言い方は。
『可能なら、というよりできるよ。んじゃ、小さければいいんだね？』
そういうとジンオウガは雷〝狼〟竜みたいな感じのサイズ…もとい、大人の狼サイズになった。
あぁ、お前の特徴もそのまま小さくしたような感じになるのな。てっきり目立たなくなるとか、そんなんだと思ってたぞ。
『こんな感じでどうかな？』
「まあ、幻想郷だし、そんな見た目の狼がいても不思議じゃないわよね……」
「そう思うんなら目をそらさなくていいんじゃないか？というか、俺からもそらす必要ないよな？」
（ま、まさか喋れる上に知性もあって、能力も普通に使えるとか誰が想

像するのさ！いや、能力があるのならそりゃ当たり前なんだろうけどさぁ！……とりあえず、私が落ち着かないと意味がないね）

「と、とりあえず…こっちよ。ついてきて」
「おーい、なかったことにはできないぞー？」
『そう言いながらご主人だって、僕が喋ることに内心驚きまくってたでしょ。僕だって、なんとなく想像はつくんだからね？』
そ、そういうもんなのか…？
ひとまず、霊夢と名乗った奴のあとでもついていくか。

そう思って先を歩く少女についていく俺。ジンオウガも…なんで斜め後ろなんだ？
狼と犬は違うんだぞー、と心の中でツッコミながらついて歩くことにした。

……案外近いな、その博麗神社とやらは。
んで、幻想郷になんで来たかは知らんが、幻想郷っていう辺り、パチュリー・ノーレッジとかがいるんだよな？
「ここなら落ち着いて色々と話せそうね。あと説明とか。…あぁ、さっき言った通り、他にも霊華って人とあうんって子がいるのよ。その人達や他の幻想郷のメンバーについては今度ね。確かもうすぐで11……午の一つ辺りになるでしょうから、昼食作らないといけないし」
「なるほどな。…ちなみになんで言い直したんだ？」

「あー…つい癖でね。今11時から11時半の間のことをこういうようにって覚えてたらこうなっちゃったのよ。大した料理とか出せないけど、昼食出すわね。ジンオウガもどう？」
そういうもんなのだろうか。
しかも、当たり前のようにジンオウガに話しかけてるし…。
『いいね。出来れば肉系で』
「えっ？野菜も？欲張りね」
『いや、僕はそんなこと言ってないよね!?』
「ふふ、冗談よ。一応食べれそうなものを用意するわね」
「真顔で冗談をいう奴っているのか？」
はーい、と言わんばかりに笑みを浮かべる霊夢とやら。
……真面目にそうなのか？
まあ、なんだ。仕方ない。この際、いただいてしまうか。他に食べれるような場所があるかどうかすら、知らないし。

昼飯に来たのは霊夢という奴よりもでかい女性となんか色々と生えてる少女。
博麗神社には女しかいないのか？
「んで、霊華とあうん。さっきも話したけども、妖怪達がそこそこ強い雷を当てられたとか雷をまとった虫に酷い目にあわされたっていう原因は幻想入りしてしまったこの青年と今は狼サイズのジンオウガだったみたいなのよ。あぁ、やれるのはジンオウガだけみたいだけども」
『そうそう、僕ならやれるからね。雷光虫と共生してるからこそ、ってわけだし。あ、今もいるからね？』
「ら、雷光虫？なにかしら、それは」
「あ、あー……そうよね。それもそうよね」

「そもそもジンオウガってなにー？」
「あー…えっと…その…」

はあ…。そりゃそうなるよな。
なんで霊夢とやらがモ〇ハ〇のことを知ってるのかは疑問だが、そもそも調べる場所がなさそうなんだよな。
なにせここが幻想郷で、俺のいた場所とは全く違うみたいだからな。
博麗霊華（はくれいれいか）と名乗った先代の博麗の巫女とやらも説明してくれたし、それだけはハッキリと理解してる。
「今度教えてあげるよ。ええと、高麗野（こまの）あうんちゃん、だっけ？」
「そうだよー。…うん、分かった。霊夢とかにしか今は分からないみたいだけど、感じからして私は知らなくてもよさそうだし」
「あ、あぁ……」
い、意外と物分かりがはやいのな。
確かにそれっぽい片鱗は見えてたけど。
……ちょっと不安だが。

「あ、そうだ。霊夢、早苗のとこ行ってくるねー」
「あ！そうだったわ、今日からお手伝いしに行くんだったわね。すっかり忘れてた。いってらっしゃい」
「はーい、いってきまーす」
そんなのもしてるのか…。と、いうかなんだそれ……？
手伝いとか、そんなことする仲なのか？それ以前にあうんちゃんはあうんちゃんでいいのかね。嫌がらない辺り、前からしてるんだろうけど。

「……それで、話を戻すわね。まず、あうんのことなんだけど、妖怪の山にある守矢神社とこの神社とで、色々と幻想郷についてとか教えてるのよ。ちょうど早苗も私もあの子に教えるついでに色々と知れるからね」
「そ、そうか。んで、一応聞くが…俺が元いた場所にはすぐに帰れないんだよな？」
「まあ、そうなるわね…」
　いや、うん。しょうがないだろうけどさ、顔をそらすのはやめないか？
『悪いことはしてないし、いいんじゃないかな。逆にここを拠点にして雷光虫増やして平気かな？』
「拠点に関しては別にかまわないって言えるんだけども、雷光虫はダメよ。色々と崩れちゃうかもしれないから」
『え、ええー?!』
　…そりゃダメだろうよ。

「んまぁ、とりあえず。あなた達の拠点とするとして…幻想郷の案内は霊夢。あなたに任せるわね」
　ジンオウガと現在進行形で口げんかしてるのに平気なのか？
「分かったわよ。まあ、今のところジンオウガについて詳しい幻想郷の住民は私だけのようだしね」
『確かに今のところ、ご主人以外で僕のことを知る唯一の人間みたいだからね。ときどきちょっかい出すかもしれないけど、宜しくね』
（……ちょっかいって。なんか嫌な予感しかしないんだけどなぁ）

「んで、幻想郷の案内ってなにされるんだ？」
　そもそもジンオウガがいること自体不思議だけどな。ある意味助かるし、癒しでもあるから嬉しいんだけどな？
　最初こそはビックリしたが、そんなの最初だけだったから、ジンオウガしか見てないし、ジンオウガが言わない限り誰も気づかないだろ。

「そのままの意味でしょうね。でしょ？霊華」
「ええ、そうね。幻想郷をある程度案内がてらに結輝とジンオウガとやらのことを紹介ってとこね。なにもしないよりは安全になるでしょうし。そして、ジンオウガという未知な存在がいる以上下手に手を出してこなくなるでしょうしね。ま、この博麗神社を拠点にするのだから、どこの場所よりも安全ってことを証明してあげるわね♪」
　霊華…いや、女性のする笑顔じゃないよな？それ。
『なんか狩り人がするような笑顔だね……。若干殺気まじってるよ？』
「……か、狩りび……？」
（うんうん。確かに怖いよ、その笑顔）
『あぁ、そうか。とにかく若干怖いってこと。目が笑ってないし。ヤンデレじゃないんだから』
「ヤンデレも分からないと思うぞ、ジンオウガ。…んで、このあとどうするんだ？」
　さっきから話してばかりで忘れてたけど、案内っていつからだろうか。
「あ、なら霊華。今から先に紅魔館へ行ってくるわね。早苗や魔理沙はともかく、レミリア達に…特にフランには早めに伝えないとまずそうだし。あの子は遊びがちょっとハードだから結輝やジンオウガも混じれるかどうか…なのよね」
「遊ぶの前提かよ」
　その言葉に〝えっ？〟とかいう顔するのはなんでだ？
　え、本当に前提にしてたとか？
　まさかぁ。
「でも、あの子は多少常識をもったとは言え…確かにズレたままなのよね。でも、吸血鬼の常識なんて私はそもそも知らないし。鬼についての軽い情報とかそれ以外ならまだ――――」
「霊華のも十分知識がかたよってるものね。仕方ないわ。……とりあ

えず、私は午後に用事ないし、紅魔館へ案内するわね。里は明日でも平気？」
「逆にそれで平気なのか？むしろ」
とまでいうと狼サイズまで縮んでいるジンオウガにペシッと叩かれた。
なんかだいぶ痛くないけど。

『いや、むしろ里でなく紅魔館であることを気にしようよ。いくら僕でも妬けちゃうよ？』
「……たぶん冗談ね。なんかそう、勘がいってるし」
『そういうネタばらしはあとにしてよね。僕にしては珍しいのかもしれないけど、ご主人みたいな人間と触れ合えるのはここが初めてなんだからさ』
そう言われて、いたずらっ子のように笑いながら「悪いわね」とかいっている。
馴染むのもはやいんだな、お前。いや、お前達、か？
「まあ、とにかく里への方はお願いするわね。霊華には悪いけども」
「別に平気よ。買い出しも行かなきゃいけないし。寺子屋の方にはちゃんと伝えておくわね」
そ、そういうもんなのかね。
って霊夢も若干困惑してるのかよ！ダメじゃないか、それ!?
『んじゃあ、紅魔館へ行くならご主人は僕の背中にでも乗ってよ。たぶん僕なら追い付けるだろうし』
「それもそうだな。んじゃ、言葉に甘えさせてもらうことにするよ」
……そもそも霊夢はそんなに速くなかった気がするんだが、黙っておくか。

最初に見たあの大きさの半分ほどのサイズになったジンオウガの背中に揺られつつ、前を低く飛ぶ霊夢を追いかけてもらってかなり時間がたった。
サイズが変わることには驚いたが、霊夢曰く幻想郷じゃ何々程度の能力があればおかしなことではないと言われた。
いや、確かに大きくても小さくても可愛いが。そういうもんでいいのだろうか？
さすが幻想郷だ。

っと、ようやく薄い霧の向こうになんか見えてきた。
やけに目立つ赤い洋館っぽいな、あれ。もしかしてあれが紅魔館……だよな？
「あと少しで紅魔館につくんだけども、たまに遊び感覚で雷光虫飛ばすのはいい加減やめてちょうだい。結構危ないのよ？」
『えー？狩り人なら無事にすむのにー？』
「わ、私は狩り人じゃないから無事ですまないのよ!?それに、見えない場所からやられるもんだから避けるの大変なんだからね!?」
じゃれる感覚でやってるとか怖いな…。
いや、見てる分にはそうでもないんだけどな。
「なのによく避けれるな。経験ってやつなのか？」
「経験ってより……。まあ、いいわ。そうね、あえて違うことを言うのならじゃれるのならあとで、って言いたいだけよ。今はあんた達…特にジンオウガのことを紹介した方があんた達〝も〟安全っぽいからね」
可愛い見た目して、力はとんでもないもんな。
んでも、いくらこいつ…いや、俺ん中だけでもジンきゅんと呼ぶか。

ジンきゅんも下手に刺激されなきゃなんもしてこないだろ。
なんて考えて呆れても知らない奴からすれば察するのも厳しいか。

「…またあんたか。んで？今日は一緒にいる人と若干大きな獣を連れてるけど、なにか紅魔館へ用でもあるの？」
そんなに毎日きてるのか、霊夢は。
んでも、なんで紅魔館にも来てるんだ？最近違うゲームばっかやってたからこっちのあんまり覚えてないんだよな…。
「ええ、あるわ。紹介しに、ね。特に後ろの狼は」
「いや、どう見ても狼はきつくないかしら」
『雷狼竜だからギリギリセーフってことにしてよ』
あ、門番みたいな少女が呆れた。
ため息までついてるし…。いや、雷狼竜っていったところで、狼じゃないもんな。
「さすがに無理だよ、あんた。狼って大きさじゃない上にその2本の角っぽいのがあるからね」
「なるほど。なら、小さければ狼ってことね」
「……それにはちょっと、無理があるんじゃない？」
「やってみれば分かるんじゃないか？」

背中を軽く2、3回叩くとなんも言ってないのに小さくなった。
おお。このジンきゅん、分かってるじゃないか。凄いな。
さすがに背中から離れるとして……ふうむ、幻想郷の能力とやらはよく分からないな。いや、そのうち分かるようになるのかもしれないな。

「うん、角があるから無理だね。飾りとも言いにくいだろうさ。……それで、紹介だったよね。霊夢がいるし、いいよ。でも、お嬢様と咲夜さんは今、妹様と一緒に部屋で人間を相手にする練習をしているみ

たいなのよ。いよいよもって、友達を作らせるつもりなのかしら」
「へぇ、そうなのか。んで、紅魔館って図書館とかあるのか？」
おお、やっぱりあるのか。
「ああ、あるよ。でも、行くならそこの霊夢か咲夜さんがいないとダメだからね」
「だいぶ手厳しいな」
「ある魔法使いがよーく借りるとか言って、入ってくらしいからね。…まあ、それとは関係ないけど」
ないのかよ！

「んじゃ、とりあえず中へ入らさせてもらうわね」
「あー、いいわよ。ただし、変なことはさせないでね」
はいはい、と適当に返しながら霊夢は歩き出そうとする。
なんか親友同士のような会話だな…。

『…僕達も入ろうか』
「それもそうだな」
と、話して先を歩く霊夢について歩くように向かった。
へえ、紅魔館って門から玄関までもそこそこ広いんだな。実際に見るとでかいわ。
中はどうなってるのか、も気になるが…図書館の方が気になる俺だった。

第2話　そんな紹介（こと）で大丈夫か？

紅魔館へ入った俺達。……なんか真ん中にあるのが気になるな。
なんだろうな、あれ。
「…あれでも気になるの？」
『いや、普通気になるよね、あれって』
「だな。なんかゲームにありそうな魔方陣だし。それに目立つんじゃないか？」
目立つかどうかは、さておきだが、周りを見渡してどう見ても魔方陣っぽいなにかが目にはいるんだよな。
それ以外は『ここは洋館なんで』と言われても黙るレベルだ。
……ジンきゅんは……。黙っておこう。
むしろどこにいても可愛いのがジンきゅんだしな。
「ゲームでよくあるような、あの詠唱の時に出るような奴のことを言いたいのよね？んー…確かにそうね。むしろあれは魔方陣であってるわよ」
「結構目立つもんなんだな。…なんかこう、見た目だけ消せないのか？」
「どうでしょうね。そこのジンオウガの背中にいる雷光虫みたいに消せないタイプだったら無理でしょうし、なにより試したことあるかなんて聞いたことないのよね。――ああ、でも背中から雷光虫がいなくなることはほとんどないんだったわね」
『そりゃ僕と雷光虫は……って分かってて言ってるよね？』
霊夢は「そりゃあね。あんたも共生関係とかって言ってたし」と言って、何故かウィンクした。
する意味あるのか？それ。

ともかく、話を戻すか。
「そういえば咲夜って奴となんか2人がなんかしてるらしいけど、俺達はまず誰と会うんだ？」
（っと、そういえば言ってなかったか。今のところ、エントランスを見

渡してるだけだしね）

「あー、そうね。決めてあるわ。大図書館にいるあの2人、ってことでこっちよ」

そう言って、俺達の方を見つつ通路を指差す霊夢。

予想以上に来てるんだな、霊夢は。あの門番……名前はなんだったけか。忘れた。

まあ、とにかく。門番にも言われてるぐらいだから、相当だろうな。

とりあえず頷いて、ついていくことにしよう。

通路を歩いて思ったんだが、外見より広くないか？しかも、大図書館は地下の方にあるのか、階段も降りるし…。

それなりに歩いたような気がするほど、だから相当なのか？

「あ、ここよ。……パチュリー、いるー？」

少し大きめな木製っぽい立ち止まるなり、そう呼び掛ける。

『そもそも僕達も入れると思う？』

「まー、なんとかなるだろ」

『えー……』

と、いうか返事が聞こえないぞ？

たぶん俺達が話してるせいもあるんだろうが。

「あー…こりゃ読書に夢中でこっちに気づいてないかもしれないわ

ね。勝手に入っちゃいましょ」
「いや、それはまずいだろ」
「平気よ。事情の分からない人じゃないから」
『いや、そういう問題じゃないと思うんだけど…』
「まっ、まぁ…あれよ。前にＯＫサインをもらってるってことにしてちょうだい」
そんなのありかよ、と内心突っ込む。
口にしないのはなんとなくだ。

んで、霊夢はノックもなしに入り、その後を俺達も続くように入った。
紅魔館もなかなか広いが、大図書館は確かに…いや、天井に届きそうなほど、本棚があるな。
……こりゃとんでもないな。
『ご主人、口あいてるよ。確かにこれはビックリするほどでかいし、本棚もかなりあるけど』
「かなりあるってところじゃないぞ、これは……！」
「仕方ないわよ。本人曰く勝手に本が増えてるらしいもの。それの管理を手伝う小悪魔はかなり大変でしょうね」

かなり、というか管理しきれてるっぽいのが凄いんだが。
いや、それ以前に本が増えるとかどんな仕様だよ。湧いて出るみたいじゃないか。
「そ、そういう問題じゃあ……。いや、もういい。んで、パチュリーとやらはどこにいるんだ？」
「えっ？あそこじゃないの？」

（まあ、実際には私が指をさした本棚の向こうにある机と椅子に座ってるんだろうけどね。大図書館に入ってすぐのところだから、覚えや

すいだろうし）

「俺にそれを聞かれても分からないぞ。お前が知ってるんじゃないのか？」

『あと指さしてるのって本棚だよね？いくらなんでも、そこにいるっていうのはペーパーな人物なのかな？』

「いや、むしろペーパーな人物ってなんだよ」

『あー…なんだろうね？』

……何故か霊夢が呆れると同時になんか肩をすくめた。

いや、急にどうした？

「言い方がちょっと悪かったみたいね。…その本棚の向こうでパチュリ―は読書しているはずよ」

ああー、そういうことだったのか。

やっと分かったわ。

んで、頷いてからその本棚の向こうに行くとそこに本をじっくり眺めている少女がいた。

十中八九、彼女がパチュリ―だろうな。

現に霊夢が近寄ってったし。…と、いうかなんかここ、換気したくなるような臭いがするような気がするんだが。俺の考えすぎか？

「パチュリ―、ちょっと今いいかしら？」

「……あぁ、霊夢？いつもの本探し……と、いうわけじゃないようね。その1人と1頭がいるわけだし、どうせ違う用なんでしょ？」

本探し…って借りてるのか？

それとも、単純に読ませてもらってるのか。

どちらにせよ、うらやま……やめておこう。

「ええ、そうなのよ。それで、前提で聞くんだけども、ジンオウガって

知ってるかしら。雷狼竜、無双の狩人とかって呼ばれてるらしいんだけども」
「いいえ、知らないわね。この大図書館のどの本にも載ってないから知るのも無理ね」
「待て待て、それだと外の世界の本って奴もここに現れるのか？」
〝どの本にも〟という言葉につっかかった俺は思わず聞いてしまったが、誰でもこれなら聞くんじゃないのか？
いや、気になってしまう奴だけか。
「ええ、出るらしいわよ。小悪魔もそう言ってたし、私もそれらしいのを見つけて読んだことがあるわ。でしょ？」
「とても不思議なことにそうみたいなのよね。と、いうよりほとんどが外来本よ。って貴方もこう評価したじゃない。『鈴奈庵も便利だけども、調べものなどを真剣にしたいときは紅魔館の大図書館ね』と」
そう言われた霊夢は「そんなことも言ったわね」なんていってなんかぎこちない笑みを浮かべた。
…なあ、ジンきゅんの話はどうなった？

『それで、僕のことは知らないってことでいいんだよね？』
「そうね、知らないわ。そもそも私は外来本なんて読まないもの」
（あぁ、こればっかりは仕方ないね。ここに入り浸ってて、分かったけど…いや、魔法使いについて知った時からそう。彼女達は魔法の研究に精を出す。魔理沙だって、魔法に近い物を色々とやってるみたいだしね）

……あぁ、そういやパチュリ―って魔法使いだったな。
そりゃ魔導書みたいな本以外は早々読まないか。でも逆に、それでどうにか仲良くなるってのも手だな。
「それで、霊夢。その1人と1頭がどうかしたの？」
顔見知りじゃなきゃ、そら興味なさそうな顔でこっちを見るよな……はぁ。

「あぁ、自己紹介も兼ねて連れてきたのよ。特に結輝と一緒にいるジンオウガのことは知っておいてほしいのよ」
「そう。んじゃ、してもらえる？」
「分かった。俺は神風結輝（かみかぜゆうき）っていう。霊夢曰く幻想入りしたらしい。ま、見た通りの男だ」
『簡単にしたねえ、ご主人。…僕はジンオウガ。ちなみに種族は竜盤目　四脚亜目　雷狼竜上科　ジンオウガ科だよ。……まあ、今は関係なさそうだけど』
　ま、まあ…そうだとして、よくそう分類されてることを知れたな。
　もしかして、牙竜種に分類されてるっことも知ってるのか？
「関係ないどころかもはや知らない種族ね。そんなの、幻想郷でも聞かないわ」
「それが外の世界じゃ、そういう遊戯のがあるらしいのよ。あ、今のを牙竜種ってまとめてるそうよ……確かね」

　いやいや、あってるよ。
　牙竜種　竜盤目　四脚亜目　雷狼竜上科　ジンオウガ科って言われてるらしいしな。
　…種族名が結構長いが、まあ、仕方ないな。

『いんや、あってるよ。ご主人も頷いた通り、僕は牙竜種らしいから』
「そう。そんなの遊戯もあるのね、外の世界には。なにをしてるのか想像しにくいけども。ま、出来れば敵対はしなくたいわね」
　そりゃそうだわな。まだ話してないが、ジンきゅんには超帯電状態ってのがあるし、そうなったら動きが速くなるしな。
　…そういや、ジンきゅんはどんな雷狼竜なんだろうな。
G（ジー）級のあるシリーズなのか、そうでないシリーズなのか。それによっても、同じ雷狼竜だとしても色々と変わってくるし。
　しかし、育てられたがひっかかるんだよな。どういうことなんだ…？

『なんもなければしないよ。強いていえば僕からの電気マッサージ……かな？』
「あんたの電気マッサージは下手すると気絶しそうね。…雷光虫を使ったかどうかまでは分からないけども」

半目になって、ジンきゅんを睨むのを見ると、出会った時のことでも気にしてるのか？

『あれには雷光虫なんて使ってないよ。至極真面目に撃退するつもりだったしね。雷光虫はふざけてたり、攻撃する時に使うよ』
「そんなおふざけ、私なら遠慮したいわ」
『普通はそうなるよね。でも、案外マッサージみたいで気持ちいいかもよ？』
「その手にはのらないわよ、さすがに」
といって半目でジンきゅんを見る辺り、そうとう出会い始めが印象深いようだな。

「まあ、この子はやけに強いみたいだもんな」
「そうね。れい…紅白がよく言っていたけども、本来外来人は妖怪に襲われやすいみたいなのよね。んでもって、れい…紅白がそれを全部把握できてるとは思えないから十中八九そのジンオウガとやらのおかげね」
「ええ、よくそんな話をしたわね。でも、わざわざ言い直す必要あったかしら？」
「ないわね。んで、結局それだけなら未知数なだけで、気をつける必要もなさそうだと思うのだけれども……。もういいのかしら？」
知り合いにもなってないと…いや、そうでなくともこんな接し方なのか？
まあ、自己紹介って話だったもんな…。
『あっ、ごめん。２つある。僕のことで』
「……なによ」

（な、なんか嫌な予感がしなくもない気が…）

『僕、まず出身は樹海なんだ。んで、次はそこで僕はG（ジー）級扱いされてたみたいなんだ。他にもあるけど、まだ内緒だよ。ご主人にはそのうち教える予定でいるんだけどね』

待て待て待て、樹海にいるジンオウガって……いや、そんなまさか。しかし、フロンティアって奴しかもう浮かばないんだよな。

捕獲して仲間にできんのはあれぐらいだったし…それにジンオウガが樹海にいるって時点でそれ以外はもうないんだよな。

そう思いつつ、他の奴の顔を見たらパチュリーは目を細め、霊夢は目を丸くしていた。

頼りがいのある相棒ってこういう子のことをいうんだろうな、と俺はどこか他人のように考えていた。

第3話　雷狼竜と巫女2人と幻想郷巡り

そんなことを考えていると霊夢が袖に両手を通した。
それはなにをしてるんだ？悩んでるように見えるから、考え事か？
「なるほど…。下手な妖怪より強いってことになりそうね…。パチュリー、咲夜達にも話しておいてもらってもいいかしら？覚えてれば、で構わないから」
「そうね。外来人とその近くにいる狼のような子のことはレミィ達に覚えてれば伝えておくわ」
「分かったわ。お願いね」

俺達…というかそりゃジンきゅんは強いしな。
しかし、俺達がいるんだから別にパチュリーじゃなくてもいい気がするんだけど。

『つまり、口コミで広げたいってことかな？その方が僕達や霊夢達が話すよりもっと認識されやすいだろうし』

（まさかレミリアと咲夜がフラン相手になんかしてるとは思わなかったけどね。…いや、むしろ社交性がよくなっていった方が彼女的にもいいのか）

「そうなるでしょうね。あぁ、忘れていたわ。一応自己紹介だけしておくわね。私はパチュリー・ノーレッジよ。種族は魔法使い……というところかしら。ま、あとは任せたわよ。私は読書に戻るから」
「あ、ああ…」

そっけなくても自己紹介はしてくれるのな。
そうなると知り合いになって、仲良くなるのが大変そうだ。
一番仲良くなりたい相手だったが、仕方ない。男を知らないってのもありそうだしな。たぶん。

「わざわざありがとね。んじゃ、結輝とジンオウガには悪いけども、一旦神社へ帰りましょうか」

…仕方ないだろうな。

パチュリーは本が好きすぎて、こんな部屋にしたとかなんとか…ってはずだったしな。あってたかは忘れたが。

『そうだね。特に居座る理由なんてないし、ご主人も頷いてるのもあるし、これからのことを考えるためにも戻ろう。あと雷光虫を「だからそれはダメよ」んー、さすがに流されないか』

(さすがにあからさますぎて気づくような気もする。と、いうか今の雷光虫もそこそこいると思うんだけどなぁー?)

なんかジンきゅんと霊夢が話してるのを横目にさっき入ってきた扉の前までやってきた。

…にしても、ジンきゅんは雷光虫の増やし方なんて知ってるのか?

「んじゃ、お邪魔したわね」

「またな」

『また今度ねー』

といったが、反応は「そうね」と返事がかえってきただけだった。

ふむ、すぐに仲良くなれそうなのか、疑問に思えてきたな。

難しくても仲良くなるつもりではあるが。

そのあとは何事もなく、博麗神社とやらに戻った。
強いていえば、幻想郷について教えてもらった程度か？
なんでも、自身の能力はこうだと宣言すると〇〇程度の能力と言われるようになるらしい。申告制なのかよ、と思ったが、そもそもそういうものだったとようやく思い出した。
なにせ東方ｐｒｏｊｅｃｔのことなんてパチュリーやアリスとかのことだけ覚えてりゃいいかなって思ってたのもあるし。
ちなみにジンオウガは１つだけ想像がつくらしい。
霊夢は今のところ、〝自身の大きさを変更できる程度の能力〟だと命名したらしい。たぶんそのまんまだろうな。

んで、夕飯もいただいたんだが…。
それとあうんって子は狛犬って種族らしく、行き来してるのはお互いに利益があるとかどうとか。俺にはよく分からんな。
「それにしても、ジンオウガ…ねえ。これからの対処がとても大変そうだわ」
「そうね。と、いうより私にも教えてくれる？そのジンオウガってそんなに厄介？別に下級妖怪ぐらいだったらしりぞけるのなんて簡単だと思うんだけども……」
「いや、たぶんそう思ってるのお前だけじゃないか？」
『確かに。なんか狩り人になっても生きていけそうなほど、強いって…えーと、霊夢が言ってたもんね』
当の本人は知らないらしいけどな。「えっ?!」とか言ってるし。

まさかとは思うが、今考えたんじゃないか？だとすると、普通の人間みたいだな。考え方とかそういうのが。

――――あれ、モンスターがそんなんでいいのか？俺得だとしても、おかしいぞ。なにせ普通なら人間の常識とかもろもろ通じなさそうだもんな。

別に問題があるわけじゃないから、ほうっておくが。

むしろ通じた方が楽な分、ジンきゅんに教えたかったのもあるが…いや、教える難しさよりはいいか。

「そんなことより、いい加減私にも分かりやすい話をしてもらえるかしら？全然理解がおよばないんだけど……。このままじゃ冗談かそうでないかすら分かりやしないわ」

（そ、そこだよなぁ。どう説明しようか悩む…）

っと、そうだった。なんでか知らんが、先代の博麗の巫女もいるんだったな。

「あー、そうだな。んだとしても、俺としてもこの場所のことをある程度知りたいんだが…」

（なるほど、この子がしたいのは情報の交換ってわけね？）

「あら。聞かれたらちゃんとなにもなしで教えたと言うのに。別にいいわ。……霊夢も、一緒に教えてくれるでしょうしね？」

なんか黙ってると思って、２人の顔を交互ではなく霊夢の顔を見たらこいつ……ジー、と半目で霊華の方を見てる。

「はいはい、分かったわよ。私も色々と教えるわ」

その時の霊夢とやらの表情が、諦めに近かったように見えたが……。

気のせい、ということにしよう。

ひとまず、俺の知ることをある程度話すか。東方ｐｒｏｊｅｃｔと

かそういう単語は出さないにせよ、ここが幻想郷だと知ってることなどは言ってもいいか。

それにせよ、なんでこの先代じゃない方の巫女は知り合った時のあの子と同じような知識なんだ？

微妙に引っ掛かるが…たぶん、偶然なんだろうな。

今は気にしなくていいか。

まあ、それからと言うのは人間の里とやらを案内してもらったり、妖怪の山などを教えてもらったりした。

ほとんどが知ってることだったのだが、どうも人間関係が違う。

それ以前に性格が違うやつがいるし、先代の博麗の巫女すらいる。

どうなってるんだ？

『ご主人ー、上白沢慧音とか稗田阿求とかに聞いてみたけど、なんか色々と違ったよ。あと樹海は生息地だろってツッコミも受けたんだけど、あの阿求って子……何者？』

「そうか…。まあ、そりゃ変わるか。んで、阿求か。もしかして、話したのか？自身のこと」

と、俺は霊夢のことを待ちつつ、蕎麦屋で聞いた。

２人そろって妖怪退治とかなにしてるんだよ、と。んで、残った俺は昼飯までに戻れるから、とここへ来た。

なんていうか、目の前にある店の方が繁盛してるな。

……って、ジンきゅん、もう頷いてたのな。
『うん、話したよ。だってそりゃあ、僕をあっさりと入れさせてくれたからね。しかも、２人共。普通は警戒するよね？』
「俺からすれば、可愛いジンきゅんなんだがな……。必要がない限り基本捕獲するほどには好きだったし」
『ほ、捕獲?!…好きだから!?そ、そんな言い方、勘違いしちゃうよ。ご主人ってば僕のこともジンきゅんって呼ぶのに、忘れた？』
――――な、なんでそうなるんだ？しかも、どこか照れてるようだし…。
確かにジンオウガの話だし、この子もジンオウガではあるが…。この子、性別でも、あるのか？
……いや、そんなまさかな。

「遅れてきたらジンオウガと外来人がいちゃついてたんだけども、私はどう反応すればいいのかしら？」
「そういうのはあなたの方が分かるでしょうよ…。そもそも、私は外来人なだけでお手上げというのに」
客が少ないと、こうも会話が聞き取りやすいんだな。
うーん、蕎麦屋（こっち）も結構美味しいんだけどな。霊夢もそうでしょ？って聞いてくるレベルだったしな。
「結輝、ジンオウガ、お待たせ。悪かったわね、待たせちゃって」
「待たせたわね。まさか、下級妖怪を探すのに手間取るなんてね」
「いや、平気だ。んで、よく昼までに間に合わせたな」
そう聞いたら、霊華がなんか苦笑い――――たぶん、困ったように笑ってるだけなんだろうな――――を浮かべた。

「いえね、特例で下級妖怪の退治依頼って2人でやってもいいことになってるのよ。紫曰く〝博麗の巫女が2人いるとは言え、どちらも目立ってしまった以上はどちらもなるべく死なないように〟らしいわ。よく分からないわね」
『要するに、2人で1つの依頼をしてもなにも言われず、報酬を受け取れるってことでしょ？』
とジンオウガがいい、霊華が頷いた。
さすがにその言い方は遠回しすぎないか？分かりにくいだろ。
「回りくどいと思ったわ。あんな説明じゃすぐに分からないでしょうし。それに退治って全部命を奪ってるわけじゃないことを先に伝えておくわね」
「へぇ、そうなのか。聞いた感じじゃ、全部退治してるイメージがあったんだが」

そこに「いいえ」といったのは霊夢だった。と、いうか俺から見て目の前に座ってるんだから、すぐに分かるか。

「今は違うのよ。退治してばかりじゃ、いつまでたっても人の味をしめる連中が減らないでしょうから」
『幻想郷ってそういう意味では面倒なんだね』
「……共存ってのは簡単じゃないようだから、仕方ないわね」
「みたいだな」
そういって、頷いてから思った。
――なんかこの巫女、やけに現代じみてないか？
今度、機会があれば聞いてみるか。
知り合いの1人とやけに似ていた部分があるし、違和感でしかないからな。

「そうだ、ジンきゅん。今度、能力とかを確認してみないか？なんか程度の能力とかあるんだろ？」
『あー、たぶんあるだろうね。でも、どこで？』

「あっ、じゃあうちの神社の裏にある山がいいんじゃないかしら。確か、そこそこ広かったはずよ」
お、おお。まさか、それを話してくれるとはな。
「なるほどな。なら、そこでするか」
『たぶん霊夢もしてそうだしね』
などと話したあと、霊夢からもうメニューは決めたのかと聞かれた。
そうだ、ここには昼飯を食べにきたんじゃないか。あんまりおごられるのも気になってしまうが、通貨が違う以上は仕方あるまい。
パッと適当に選び、頼むことにした。

ジンきゅんの方は、とても悩んだけどな。
一応食べれそうなものがあってよかったな、ジンきゅん。明日からは少し忙しそうだ。
幻想郷で仲良くなりたいのは仮拠点から片方は約1～2時間かかるし、もう片方なんて全く知らないしな。
情報源は…まだいいか。困った時にでも聞けばいいべ。

第４話　俺は雷狼竜と現在の情報を知る

あれから数週間、博麗神社の裏山と紅魔館の大図書館とを行き来した。

したんだが、その成果がまずまずだったんだが。

まず、パチュリ―とやらはようやく知り合いになった。

それ以外は顔見知りって程度だな。

あんだけ霊夢と行ったのに、現実は厳しいもんだ。ゲームとかラノベとか、そういったもののどっちでもいいから知ってればもっと話しやすいのかもしれないが…言葉のボキャブラリーが少ないのが原因と思うしかないだろうな。

んで、俺とジンきゅんの能力が大体分かった。というか、なんとなく出来そうなのを霊夢達の前でやっただけなんだけどな。

それで分かったのはいいんだが…俺のはとんでもなくシンプルだった。その上、パッシブスキルみたいな能力だった。

G（ジー）級ジンオウガを家族とし仲良くする程度の能力……たぶんな。

それと、身体能力がかなりよい程度の能力。

もっとこう、面白そうな応用のできる能力がよかったんだが、贅沢は言えないだろうな。

こう、本音を言えば自身を守れるぐらいのは欲しかったが…。いや、守れるかもしれんけどね。試してみなきゃ分からんし。

にしても、ジンきゅんのは強い。パッシブだか、アクティブかはともかくして、さすがフロンティアから来ただけあると思ったよ。

霊華や霊夢にそその……げふんげふん、霊夢にお願いされて来た八雲紫とかいう妖怪――――手加減していたらしい――――と互角をはったぐらいだからな。もはやなんとも言えんよ。

ジンきゅんが持ってる能力がそうなんだけど、いくつかあるらしい。
まず、自身の大きさを変更できる程度の能力。これは最初から使ってる上、そうだろうと話をしたからなんとなく分かっていた。
なによりもそうとしか見えない。
どこの秘密道具だよ。それか約3分でしか戦えない星の戦士かっての。

しかも、能力とは関係ないがあの子は女の子だったらしく、紅魔館へ遊びに行ってる時に咲夜がレミリアとパチュリーへ男の子かもしれませんね、と話したときに急に獄狼竜へと変化した。んで、なんとかなだめてる間に能力の名前が暫定として決まってたんだよな。
『亜種になった』とか『ご苦労……げふんげふん、獄狼竜になった』と最初の方で俺が叫んだところから、怒り時は亜種化する程度の能力と呼ぶことにしたらしい。

本人曰くまだあるらしいが、もしかしたら〝かなり怒った時は極み個体になる程度の能力〟かもね、と言う辺り分かってるのかもしれないな。いや、もしかしたら〝察してる〟って言った方が正しいのかもしれない。なにせ俺もなんとなーく出来るかもしれない、だったもんだし。ありえるだろ。
そう考えると、俺の嫁モンスターが強すぎないか？それとも、あれか？補正とやらがあるのか？それともフロンティアの魔改造とやらか？
もし後者ならヤバいな……相手が。

「どちらにせよ、複雑なもんだ」
『そうかな。それなりにご主人も強い方だと、僕は思うのにな』

いや、ジンきゅんは強すぎなんだよ。素の状態でも雷光虫がいるもんだから、超帯電状態になれるし。
あ、でもそういや…ジンきゅんが男の子だと勘違いした咲夜達は霊夢曰く、無事だったって言ってたんだよな。
……超帯電状態ならぬ、龍光まとい状態になっていたのに無事とか凄いな。手加減ってやつでもできるのだろうか。

『ご主人、なんで呆れたようにため息をついてるの？あ、もしかして…紅魔館のことでも思い出してたの？』
「…まあな。んで、何度もいうが、お前のこともビックリしたんだぞ？まさか、性別が女子だとは。いや、確かにジンオウガは群れで暮らし、子供を育てるとかは知ってたんだが……」

今は狼サイズのジンきゅんを見ても、まさか僕っ娘とは思うまいよ。
外見で性別の分かりやすいリオレウス、リオレイアとかテオ・テスカトル、ナナ・テスカトルとかとは違うんだぞ？あとアルセタス、ゲネル・セルタスとかとも違うんだぞ？
最後のはサイズとかも違うが。
それ以外にポカラも知ってるんだけど、あれは子供が癒しだからな。……おっと、子供は関係ないか。

『うーん、前にご主人がジンオウガが好きみたいな話をした時、僕が勘違いする云々って言ったし、なんとなーく察してくれると思ったんだけどな。難しかった？』
「さすがに分からなかったな、ジンきゅんには悪いが」
『仕方ないね。ご主人はそもそもハンターじゃないし。…あぁ、ご主人は狩り人って呼んでるんだったっけ？』
そうだな、と言いつつ頷いた。ハンターって言ってもいいが、モ○ハ○を知ってる人からすればなんのことかすぐに分かりそ…いや、分かる奴は分かってたな。

っと、なんか駆け寄ってくる音がするぞ？
ジンきゅんにも聞こえてるのか、なんか黙った。んで、待ってると俺より身長の低い――――あぁ、霊夢か霊華しかいないんだから、霊夢か。
そもそも俺達が今いるのは客室として貸してもらってる博麗神社の一角だしな。それも当たり前か。
いや、それよりもなんでそんなに急いでるんだ？

「そのジンオウガが女って本当なのよね?!」
『なんだと思ってたの？』
「性別不明か、男……って、ぎゃあぁ!?」
あっ、霊夢に超帯電したジンきゅんの超電雷光虫が行った。
『だから、僕は女の子なんだってば！』
「……おい、ジンきゅん。訂正するのはいいが、その子気絶してるぞ」
『あっ、本当だ。のびてる…。まあ、あとで僕のこと言えばいっか』
いや、それ以前に気絶させちゃダメだろ。
なんか霊夢とやらの髪もアフロっぽくなってるし。その見た目のせいで笑いをこらえてるのは内緒な。

仕方ない、起きるまで今後の予定でもたててておくか。

あらかた目的を決めたところでようやく霊夢が起きた。
……アフロっぽいそれが動いた気もするが、黙っておこうか。なんか面白そうだし。
『うん、なんか頭が面白いことになったままだね』
「――――えっ？」
（なんかさっきの雰囲気と違うような…。それよりも、頭が面白いってどういうこと？）
「別に言わなくても……ぷっ、いいんじゃないのか？」
（……ご主人が笑いをこらえてるのは反応からして察してたけど、もう限界そうだね。あのアフロもどきがそんなにおかしいのかな？僕にはさっぱり分からないね）
『うーん、僕が言わなくても違和感を感じれば分かると思うんだけどなぁ』
「ちょっと、どういう――――ってなによこれ！」
霊夢が急に叫んだと思ったら、頭のそれを床に叩きつけた。〝バンッ！〟って良い音が…ってカツラかー。
そりゃあ、面白いことにはなるよねー。
（ご主人、それは笑いすぎだって。確かに僕もおもしろ…いのかな？これは。ちょっとよく分からないや）
「まさかそうなるとはな。あぁ、そうだ。しばらく元の世界に帰れないんなら俺はこの幻想郷でやりたいことがある」
「はいはい…。あんたならジンオウガもいるし、大丈夫でしょうね。んで、なにをするつもり？」
呆れたように見られてるが、もう決めてるからな。
そもそも以前から幻想入りできたらしたいと思ってた事とか、そういうをしたいとかあったしな。
「幻想郷を楽しんだりすることだな。あとパチュリーと仲良くってと

こか。それ以上はまだ難しそうだから、今後にするってことで」
「それって在住する気満々よね」
（友人の上は恋人とかになるからね。そういう気がないとそんなの考えないでしょ）

な、なんで半目で見てくるんだか。
元々の世界で好きだった子となりたいと思うのはおかしくないだろ？ただ現実は元いた世界と一緒で、無理だったが。

「まぁな。ジンきゅんとか色々いるわけだし、それにもう1人と1頭が増えても幻想郷にゃなんの問題もないだろ？」
「あー、あー……そうね。確かにそうね」
（いや、ジンオウガは問題あるから…！今のところ、問題ないから見送りにはするけど、彼女が里に手を出さないって言いきれないし…！）
なんか若干頭かかえたな。
まあ、大丈夫だろ。

『とりあえず僕はご主人と共に行動してもいいのかな？』
「ん？あぁ、そうだな。お前は頼りになるし、その方が助かる。…ただマッサージはもう少し加減してくれないか？」
『なるほど…。なら、もういっそのこと、電気マッサージに変える？』
「ふむ、それもそうだな…」

（どちらにせよ、まんざらでもなさそうに見えるのは気のせいじゃないはず。でも、狼ぐらいの大きさなら確かにちょうど…あれ、ちょうどよくないの？んー…よく分からないものだ）

今気づいたが、さっきから1人いなくないか？
どこかに出かけてるのか？

『それはともかくして、先代はどうしたの？ご主人もなんかようやく探し始めたけど』
「ん？あぁ、朝食を食べるなり修行しに行ったわよ。私と違って毎日行ってるからね」
（…確かにあんまりなんかしてるの見ないね。まるでどこで鍛えてるんだか分からないハンターのようだ。あ、でも霊華の方が近いんだよね、それ。動きもハンターよろしく人間を辞めてるって感じがどことなくしたし）
「んじゃあ、紅魔館に「今日はやめた方がいいわ」……はっ？どういうことだよ」

なんでばつが悪そうな顔になるんだ？

「いえ、なんでもないわ。行くならざっと……三日後の方がいいわよ」
（確か…今日辺りが、紫が〝あるもの〟を配る日だったろうし。今もそんなのなんて受け入れられないし、認めがたいんだけど……。でも、それがあってこその幻想郷だし、止めようもないからね。いや、したところで無駄だし、それこそ仕方ないとしか言えない。だからこそ、それを今すぐ丸ごと解するなんて無理な相談。逆に一般人なら知らなくてもいい。無知な方が幸せなことだってある）
「な、なんでだよ。今までは平気だったろ？」
『しかも三日ってわりと具体的だね。……まあ、ご主人。紅魔館が急に消えたりしないだろうし、別の場所行こっか』
そ、そういうもんか？
むしろ幻想郷そのものが危険だと思うんだがな。確か妖怪は人間を食べるとかなんとからしいからな。
それよりも、超電雷光虫の方が驚きだわ。なんでアフロ（あれ）ですむのや

ら。

いや、もしかしたら気づかってるのかも知れないし、別の場所にする捨てられた皇妃

気づかってるのかも知れないし、仕方ない。別の場所にするか。

行く場所は……適当に行くとしよう。

第5話　計画性は残念？

ジンきゅんを連れて仕方なく魔法の森とやらに来てみたが……ふむ、湿気が凄いな。

ジンきゅんもなんかあるのか？どこか嫌そうに見えなくもない。と、いうより狼サイズだから尻尾とかを見ればいいのか？

いや、そこで感情を読み取るとか厳しいんだろうけど。

んで、紅魔館が訳ありで遊びに行けないからというだけの理由でこっちに来た。俺とジンきゅんなら外に行っても平気だろ？とゴリ押しもしたんだが……。

ふむ、ここまで来たのはいいが、アリス・マーガトロイドの家の場所なんて俺、知らないんだよな。そもそもいること以上のことなんて知らんし、調べてものってなかったしな。当たり前だろうけど。

『ご主人、急に立ち止まってどうしたの？少しビックリしたんだけど。あ、そうそう。関係ないといいんだけどさ、やっぱり僕の知るあの樹海と違うんだね。なんかこう、違う感じがするね』

（感じ、というか別物だろうけど。たぶん、僕じゃなくてババコンガとかならなんとなくわか……いや、きついな、ああいう好奇心旺盛には。なにをしでかすか分からないし）

「変な感じ、か。うーん、俺にはよく分からんけど、適当に歩けば家なんて見つかるだろ」

（自信満々に言われてもなあ。要するに行き当たりばったりってことでしょ？道に迷うことになるのがオチだね）

なんかジンきゅんから来る眼差しが呆れにも近い気がするけど…俺の気のせいだろうな、うん。

なんとかなるだろ。森って言ったって虱潰(しらみつぶ)しに探せば見つかるだ

ろうしね。

なんて気楽に考えていたら、道に迷いつつある俺。結構歩いたはずなんだけどな…。

木に印でも刻めればいいけど、道具はないし、ジンきゅんはたぶんやめておいた方がよさそうだな。キノコがたくさんあって、面倒なことになっても困る。

確か胞子(ほうし)が云々だったはずだ。大体忘れたけどな。

『ご主人、ところでどこへ行こうとしたの？なんかいい加減、似たようなところを延々と巡ってるように感じてきたんだけど』

「ん？あぁー…話してなかったか。前にアリス・マーガトロイドって名前の魔法使いがいるって調べたことがあってな。その子とも知り合いになれっかなー…と思って向かってたんだけど、そもそも家の位置すら知らなくてな。んだから今、探してる」

『…つまり、場所が分からないから調べるついでに歩き回ってる…と。行き当たりばったりってことだよね？それ』

（いやいや、顔をそらすってことは肯定してるってことだよ？……仕方ない。最小サイズになってることを利用して、狼のフリでもしてみるかな？あと雷光虫にも協力してもらって逆にあちらに気づいてもらうとしよう。知り合いになれるかどうかはご主人次第だし、せめて顔見知りにはなれるでしょ。――――魔法使い云々はよく分からない

しね）

なにを考えてるんだ？ジンきゅんは。

まあ、なんかいい物で木に目印でもつければいけっかね。もっとも今の手持ちじゃ無理だろうけどな。

『とりあえずご主人、無言で別のことしようとするのはいいけど、ちょーっと良い案があるんだ』

「道に迷って困った人のフリでもするのか？」

『……あぁ、人間ならそう考えるか……って違うよ!?むしろ道に迷って困ってるって言うのは現在進行形だからね!?仮拠点の博麗神社にすら帰れないかもなんだよ!?いや、拠点なんて僕がいれば工夫次第で作れそうでもあるけどさあ！そういう問題じゃなくって！』

さすがに作らないぞ、拠点なんて。

ツリーハウスになら興味があるし、住んでみたいと思うが、まずこの森じゃ無理だな。湿気とかが酷すぎて住めたもんじゃない。

確かにそういう問題じゃ、ないけどな。

さすがに首を横に振る。俺でもふざけないさ、こんな時は。

「さすがに作らんよ。んで、なにかあるのか？」

『ご主人の行き当たりばったりよりはマシだと思うんだけどな。別にいいけど。そうだね、雷光虫と共に探す…というのはどうかなってね。もちろん離れすぎないようにはさせるよ。妖怪の中にガーグァみたいな奴がいないとは限らないしね』

「幻想郷にゃ雷光虫なんてツッコミよういい……げふんげふん、お前が連れてる虫がいるわけじゃないもんな。んでも、雷光虫と話すなんて能力ないだろ？肉食のジンオウガとガーグァが天敵の雷光虫とで利害一致しただけってはずだったろうし」

ツッコミ要員かはともかくして、だ。雷光虫のことをあえて詳しく

言うなら…確か。
ガーグァはくちばしが絶縁体のそれだったから、いくら雷を放つ雷光虫でも食べられる。が、そんなとこに天敵であるガーグァなどを食べるジンオウガがいたって感じだったか。
んで、ジンオウガはジンオウガで攻撃に使えるほどの電力は作れない。
それとは関係ないが、雷狼竜に限らず獄狼竜にもいるらしいが、あっちはなんでいるんだろうな？
なんか今とは関係ないと分かってるが、興味が出てきたな。

『ん、話せるよ？だからやれると思う。――――もっとも、幻想入りとやらをしてからやらかしたことのおかげでさっきから妖怪から避けられてるんだよね。気のせいかなぁ』
「そうか。…うん、そのおかげというか、せいというか。安全ならいいんじゃないか？」

（それを遠くを見るような目で言われても説得力ないんだけどな。しかもなんか真顔だし）

「んじゃまぁ、俺は特にないからそれでもいいや」
『そ、そうなんだ。一応奥の手もあるけど、先にそっちやるね。ご主人はハンターと違って耳が大変なことになるだろうし』
奥の手……耳……。まさか、咆哮（ほうこう）か？
いや、ありえないか。むしろ来たら良いなってレベルだろうな。

（咆哮してもその人物が来るとは限らないし、下手なのが来ても困るからね。あと咆哮ってそういう用途じゃないし。分かっててやろうとしたとはいえ、複雑だね。とりあえず雷光虫と話し合ってみるかな？）

しばらくジンきゅんの様子を見てたんだが、なんかボソボソ呟いたかと思うと雷光虫がジンきゅんの周りにふよふよ浮き出した。
あれで会話できてるんなら凄いもんだな。むしろそれをゲームの方でされたらもっと倒しづらくなってただろうな。

「そういや今更なんだが、ジンきゅん。お前…ボクっ娘なのな」
『うん！すごく今更なんじゃいかな!?……ったく、ご主人も気にするの遅いよ。出会ってからずっと〝僕〟って言ってたのに!?』

自然すぎて気づかなかったんだよ。仕方ないだろ…。
と、いうか一々一人称まで俺は気にしないからなぁ。
そもそもボクっ娘…ボクっ娘か…。モンスターではあるけど、女の子だしな。
――それもありだな、うん。

（うん、こりゃあそこまで気にされてないな。ゲームでも…だったし。仕方のない人だなぁ）

『あ、そうだ。ご主人も探してね？僕だけじゃあらが出るだろうし』
「はいはい、分かったよ」

雷光虫をまとうジンきゅんとキョロキョロと周りを見回す俺。
これで一緒に歩いてるとか、はたから見ればどう見えるんだろうな。
仕方ないか。俺がなんとか行けるって言ってここまで来たのもあ

るし。個人的にはジンきゅんと一緒に歩けるとかなので、得である。あるが、さすがにまずいな。
ここにパチュリーやアリスとかがいればいいけど、本当…女性ばっかだな。里とやら以外に男性をほとんど見かけないとかまるで男女逆転みたいに感じるわ。
違うのは分かってるとは言えな。そうも感じるよ。
ここまで女性ばっかりじゃな。

（さっきからご主人、表情がコロコロ変わるんだけど、どうかしたのかな。楽しそうにしたり、悩んだり……。なんか考えてたりする？）

「そこの1人と1匹。なにをしているのかしら。ここは魔法の森よ？」

俺達のちょうど左斜め後ろからそんなことを言われた。
しかも、言い方的に俺達しか該当するのがいないというか…そもそも俺達しかいないが。
一応振り返っておくとしよう。って待て待て。
そこにいる金髪でカチューシャっぽいのに見えるのを頭につけてる少女って今探してた相手じゃないか。確かアリス・マーガトロイド…だよな？
とりあえずあえて探索と答えるか。大体間違えてないはずだしな。
相手に通じればオーケーだろうしな。

「あぁ、そうみたいだな。ちょっと探索ってとこだ」
『でも、探索してたら道に迷ってね。どうしたものかなー…ってね』

そこで何故ため息をつく。
行き当たりばったりで来ただけだと言うのに。

もちろん、目的はスマフォなどで調べたりした幻想郷の住民のうち、1人に会いに来ただけなんだけどな。

「なるほど。そういうこと…。それで、なにを探していたのよ」

「第一森の住民、ってとこだな」

（…第一村人って言いたかったのかな。でも、ご主人もそのネタ知ってるのかな。表情的になんか適当そうし）

「そもそもこの森は普通の人は住まないわよ。いても私や普通の人間とかの魔法使いだけ。だからそのネタとやらは使えないわよ。むしろ使ったら2人しかいない……ええと、過疎村？になっちゃうじゃない」

「村ですらないが、それもそうか」

『むしろそうじゃなくて。あぁ、僕はジンオウガって呼ばれてたんだけど、君は？』

なにを忘れてるかと思ったら、相手の名前を聞いてなかったのか。

この少女も〝あぁー〟なんて顔してるし。お前も忘れてたのかい。

「なるほど、狼みたいな大きさになってる貴方はそうなのね。それで、そっちの外来人は？」

「俺は神風結輝（ゆうき）だ」

名前を聞いたわりにはそっけないんだな。

と、いうか出てきたのか。ジンきゅんと話してて気づかんかったな。

いや、それっぽい足音はしてたが。

「まあ、いいわ。私はアリス。アリス・マーガトロイドよ。今日は疲れたでしょうし、家にいらっしゃい」

「ん、じゃあそうさせてもらうな」
『ありがと？』

その後はときおり「こっちよ」と案内するアリスのあとをついて歩いた。
まあ、結果オーライってね。そう考えていたら、何故かジンきゅんに呆れられた顔を向けられた。
俺、なんも話してないんだけどな。行き当たりばったりを呆れられたのか？
別にいいか。

第6話　はじめての

アリスの家に通されて、もっと詳しい事情を聞かれたもんだからジンきゅんと共に話した。んだが、霊夢のことは外の世界とやらを知ってて当然らしい。

東風谷早苗もそうらしいが、元外来人だとか。すっかりその子のことを忘れてたわ。

大して興味がなかったっていうのもあるんだろうけどな。

いや、それとこれは違うんじゃないのか？不思議なもんだ。

ま、ぼかされる以上、そんなに深入りしなくてもいいだろ。もしかしたらそういった話かもしれないしな。

それでも、だ。〝用事があるから一旦外出するわね〟とアリスが出て行ったまではいいんだけど、この部屋はなんというか…たくさんあるな。人形が。

おまけにここに入る時、鍵もしていった。

……留守番ってこんなんだっけか、と疑問に思えてしまうな。いくら知らない相手だとしても、だ。

『…昼食をもらっておいて言うべきじゃないけどさ、この部屋…凄いね。伊達に人形使いじゃないってことなのかな？』

「別にいいんじゃないか？下手したら仮拠点の博麗神社にすら戻れなかったかもしれんし」

（遠回しに野宿よりマシって言いたいんだよね、それ。しかもなんか顔そらしてるし。……いや、僕も僕で場所を聞いてなかったしね。うーん、まさかここまで迷うとはなぁ。樹海なら分かるのに。やっぱりわけが違うんだねぇ）

……それで、ここで待っててって言われたっきり音沙汰ないんだが。どゆこと。

確か用事がある、んだっけか？

「そういやジンきゅんさ、お前が強いのはよーく分かってるんだけど俺の方はいまいちじゃないか？」
『う、うーん…。身体能力はいいと思うよ？一部並の人間と似かよってる……と思うけど。たぶん』

たぶんって曖昧だな。出会い始めてからそんなに経ってないからしようもないかもしれないけどさ。
しかし、身体能力の一部はＦＰＳなどをやる以上、身につく人は身につくと思うんだけどな。
全員ってわけじゃないことも言っておくが。

「そ、そうか？…あぁ、今の話とは違うが、ジンきゅん…芸とか覚えてみないか？今のその大きさなら見た目の少し違う狼で通じると思うぞ」
『尻尾が独特な狼だって言いたいのかな？ちょっと真似してみようか？そうだね……たぶんワンワンすら言えないだろうけど』
「そこは練習だな」

そんな呆れた風に見なくてもいいと思うんだが。
俺的にはちゃんと雷狼竜こと〝ジンオウガ〟も、ご苦労ならぬ獄狼竜こと〝ジンオウガ亜種〟も、〝極（きわ）み吼（ほ）えるジンオウガ〟も狼っぽく見えなくも……うーん、難しいか？

そう考えてしばらくすると、扉越しに話し声がしてきた。
どういうことだ？戻るみたいな話たったとは言え、何故会話に…

「ほんと、よく毎回私を誘うわね。今日に限って魔理沙を呼ばないの

はとても不思議だけども」
「今日はちょっと迷い人がいてね。…ふぅん。そんなことを言うけども、無償で人形供養や私の手伝いをしてくれる優しい巫女は誰かしら？たまに里で見かける先代の巫女が買い物しながら呆れたように話してたわよ。ま、私的には貴方みたいな霊視のできる人がいるだけで、曰く付きの管理法を探しやすくって助かるのだけども」
「別に巫女なんだから供養ぐらい当たり前じゃない。それに手伝いも材料とかそんなんで大したことなんてしてないわ。――でもね、そもそも人形は字のごとく人の形に一番近い存在である以上、幽霊が取り憑かないって保証はないのよ？……あんたが作ったものはほとんど魂が宿ってるから平気なのかもしれないんでしょうけどね」

（半目で私を見ながらそう説明してくるのもよく飽きないわね。ま、色んな反応が楽しいからついやってしまうのだけども）

「そういうわけだから、人形は場合によって危ないものになりえるのよ」
「はいはい、もうその話はいいわよ。それよりも来客がいるのよね。その1人と1匹も同席しても平気かしら？」

（ひ、1人と1匹？…なんか最近そんな感じの外来人がいたような…）

「あー、構わないわ。もしかしたら私も知ってるかもしれないし。それに私がやるのは一緒に人形を作るだけだもの」
「そう言いながら曰く付きになりそうなのは持ってくじゃないの。巫女らしいことをやってるぐらい、言えばいいのに。貴方なら私よりおしゃべりだから、平気なはずよ？」

って待て待て。〝カチャリ〟という鍵のあいたような音がしたとかどうとかより、霊夢がここに来るとかどういうことだ？

アリスとも仲がいいのか？羨ましいぞ、霊夢。俺もパチュリーやアリスとかと仲良くしたいもんだ。

（……ご主人が今度は羨ましそうにしてる。もう〝なんで幻想入りしたのか〟とか気にしてる素振りはないね。いや、ここまでくると〝幻想入り？なにそれ〟とかって言いそう。うん、もう僕はなにも言うまい）

向こうから扉を開けられたわけなんだが、案の定霊夢だった。でも、幻想郷の住民らってこんなに知り合いになりやすかったっけか？

パチュリーですら本以外に興味があったようだし。いや、その方が嬉しいんだけどな？

俺の知る幻想郷と違うような…。ま、いいか。結果オーライって奴だろ。

「…結輝とジンオウガなのね。別に構わないからいいのだけども」

「へえ、知り合いなのね。ならいいわ。いつものやってもらえる？」

「いつもの…って紅魔館の大図書館のように来てるのか。交友広過ぎないか？」

「うーん…そうなのかしら」

それで悩まれてもなあ。そうとしか言えない気がするんだけど。

なにせ案内した先々で挨拶されてたし。ただ、俺の知る原作通り、名前で呼ばれていたけどな。

まさか、交友が広いって自覚がないのか？

『んで、なにをするの？』

「ん？あぁ、それは見てれば分かるわ。アリス、いつでもいいわよ」

「やれやれ。…分かったわ。やりましょ」

それを見てるとなんか2人して物作り始めたぞ。ただ霊夢なんかは完成した人形も見てるし。

……共同作業ってか？

『ご主人、ご主人。あれが共同作業に見える？僕にはそういう風には見えないんだけど…』

さり気なく小声で聞いてくれるのな。

「俺にはね。…なんか原作と違って俺の知ってることも知ってるし、なにより――アリスとも仲がいいのが羨ましい！」

『そこかい！』

（…なんか話し声が聞こえたような気がしたから、なんとなく少し後ろを見たら…結輝とやらがあの太めな尻尾で軽く叩かれてる。どんな話をしてるのやら）

とまぁ、色々――嫁モンスであるジンきゅんと話してたとかなでなでしたとか――やっていたらどうやら終わったらしい。

ちょうどいい。アリスと仲良くなるついでに情報でも掴むか。

俺の知る幻想郷とささいな違いがある以上、たくさん知っておいた方がいいからな。ついでにアリスやパチュリーとかと仲良くなるためにも。

「なあ、アリスと霊夢。なんか幻想郷の人間関係違わないか？」

む、なんで2人とも〝そんなことないわ〟みたいな顔をしてるんだ？

おかしなことは聞いてないはずなんたが…。

『いや、さすがにご主人…。さすがに人間関係の違いなんて分からないと思うんだけど…』

ジンきゅんがそう小声で話しかけてきたのと似たようなタイミングでキョトンと不思議そうな顔をして――――若干その顔が面白いって言うのは黙っておくとして――――見合わせた後(のち)、俺達の方を見てきた。

「私はそもそもそこまで交流を持ってないから知らないわ」

「私も知らないわね。心当たりがあると言っても、もう覚えてないし…。うーん、変わってないと思うわよ?」

(一応分からなくもないけど、ね。もはや思い出せない記憶の中に答えがあるからどうしようもないってだけで。別人同士がその互いの体に憑依してしまうと言う現象――――双憑依(そうひょうい)といつの間にか命名されていた――――が起きてしまってるから確認なんて言うのも出来ないわけだし)

『なら、今知ってる情報でいいんじゃないかな。まがりなりにもご主人と僕は外来人だし、助かるんだよね。――――あ、僕が人じゃないだろってツッコミはなしね。自覚はしてるから』

「それなら霊夢がいいわね。私は別にそういうタイプじゃないし。任せたわよ」

「…はぁ。分かったわよ。んじゃ、私の知る範囲で教えるわ。アリスと知ってることは似たりよったりのはずだし」

(なんか諦めた感じがする…。ってことは似たようなことは何回かあったってことかな?一応大変なんだね)

「んじゃあ、たくさん聞かせてもらうよ。知りたいことが結構あるからね」
「はいはい、分かったわ。私の知る限りで教えるわよ」
（んじゃ、ちょうどいいから僕も便乗してこの幻想郷について知るとしようかな。せめて土地勘は養いたいし。……なにせ今の状態じゃ前みたいに動き回りにくい。そうなると移動も不便極まりないんだよね）

　なら、俺も最初は素直に聞くとしよう。
　個人的な質問とかじゃないが、別にいいだろう。…俺だって仲良くなりたいんだ。あの２人と。

「んじゃ、パチュリーやアリスとも仲が良いお前はなんなんだっ。うらや…げふんげふん、妬ましいぞ！」
『凄いふざけた口調だね…』
「そう言われても…ねぇ。アリスは以前からの知り合いだし、パチュリーなんかも似たりよったりだもの。あんたより先に仲良くなってもおかしなことはないわ」
「かと言って貴方がパチュリーとそんな仲ってのはビックリするわよ？…ま、グリモワール関係を借りない辺り、霊夢は霊夢だったってわけね」
「それってどういうことかしら…」

　仲が良いのか悪いのか。半目になった霊夢がアリスに近づいていってるし。
　なにしてるんだろうな、あの２人。じゃれてるのか？それとも仲が良いよって俺に見せたいのか？
　おい、俺も混ぜろよ。

――おっと、本音が口から出そうになった。
『ご主人、出てたよ。あとそれも出てる』
「それはさすがに出過ぎじゃないか？」
『顔に、って意味だからセーフなんじゃないかな。たぶん』

そうなのか？と考えながら霊夢達――さっきまでなんかじゃれ合ってた――の方を見たら2人共こっちを見てるんだが。
ま、いいか。羨ましいのは本当のことだしな。
あとは他にも聞いてみるか。ジンきゅんのことも兼ねて、な。

第7話　手合わせ

昨日はアリスのことも聞けて有意義だった。
むしろ現在の幻想郷と…幻想入りしたての俺の近くにいたジンきゅんがやらかした物事を聞けた
のはいいんだが、超帯電状態を手加減って……言えるのか？いや、確かに亜種や極みにもなれるジンきゅんからすればそうだろうが、超帯電状態を含めた素の方も充分強いだろ。
なにせ極み個体のジンオウガ１０分狩猟をあっさり出来る猟団員ですら苦戦するほどに育てたジンきゅんだからな。本人もその当人だと言ってるし、強さは折り紙付きってわけだ。
その強さはその猟団員曰く〝まだ極みジンオウガの方が楽〟って言われるレベル。ジンきゅんも好きだから仕方ないな。

『そういやご主人、あの時さ、霊夢になんであんな質問をしたの？なんか答えにつまってたよ。一応そのあとに返答はしてたみたいだけど』
「…ん？あんな？うーん、俺は適当に質問を投げかけただけだぞ。そんなジンきゅんが気になるような質問、なかったんじゃないか？」

…なにかジンきゅんが気になるような質問なんてしたっけか。
俺には心当たりがないな。あの時なんか適当に思い浮かんだ質問を投げかけただったしな。強いていうならジンきゅんを何故それを知ってるのか？っていう軽い疑問ぐらいだしな。
出会ってから教えたのは俺のことぐらいなはずだし。あと覚えてる限りの知識。

『いや…その、ゲーム？などの話とかそういうの。何故か樹海についても聞いてたよね。……樹海でなにが分かるのか一番謎だったけど』
（僕からすれば樹海のことを知ってる僕に樹海のことを聞けばいいと思うんだよね。そもそも僕の棲家（すみか）なわけだし。だから、なにも霊夢に

聞く必要なんてないだろうに…）

「ああ、ゲームとかそういう話はジンきゅんにはしてなかったもんな。教えすらしてないし。……ん？」

いや、そう考えるとよく俺がジンきゅんを捕獲してペットにし、いつの間にか最強にしていた狩り人だと分かったんだろうな。むしろ分かってもらえた方が俺的には嬉しいけどさ。

ジンきゅんへの愛が通じた的な意味で。

っと、そうじゃない。とりあえずなんで知ってるのかとかは聞いてみるか。

「そういえばお前に話したことあったっけか？ゲームとかそういう話。記憶にある限り、霊夢に質問したあの時しかないと思うんだが…」

『そーだねぇ…ないよ。でも、ハンターじゃない人間はそれで遊ぶって〝神秘〟を名乗る神様もどきに言われたよ』

「ふぅん…そうだったのか。あながち間違いじゃないな。んで、結果と言えば俺の友人の1人にそっくりだ。……が、それだけだな。パチュリーやアリスと仲良くできるようしてくれるのはめっちゃ助かってるが」

（偶然（ぐうぜん）な気もするけどね。と、いうかご主人はだいぶパチュリーとアリスの2人とやらに興味が結構（けっこう）あるんだね。いや、僕にも興味があるってことは分かるんだけど。……現に博麗神社の縁側（えんがわ）に座り、僕が狼のようなサイズで、ご主人に撫（な）でられ続けてるわけだし。かれこれ10分か15分もやられてるような……。うーん、最初は少しって話だったような気がするんだけどなあ）

『…ねぇ、その割には霊夢にあれこれ聞くよね。パチュリーのことやアリスのこととか。そのうちになんかするの？』

なんかってなんだよ…。
いや、むしろジンきゅんが察せないのは仕方ないか？たぶん知らんことだろうしな。

「あぁ、なんか…っていうか相手のことを知る準備ってとこだな。会話のネタがなきゃそれ以上のことを知れないだろ？んで、話してるうちに互いのことを知って、意外なとこにも目が……ってな」
『なるほど。でもさ、さっきから頭を撫でてるけど…よく腕が疲れないね』

あ、あぁー！だからたまにチラチラ見てきてたのか！
そりゃそうだよな。嫁モンスである、とは伝えてない状態でここまで撫で続けりゃ疑問にも思うか。
でもそうだな。正直いって、腕が疲れてきた。
だが、撫で心地の良いお前も悪い。いや、悪かったら悪かったなりに良くしようとするけどな。
ブラッシングができるか、とかこの子を洗えるか、とか確認しながらな。

にしても、ジンきゅんの付近にいる雷光虫がやけに飛び回ってるな。
まあ、ジンきゅんがいるから平気だと思って飛んでるんだろう。
なんか廊下にも行ってる気がしなくもないが、今の俺はジンきゅんを撫でて癒してほしいんだよな。可愛いのが悪いし。うりうり～。
（うん、凄い撫でてくるね。わしゃわしゃって感じだけど、優しく撫で

ようとしてるのが分からなくもないし…。うーん、雷光虫に頼んでここにいる霊夢か霊華のうち、どっちかを呼んでくるようにやったからそろそろ来てもいいと思うんだけどな……。もっとも、助け舟になってくれるといいなあ、なんて）

「んで、雷光虫に導かれるように来たのはいいものの……あんたら、なにしてるのよ」

『ご主人に体感で１０分か１５分は撫でられ続けてるとこだよ』

「ん？普通なら出来なかった愛でる行為をジンきゅんにしてるだけだぞ。どこもおかしくはないんじゃないか？」

ふむ、おかしなことは言ってないはずなんだが…。

って少し後ろを見たら、なんか霊夢がこっちを呆れたように見てきてるような気がするんだが。

『でも、ずっとこうじゃ…なんかね』

「そ、そう。なら、散歩でもしてみる？そうすればあんたはジンオウガと歩けて、なおかつデートっぽくなるわね」

『あっ、ならその前に体動かしたいんだけど、いいかな』

（幻想郷に来てからというもの、樹海にいた時みたいに動けてないからね。いい加減なまりそうだよ）

体を動かす？

…それはそれでよさそうだな。俺も適当に運動とかしてみるか。

さすがにジンきゅんと同じように――――は今んとこ厳しいだろうしな。そもそも体格違うし。

やり方さえ分かればたぶん一緒に遊ぶとか出来そうなんだけどな。嫁モンスターとやれる日が楽しみ……って今は違うな。

「ええ、構わないわよ。ただし、スペルカードルールっていうのがあるんだけども、それを適応させてもらうわね。…さすがにジンオウガと普通に戦ったらまたアフロになるか、死にかけるかの2択しか浮かばないから」
「アフロ……面白いからありだと思うんだけどな」

（そう笑いながら言われても。くぅ……なんで電撃を食らうとアフロになるのか不思議でならないんだけど、どうなってるの？あれ。…というかさっきから結輝だけ笑いすぎ。なんかお腹を抱えそうになってるし…。そろそろ怒るよ？）

『んんっ！…それはともかくさ、スペルカードルールってこの前の説明で軽く触れられてた奴だっけ？』
「ん？あー…ええ、そうね。それのことよ。そのルールを適応したその上で戦うなら問題ないわ。それで、ボムはどちらにせよ、使っても特に意味は無いでしょうからなしで。ほら、あんたは弾幕らしい弾幕じゃないし。あの雷光虫は……ノーコメントで。私はそれ以外のラストスペル、ラストワードを除いた簡単なスペルを少しってとこかしら」

なんか軽く流されたが、そうだな。
ラストスペルやラストワードはやりすぎになるだろうし。軽く体を動かすだけってだけで本気を出してもあれな話だもんな。
…いや、分かってるからこそ使わないんだもんな。

『なるほど。確かに僕は弾幕なんてはれないけど…。いいのかい？このままじゃ本格的にハンターっぽい動きを要求されるかもしれないんだよ？』
「そういうのでもいいのよ。なにせ弾幕をはりながら殴る蹴るってこともスペルカードルール内でやれるもんだから」

「そういうもんなのかね…」
『そうなんじゃないのかな。でも、そう考えると不思議だね…スペルカードルールって』

なるほど。しかも、「そうね、やる時はやるからそういうものだし、不思議なことではないわ」って言いながら何度も縦に首を振るのを見る限り、冗談じゃなさそうだな。
……それって弾幕ごっこじゃなくて弾幕格闘じゃね？
――とは思ったが、言わんでおこう。

それから軽いルール説明のようなものを受け、博麗神社の境内を使って模擬戦のようなことをすることになった。
俺は賽銭箱（さいせんばこ）の横にある小さな階段みたいなもんに腰かけて観戦することにしたが…ジンきゅんは雷光大爆発を3回してしまうかジンオウガ亜種になってしまったら、霊夢は3回やられたら負け…らしい。
まあ、その方がやりやすいんだろうな。とはいえ、どうやってジンきゅんの部位を破壊するつもりなんだ？
いや、可能だろうが、あっちの世界でいう打撃攻撃が多そうだな。
切断は――少ないだろうが、たぶんいけるだろ。フロンティアでそこそこあるっていう武器種でも難しい？部類らしいが、やれないわけじゃないからな。

俺的にはそうでもなかったけどな。

「じゃ……いいわね？」
『いつでもいけるよ』

そういった軽いやり取りのあと、すぐに戦い始める霊夢とジンきゅん。
頭の中で〝閃烈なる蒼光〟が――だが、このジンきゅんの雷光は碧色――流れたのは俺だけだろう。たぶん。
しかし、そのＢＧＭの名の通りの蒼色でないのが残念だ。
だからといって、俺的にはこのジンきゅんも好きだから文句などあるわけないが。…ってすごい動くんだな、お前ら。

（お手みたいなのを２回、３回やってきたと思ったらそこから色々な攻撃に派生する…。他の人間や妖怪などとやっぱり違うとはいえ…なんか攻撃が似たりよったりだなぁ。――いや、そう感じるだけなのかもしれないけどね）

（ハンターと違う動きをしてくるのはもう分かっていたけど…。なるほど、くすぐったいとしか感じないね、弾幕とやらは。かといって、下手に遊んでると本当に全部位やられかねないからなぁ。動きからしてハンター並みとはいかなくとも、多少はやれるようだし。じゃなきゃ軽く放ったパンチやそこから繋げて行った攻撃をよけれるわけないだろうし。…少なからずとも偶然で避けている人じゃないってことはよく分かった）

しかし、だな。俺は見ているだけなんだが、審判とかそういうのはどうするつもりなんだろうな。
いや、一応それっぽいことはするが、こういうのは知らないぞ？
まあ、でも自衛には役に立つかもしれんし、審判でなかろうがちゃ

んと見ておくか。
弾幕ごっことやらは遊びでしかないんだろうが、真似した動きで身を守れたら万々歳だもんな。
さすがにまだジンきゅんと別れたくないし。あんまりイチャイチャしてないんだぞ。

それにしても帯電チャージはナンバリングタイトルのと違ってスキがあんまり見えないな。…っと、G級と呼ばれていたと自ら言うだけあってもう終わったのか。
でもやっぱり、色は蒼色じゃないんだな…。いや、この色も嫌いではないし、むしろ好きではあるが…仕方ないか。

そういや、霊夢は狩り人とは違う動きなのに、ついていけるんだな。あのジンきゅんに。
って、お？あの動きと雷光虫……まさか雷光大爆発か？

（まだどこの部位破壊もできてないジンオウガの周囲にいきなり雷光虫が……？なんか幻想的できれ――）

「わっ!?……ぎゃあぁあーー?!」

（あっ、かかった。…うん、見とれてるからやられるんだよ。じゃなきゃ、今まさに他の僕と初めて会うハンターみたいなことになんてならなかっただろうに）

――とりあえず、1回目、だな。
でも、画面越しに見る雷光大爆発より実際に見る奴の方が幻想的で綺麗なもんなんだな。
幻想郷に似合うニフラムだ。…なんだが、やっぱり威力はバカにな

らないんだな。
ま、たぶんジンきゅんが勝つだろ。

なんて思ってしばらく見ていたら本当に勝った。ジンきゅんはまだ角1段階、前脚1段階の辺り、弱いわけじゃなさそうだ。
疑ってたわけじゃないんだが、そこはさすがフロンティア仕様ってことだな。
ちなみに1回目以降は2回目は昇牙竜撃によるトドメ、3回目は電光石火による追い討ち……だった。
ジンオウガを知っているわりには結構はやくやられてるんだな。
……いや、違うジンオウガ、か？

『いやぁ、そこそこ動けたよ。協力ありがとね、霊夢』

そういってるが、相手は疲れましたって感じで座ってるぞ？
と、いうか服が若干ボロついてるだけっていうのもさすが弾幕ごっことやらだな。

「…そ、そう。そりゃあ……よかったわね」

（あれでそこそこ…。私的にはかなり動いたように思うんだけど…。やっぱりわけが違う…）

『なんか結構疲れてそうだね。そんなに疲れる？…ちょっと遊んだだけのつもりなんだけど』
「あれでちょっとって…。…だてじゃ、ないのね」

といって仰向けに倒れた。
「起きるんだ、霊夢ー！傷は浅いぞー！」
「そもそも弾幕ごっこで怪我なんて当たる場所が悪くない限りしないわよ。っていうか、なんでそうなってるのよ!?」
「ノリって奴だな」
『んで、霊夢が今してるのはノリツッコミかな？』
「どんなノリよ！あとツッコミなんかじゃないわよ!?」

（たまにノリツッコミに見えるんだけどなぁ。僕の気のせいでもなんでもないような感じがしなくもないし…。人間は複雑だね。だって、そうはいってる霊夢の顔がまんざらでもなさそうだから。……楽しいのは分かるけど、ねえ）

「いや、そう聞こえるんだよな。あぁ、そうだ。聞くのを忘れてたんだが、紅魔館とアリスの好きなものとか知らないか？」
「そうじゃないんだけどもねぇ…。…うーん、その連中とアリスの好み？なにをよく食べてたかしら…。アリスならまだ分からなくもないけども、紅魔館の連中はあんまり見ないから知らないのよね」
「んじゃ、休憩が終わったら俺も体を動かしたいし、そのついでに聞いていいか？」

（あー、確か独学だけど、そこそこの体術かなんかを覚えてるんだっけ？人間相手とはいえ、弱い相手にしていたわけだから霊夢や霊華なら良い相手になりそうだね）

「別にその連中のものの好みなら今でも教えるわよ。んで、教えたら運動につきあうってことで。…ああ、たださっきジンオウガとしたようなのは出来ないわよ」
「なるほど。多少の怪我は避けれないってことだな。ま、考えれば仕方ないがな。むしろ幻想郷に来れた時点でも……お、おおっ!?」

ジ、ジンきゅんが物理的にさえぎってきた…だと!?
おかしなことを口走るわけでもないのにどういうことだ?
ハッ!まさか、ジンきゅんもツッコミ役か?いや、それにしてはツッコミが早すぎるが。

『なんか予想できたけどさ、ご主人…そういうのは外の世界とやらで言おうよ。それに見る人もいることだしさ。見られながらやるってのもいいんじゃないの?』
「うん?見られながら?」

なにを言ってるんだ?と思ったら霊夢も「見る人なんていたかしら」なんて困惑した様子で呟くのが聞こえた。

『ほら、いるじゃん。ご主人がいた場所の近くに』

「…いるわね」
「…いたな」

確かにさっきまでいなかった女がいるな。若干オタク疑惑のある霊夢すら気づかないレベルって早々見かけないもんだと思ってたんだけどな…。
桃色の髪で、頭に2つシニヨンキャップをしてるところを見ると……見ると……誰だっけか、こいつ。
パチュリーやアリス以外は好きっちゃ好きなんだけどってレベルのせいであんまし覚えてないんだよな。

んで、その女は「そこにいる子はなかなか気づくのが早いのね」というとなんかこっちに来た。
誰だっけ、こいつなどと考えながらジンきゅんと霊夢の方に近づいていく俺だったとさ。
まあ、その時の霊夢の顔は少し面白かったが、あとでジンきゅんに

だけ話しておこう。

第8話　面倒な人（？）だと思ったけど

…ふむ、なかなか思い出せない。
いや、思い出す気もない、の方が正しいんだろうな。小説とかそっちはあんまり見てないのもあるし、そもそもパチュリーが一番だからな。
もちろんジンきゅんなどは除く。
「なるほど、最近違うことをするようになったと思ったらこんなことをしてたの」
「そりゃ違うこともたまにはするわよ。これでも一応博麗の巫女なんだし」

一応…って普段はなにしてるんだか。
見た限りじゃ巫女らしいこともほとんどしてない気がするんだけどな？強いてあげればこの幻想郷案内や住民の紹介――――一部だけどな――――だけだな。
それ以外のことをあんまり見てないし、なんかほとんど知ってることと違うからよく分からない……というか霊夢のことは忘れてるところがあるし、あんまりイメージがわかないな。
「それに、そういう華仙は動物にしつけをしてるんじゃなかったのかしら？」
「ええ、してるわよ。しつけ？とやらはちゃんと」

ふむ、しつけ…？
っていうか、なんで霊夢と違って〝しつけ〟のところが疑問符なんだ？
「なあ、お前。その動物って飼ってるのか？」
「そうね、飼ってる子とそうでない子がいるから完全にそうとは言えないけども。でもあれ、私的には〝導いてる〟と思ってるのよ。ほ

ら、可能性を見せて貴方にはこういう道もあるのよって指し示す……みたいな感じにね」
『下手したら動物園の職員だね』

なんかジンきゅんが呟いたんだが、小声のせいか聞き逃した。
霊夢も霊夢で首をかしげてるが、うん。こいつ、俺が幻想郷(こっち)でいう外の世界でたまに読んだ異世界転生とかそういう類(たぐい)のやつだろうな。
なにせ霊夢達幻想郷メンバーのうち、アニメやマンガ、ゲームなどを知るやつなんていない。
その流れでいえばジンオウガや狩り人なんぞも知らないのが普通なんだが……。知ってることがある知り合いと顔見知りになったばかりの頃にそっくりなんだよな。

「んで、そこの1人と1頭が外来人…であってる？いえ、そうよね」
「一応な。……それで、華仙だっけか。お前ってなんかここに用でもあるのか？」
「最近霊夢が珍しく修行を後回しにしてるもんだから、でいいかしら？ま、その様子を見る限り仕方のないことのようね」

首を横に振ってから呆れたようにそんなことを言う華仙とやら。
いや待て。原作の霊夢って修行…してないよな。そのせいで二次創作だと色んな扱いをされてる――――らしいとある知り合いがそいつと他東方ｐｒｏｊｅｃｔを知る友人らを交えて話した時にそこそこ気にしていた――――はずなんだが。
もしかして、もしかしなくともイレギュラーなのは霊夢、なのか？

「仕方ないじゃない。でも、案外このジンオウガ強いのよ。遊ぶとよーく分かるはずよ」
『いやでも、普段狼みたいな大きさだから外見じゃ分かりにくいと思うよ？それに、こっちでの縄張りも作ってないわけだし』
「そういう問題じゃ……まあいいわ。それで、黄色い2本の角、ど

う見ても強靭(きょうじん)そうな尻尾や脚、そして幻想郷にはいないその甲殻や毛を持つ貴方があの件(くだん)の妖怪ね？」
「どんな共通認識になってるんだよ…。どこからどう見てもジンきゅんはモンスター、だろ？」

そこに「あっ」と声をもらしたのは霊夢だった。
お前、知ってたんだよな？……な？もしかして、妖怪とモンスターの違いを教え忘れてたとかじゃないよな？
と、いうかいつこういう知り合いと会うんだろうな。俺達とほとんどいるのに。
ま、話のすり合わせの方は霊夢達がどうにかするだろうし、考えんの現状のことに変えるか。
ひとまずここまで霊夢の性格などが違うんならある知り合いに似ているってだけだろう。
もうそいつとは知り合い以上であるが、そいつと違うのであれば性格がなにかしらで変わった霊夢と思うしか……いや、ありだな。パチュリーの方が好きとはいえ、霊夢のことも好きだからな。もちろん原作通りの方、な？
この性格の霊夢もそりゃ悪くないが、今は保留だな。

「いけない。モンスターのこと、すっかり教え忘れてたわ。…んで、それはいいけどなに悩んでるのよ、結輝」

（「なにも悩んでないぞ」と言うけど、腕を組んで首をかしげたりしてたよね。考えて悩んでるようにしか見えないんだよ？）

「あぁ、そうそう。いい加減名乗らないと、ね。すっかり忘れてたわ。いつも先代がいたものだから、ついね。…私は茨華仙よ。貴方達は？」
「俺は一応神風結輝だ」
『うーん、僕はジンオウガ……っていえばいいの？そもそも名前なん

てないし、名前をつけたところでどうしようもないかもだけど』
「っと、お前達が俺達ようなのことを外来人と呼ぶが、俺達の追加情報として、俺は外の世界でパチュリーなどのことを知ってる。アリスや霊夢のこともな」
「はいはい、そこで外の世界で検索できることを持ちこまない。華仙には言ってもどうせ分からないでしょうから」
「霊夢、今の…聞き捨てにならないわね？」

それを「華仙が怒ったわ。明日は雨かしら」などと茶化す霊夢に「そんな言い方、あんまり聞かないわね」と半目で呆れたように返す茨華仙。
お前ら、仲良いんだな。羨ましいぞ。
……パチュリー相手だったら余計に、なのだが今のシチュエーションは霊夢と茨華仙なんだよな。
いや、性格が結構変わってるこの霊夢は仲良くなりたいあの2人と仲が良いのも……おっと、この状況とは違うか。

「そういや東風谷早苗って子もいるのか？」
「ええ、いるわね。私にとっても向こうにとっても良い好敵手よ。宗教的にも、弾幕的にも、ね」
「…そこによく話す相手、っていうのを付け足したいわね。霊夢、貴方は仕事や修行をしてるからといって他の場所に行き過ぎなんです」

（…いや、あなたも相当こっちに来てると思うよ。里でもよく見かけるし…）

「ほんと、あんたって母親みたいに気にするわね」
「貴方もそうやって流すのね。もういつものことだし、簡単なものとはいえ、修行してるからいいわ」
『……親が子に教えるような感じがするね。霊華とやらと似てるって気もするほどだし』

（いやぁ、まさかそんな少し考える仕草をするとは思わなかった。もしかして、霊華とやらもなんかしてたのかな。…え、あれ？人間って体をはって教えるとかそういう教え方はしないはずだよね？）

『それより急に現れるって電光石火以上のはやさだね。そういう能力かなんかでもあるの？僕以外にはキリン特異個体がやるとしか知らないんだけど』

「麒麟（キリン）のことかしら？恐らく似て非なるものかもしれないでしょうけど。あとそもそも貴方も不思議な生き物なのよ……。そうね、貴方達がそんな警戒するようなものではない、とだけ伝えておくわ」

「そうね、その麒麟とあのキリンはとても似てるわ。見てくれは銀色のユニコーンっぽいし、能力も雷使ってくるしと。名前も一緒だしね。……でもあの子、古龍種なのよねぇ。――だからそうやって半目で呆れたように見てくるのはなによ。ボケでもなんでもないのよ？」

ふざけてないことぐらい、豊かな表情と態度で分かるわ。

それよりもパチュリーとかより外の世界に詳しいとは……もしや、俺と同類?!

いや、しかし…パチュリーに聞いても博麗神社に遊びに来た霧雨魔理沙に聞いてもゲームはないらしいんだよな。

ま、友人にはなっておいて損はなさそうだな。そこの華仙とやらは別にどうでもいいとして。

『ハンター曰く〝見た目は古龍種じゃない〟ってほどらしいからねぇ。……かくいう僕もたぶん2本の角さえなければ狼と勘違いされてもよさそうだね』

「…それはそれで手の焼ける動物になりそうね。と、それだけじゃないのよ。霊夢、貴方その1人と1匹のこと見てる？最近よく湖の妖精達がちょうどそこにいるジンオウガみたいな奴に一回休みにされて

ると結構動物達の間で噂になってて大変なのよ」
『それは僕にイタズラをしかける彼女達が悪いかな。ほら、僕ってば元々はハンター達と戦ったり、他のモンスターと縄張り争いしたり……そういうことが多いとこにいたから、ついくせで身構えたり、攻撃したりしちゃうんだよ。理解してくれると助かるのになあ』
「……無理ね」

(そんな同時に言わなくても。妖精達がイタズラ好きで、そこまで頭はよくないって分かってるからこそ余計にかわいそうだよ?……いや、だからって諦めたような顔しなくても…)

「そういや華仙とやらは博麗神社の用事はいいのか?」

少し忘れかけてたのか〝あっ〟って顔になった。
おいおい、いくらジンきゅんがペットという家族にしてもかなりいいほどに可愛いからって忘れちゃダメだろう?
…いや、結構もった。モンスターの嫁、略してモン嫁にしたいほど可愛いとはいえってとこかな?

「霊夢、たまに昔の貴方らしいとこが最近出てきてるからその説教をしにきたのよ」
「……この間の雷獣のこと、忘れたとは言わせないわよ?」

なんか関係ない話になってきたもんだから話からおいてけぼりだな。
あ、だがちょうどいいや。ジンきゅんに霊夢も巻き込んでパチュ

リーと仲良くする方法を相談するか。
ジンきゅんに〝俺達の秘密な〟って言えや分かってくれるだろ。
「なあ、ジンきゅん。ちょっといいか？」
『わざわざ小声で言ってくるってのはもしかして内緒事？』
「まぁ、そんなとこかな」

ジンきゅんが意外と頷いてくれたから続けるか。
んで、茨華仙とやらが行ったあとにでも霊夢に伝えるか。
たぶん俺とジンきゅんだけじゃあの大図書館に引きこもるパチュリーと仲良くなるのに時間がかかりそうだしな。

（……ご主人、この性格がやけに違うらしい霊夢と仲良くやるつもりが一応はあるんだね。今んとこパチュリーと仲良くなりやすくなるための手段と考えてそうだけど。僕からすればもうパチュリーより先に霊夢と親友になってしまいそうに見えるんだよね。気のせいでもなんでもなくて）

「霊夢ー！ちょっとあなたの酒（これ）の作り方教えてもらえるかしらー!?」
「あー、分かったわー！」

そう叫んで倉庫っぽい場所に霊夢が行くと……必然的に俺、ジンきゅん、茨華仙しか残らないんだよな。
話の本題に移れなかったが…仕方ないか。

と思いつつ話してみたらかなり話があった。
ってなわけで霊夢と霊華が酒の仕込みが終わって一旦こっちに戻ってくるまでめちゃくちゃ動物に関して話した。
動物的な話だけだが気があう相手だと思った。

第9話　ジンオウガは〇〇だった？

なんか霊夢や霊華など幻想郷メンバーとあれやこれや話していたら、紅魔館からお茶会の誘いが来た。
何故か霊夢と魔理沙とやらも一緒だが、フランの存在を考えれば無理もない…のか？俺にはよく分からないが。

因みに現在の俺の事を振り返るために考えるが、今の俺なら下級妖怪などは案外追い払う程度の強さにはなったんじゃないのか？ジンきゅん達がそう言うんだからそうなんだろう。
ついでにジンきゅんともさらに仲良くなれた。元から良いようなもんだったけど、〝更に〟だから俺的にはよし。

我ながら頑張った出来事だと思う。

いやぁ、それにしても幻想郷の住民って案外性格が変わった霊夢のおかげか外来人への理解があって助かったわ。
原作通りじゃないし、俺の知る情報がとは少し違うこともあったが、たぶん幻想郷だから仕方ないってことで片付けることにした。
まぁ、霊夢曰く「最近たまに聞く食べられた外来人は相手が下級妖怪でない限り痛みも恐怖も味わわずに死んでるはずよ」とかどうとか言ってたが、なにを教えたんだ、なにを。

「……あとは霊夢は外の世界を余分に知ってるだけだった……でいいかね？」
『ねぇ、ご主人ってあんまりそういうことしないから聞くんだけどさ、そういうことをして面倒くさくないの？』
「そうやって人がせっかく真面目に振り返ってるっていうのにそういうツッコミはやめないか？ジンきゅんよ」
『いや、そりゃ言うよ。今までご主人はそこまで真面目な顔をしてなかったような気がするし。単に僕がご主人のことを知らないってだ

けかもしれないけど』
「知らないなら教えまくるぜ。……とそうじゃなくてさ。俺だって真面目なときぐらいあるよ?」
(一瞬ふざけたと思ったらどこか落ち込んだ顔になった。やっぱりご主人達人間は不思議だ)

『んん、そういえば話を変えるけど、パチュリーとやらとは仲良くなったの?僕が知る限りでは顔見知りか友達未満?っぽいけど』

そりゃ仕方ない、と俺はジンきゅんに呆れながら言いつつ口元を笑みの形にした。
二次元の美少女とすぐに仲良くなれるとかそれなんてチート?って逆に聞いてやりたいし。

「が、むしろ初対面から時間をかけて友達になれたんだ。強いて言えば幻想郷に来たのも嬉しいが、ジンきゅんと会えたこともめっちゃ嬉しいんだよな」
更に本音を言えば、パチュリーと親友になりたかった、だな。
そんであわよくば恋人……はまだ無理なようだ。ま、仕方ないか。
『それは本音だと言うんだからご主人というのはなかなかブレないね。そろそろ関心させられてしまうよ……そ、そこまで褒めてないよ?』

大げさに嬉しそうにしてみせたら若干引かれた。
嫌そうにされたり、微妙な反応よりはいいじゃないか。
なにせジンきゅんはパチュリーと同様に好きなモンスターだからな。俺からすればそのキャラクターを好きになるのと一緒だ。…た

ぶんな。

「別にいいだろうに。……しかし、ジンきゅんよ。俺の気のせいでなければ最近他の妖怪に恐れられるようになってないか？二つ名的にもしょうがないと思うけど」

なにか考えてるのか不思議そうに見てくる。別に黙られてもなんも思わないから平気というかだいぶジンきゅんが人間味おびてて可愛い。しかも、今のでこっちを見て首をかしげるジンきゅんも可愛いな。

狼サイズってのもあってもうこの子が飼い犬でいいと思うんだ。

いや、飼い狼……？

（やれやれ、ご主人もなにを考えてるんだか。別になんでもいいんだけどさ）

『〝無双の狩人〟のこと？……あれは向こうの人々がいつの間にか付けた代物（しろもの）だからね。僕にはそれと関係あるとかないとか言えないんだけど。まー…たぶん…関係ないんじゃない？』

「ジンきゅんは強いから仕方ないな。…いや、俺の言い方も悪かったか。最近下級妖怪以外にも出てきてないか？ジンきゅんのことを恐れるやつ」

霊夢、霊華、魔理沙、咲夜とかそういう人間の里にいない人間とかは別に含めないとしても――もちろん里以外でなおかつ唯一の男である森近霖之助とやらは除く――なんか一部妖怪が距離を持つんだよな。ジンきゅんとの。

（んー、僕からすれば向こうが悪いんだけどな。ご主人と共に外の世界から来たとは言え、実力差を鑑みずに襲いかかってくるのがいけないんだから。ま、ご主人にもある程度実力をつけてもらったんだけど

ね。じゃなきゃご主人の性格上、後々面倒だろうし）

『そればっかりは襲ってくる方が悪いと思うんだ。僕は手を出してくるまでなんもしてないし』

「ふむ、それもそうか」

と言いつつ、俺は左側にいる狼サイズのジンきゅんの頭においてなでていた手を止め、賽銭箱（さいせんばこ）にもたれかかるのをやめた。

んで、春の陽気にのんびりせずどっかの紅白巫女は倉庫に入ったり出たりしてるんだが、なにをしてるんだ？

「おーい、そこの巫女ー。なにしてるんだー？」

『修行もどきを朝早くからやってたし、なんかしてるんじゃないの？』

（そういうご主人はさっきまで賽銭箱にもたれかかってたけどね。放っておいたら寝るんじゃないかな、って思うぐらいにはボーッとしてたし）

「ん？あぁ、そのなんかってこのスピリタスの試作品のことかしら？」

「いや、なにを作ってるんだお前は」

「なにって……度数９６のお酒を作ろうとしているだけじゃない。まさに真・鬼ごろしってね」

「あ、あぁ…それは…」

（ご、ご主人がなんか笑いだした……。僕にはどういう意味なのかいまいち分からないんだけどなぁ）

「ほぼ純粋なアルコールならきっと、鬼だって一発で酔うはず……ってね」

『鬼って…確か前に教えてくれてたけどさ、飲ませられるの1人だけじゃないかな』
「あ、暑さじゃ燃えないとは思うんだけどもね……」
「案外燃えたりしてな」

笑いを多少こらえつつ、冗談でいったら「それは勘弁してほしいわ」とか霊夢が言ってきた。
真に受けてるわけじゃなさそうだが、からかいがいのある奴だ。
「……でも、ありえない話ではなさそうね。やっぱり地下へ持っていくのはやめるわ」
「持ってく気だったのか、お前?!」

それに対し、「オフコースよ」と言いつつ頷く霊夢。…お、お前なあ。
『つまり…結末はこんがり紅白巫女?』
「だからって人に〝上手に焼けましたー〟とか言わないでちょうだいよ?そもそもそれだと死んでるじゃない…」

そりゃそうだ。今のあれはこんがり肉に例えられてるけど、本人は人間だからな。
下手に焼けたら死ぬだろ。……不死身とか不老不死以外は。
「それもそうだが、何故スピリタスなんて作ってるんだお前。相手が相手なだけに大変になるんじゃないのか?」
「あー…厳密に言えばスピリタスもどきを、なんだけどもね。それで理由は簡単よ。ほら、あの鬼達は酒をすすめてくることが多いでしょう?いい加減、進められる側の人間の立場にもなってほしいのよ。大体付き合うと二日酔いになること間違いなしだし」

そう言われても、ってとこなんだよな。

なにせまだ俺はその伊吹萃香――確かそんな名前――とか星熊勇儀――みたいな名前だったはずだ――などと1度たりとも会ったことがないし。

『ハンターのお酒とか持ってこれた方が良かったかな？』

「そっ、それは遠慮願うわ」

（下手したらシリーズによってキツいお酒とかありそうだしね。二日酔いですまなくなりそう…）

なんか霊夢の顔が引きつったが、まあ無理もないか。

最後に遊んだのが前だからあっているか微妙だが、設定的にキツい酒とかあった気がするんだよな。

『んで、本題に移してもいい？僕からしても今回の紅魔館からの誘いはおかしいし。例え僕のことを君が幻想郷全体に教えていたとしても、〝モンスター〟や僕みたいな〝G級モンスター〟などの意味を理解できないはずだよ。そうなれば君達幻想郷の住民からすればどう映るか。…外の世界とやらの知識がやけに豊富な君なら言わずとも分かるはずだよね？』

「うーん…だからこその私と魔理沙だとは思うんだけどもねぇ。あの連中があんたらに異変を仕掛けるほど馬鹿じゃないはずだし…」

だからってそんなに悩む仕草をしなくてもいいだろ。……まさかするかもしれない、とかって言いたいのか？

確かに紅霧異変――確か東方紅魔郷とかの異変がそう言うんだっけか――をやったのはあのメンツらしいが…俺、パチュリーのとこだけ攻撃しないなんて縛りをしたとかそんなぐらいだったしなあ。

そもそもパチュリー以外のことは曖昧にしか覚えてなかったのもあって、俺には想像しにくいな。

『まあ、いいや。僕からすればわりとどうでもいいし。本題は別なんだよね』

（どう聞いてもあれが本題に聞こえるんだけどな？）

『……それって僕も招待されてる？されてるとして、僕はハンターなどのように紅茶とかは飲めないよ？』

「「……あぁ」」

そうか、そういうことか。

幻想郷にジンきゅんみたいな格好の奴、今のところ出てなかったもんな。

そもそもジンきゅんはどうやら人の姿になれんようだし。

ふむ、問題だな。

「狼っぽいサイズを活かしたらまだ行けなくも……でも、入れ物はそれ相応になってしまうのがネックかしら」

『え。……幻想郷はなんでもありなのかな？』

（うん、ジンオウガがそう思うのも仕方ないね。座敷わらしだとかチュパカブラとかいる幻想郷（ここ）なら狼って扱いに出来ないことはないだろうし）

「まあ、どうにかなるだろ。スープとかをよそう皿があれば飲めないことはないだろうしな」

『やれやれ……別にいいんだけどさ。前みたいなことがないことを願っておくよ』

前みたいなこと？……あぁ、ジンきゅんの性別が女子だとわかった

時の話か。
あの時はレミリアとやらに〝しゃべる〟、〝珍しい生き物〟、〝僕っ娘だった〟とかもあってああなったんだっけか。咲夜と俺が入り、更に騒ぎを聞きつけた魔理沙がまさかの助っ人に入ってくれて止められたんだっけか？

「たぶん平気よ。今度のお茶会までにはなおってるはずでしょうし」
と霊夢が言った後、小声で「痛い目にあってるし…」みたいなことを呟いた。
桜が咲いてる季節な上に風がほぼないから全部聞こえてるんだよな。
全部、といったが時々ウグイスが少し鳴いてるんだけどな、遠いからかそんなに聞こえない。

だからどうしたって話なんだが。

『んじゃ、今度のお茶会とやらに準備でもするかな』
「なにをするんだ？」

（準備なんていらないんじゃ…？）

『ちょっと買い物みたいなことをするだけだよ』

そういうのはいいんだが、なんか嫌な予感がするぞ。
…ジンきゅんよ、変なものは持ってくるなよ？
そう思いながら俺はジンきゅんを再度なで始めた。

第１０話　気まぐれ吸血鬼のお茶会

……それから数日もしないで博麗神社で集合する日になった。
なんていうか、あっちの気まぐれってやつなのか？

「前倒しになった…とかじゃないよな？」
「ええ……そうだと思うけれど、どうなのかしらねぇ。レミリアはそこそこ気分屋だから…」

縁側に座る霊夢が悩むようにいうが、連絡手段なんてないのか？
いや、そういやないんだったな。だからしてないわけだし。なんか持ってるくさいけど、俺にあんまり見せないからな。なんか理由でもあるんだろ。
ま、俺はいざとなればジンきゅんと……いや、そもそも誰と連絡するんだ？

閑話休題。

そういや以前の俺は霊夢のことを同類だのどうだのとやけにしつこかったな。
そんなに物忘れするほど歳をとってないはずなんだが…。そもそも、俺はまだ１０代後半だし。
……はぁ。どちらにせよ、この場に古明地さとり――――って名前だっけか？――――がいないことに感謝しかないな。

『それはいいけど、あとは魔理沙が来るだけなんだっけ？』

（ジンオウガも首をかしげるんだ…。なんだろう、人間にあわせてるとかそんなんじゃないよね…？いや、あわせてるんだろうなぁ）

「まあ、そうね。魔理沙も1人で行けないわけじゃないのよ。でも、私

のに魔理沙は私が同伴してないと入れないって書いてあったのよね」
「お前は信頼されてるんだな……」

霊夢が信頼されてるというよりは…魔理沙が〝生きてる間は借りる〟ってのを何度もやってるせいだろうな。

『なんかやらかしてるんでしょ?その魔理沙って人間は。……僕や他の個体も縄張りに入ったやつのある程度には追い出そうとしてるし』
「追い出すってか、あれは撃退に来てただろ。サードからフロンティアまでやってる上にジンきゅんのなら動きまでちゃんと見てるんだからな」
「それとこれは違うと思うんだけども。…まあ、色々やらかしてるからしょうがないとしか言えないけどもね」

そりゃ呆れるよな。
たぶん霊夢もよく紅魔館のメンバーの誰かから教えてもらってる可能性もあるし、本人からってのもありえそうだしな。
……どちらにせよ、パチュリーのこと以外はそこまで知らんくてもいいかな。霊夢が教えてくれるわけだし。
もちろんパチュリーのことも追加で教えてくれるから感謝はしてる。

っと、魔理沙っぽいのがきたな。
「おー、待たせたなー」
「そんなに待ってないわよ。……あと箒(ほうき)の上にあまり立たない方がいいわよ?」
「別に大丈夫だろ?」
「いや、普通に下から見えるから言われてるんじゃないのか…。って

いうか霊夢は半目で見てやるな。自分がそこそこ速いから見えてないとか思ってるんだろうしさ」

（…ありえなくもなさそうだね、それ）

霊夢がそう頷くってことは大体俺の考えてることと一緒なんだな。

『とりあえずやんちゃな魔理沙とやらは放っておいて。全員いるならもう行ってもいいんじゃないかな？』

「それもそうね。…結輝とジンオウガはいつでも行けるのでしょう？」

『うん。この短距離ぐらいだったら余裕だしね』

ジンきゅんからしたら博麗神社から紅魔館までって短距離なんだな。

っと、返事が面倒だから頷くだけでいいか。

「ん」

「その放置プレイはよくないぜー。あ、私もいつでも行けるぞ」

「そりゃあんたは来たばっかりだものね」

「間違いないが、軽くあしらわれるのはちょっと心にくるんだぜ？」

冗談気味にいう辺り、平気そうにも見えるけどな？

それに口元緩んでるし。

どうせ冗談かなんかのつもりなんだろうな。いや、そうなのかもしれんが。

狼より大きくなってもらったジンきゅんの背中にのって霧の湖へ向かっている。
霊夢と魔理沙は超低空飛行してるが、霊夢は見えないようにうまくやってるし、魔理沙は箒に座ってるから元から見えない。なにが、とは言わないが。

もっとも、そんなことしなくても前にいる2人は地面から多少浮いているだけだから下から見ようとするやつしか見えないと思うが。
俺はそんな覗きなんて興味なんてないが。
それよりもときおりスマフォっぽいのを取り出してる方が気になるな。今度聞いてみるか？

『そういや前のあれ、よく平気だったね。一応あの状態でやれることは結構してた方だと思うんだけど』
「……あぁ、お前が全体的に白くなって、ほんのり赤黒く光ってた時の話だな。一応あれでも善戦したつもりだから、なんとかならなきゃ困るぜ」
呆れたように笑うが、そりゃ苦労もするわな。
フロンティアで捕獲したあと、色々した結果がこのジンきゅんなもんだからな。それが亜種化すれば余計だろう。
「いや、むしろよくぞやったってとこじゃないのか？」
「それ以前に紅魔館の奴らはなにを聞いたんだか。次の日行ったら咲夜が愚痴ってきたわよ？あとパチュリーも」

女だって驚いた以外にもあったっけか？
あったような気もするが……忘れて曖昧だし、別にいいか。

『僕にとっての逆鱗にふれるセリフだった、としか教えないでおくよ。なにせあいつらの自業自得だしね』

「あいつらって……。やらかしすぎだろ」
いや、魔理沙……お前、笑いこらえながら話すって、今のどこにうけたんだ？
面白いとこなんてなかったように俺は感じるんだが。
「あー…なんとなく想像ついたわ。確かにあいつらならジンオウガに言いそうなことがいくつかあるわね」

んで、そう言ったあとに「それよりも結輝。あんただけジンオウガに乗れるの羨ましいわ。そのうち乗せてよ」とか言うんじゃない。お前は俺やジンきゅんと違って飛べるだろ。
と俺が言う前に魔理沙がそのことをつっこんでいた。

そろそろ俺も幻想郷に慣れる頃だし、ジンきゅん以外の霊夢、魔理沙に対してボケをかましてみるのも悪くはなさそうだな。
あとは霊夢にパチュリーのことを色々聞くとか。……あ、そうでなくともだいぶしてたわ。

――――っと、景色から結構浮いた赤色の館が見えてきた。
何度も見たが、紅魔館ってやっぱり浮いてるんだよな、景色から。
湖にある島のとこにある、ってのもなかなかあれだな。
ジンきゅんがいなかったら最悪泳ぐはめになりそうだな。……パチュリーさえ紅魔館の外に出てくれれば楽そうなんだけどな。仕方ないか。
んで、とりあえず見えてきたから降りるか…と。狼サイズになるの早いな。

「霊夢、魔理沙、外来人が……1頭と1人ね。要件はお嬢様から聞いてるわ。客人として迎え入れるとするよ」
…前に会った時とあんまり変わらないのな。美鈴だから別にいいが。
不信感さえ抱(いだ)かれないようにすればいいんだしな。

もっとも、俺は紅魔館に出入りできなくなるとパチュリーと親友、あわよくば恋人……とかになれなくなるしな。それは困る。
「んじゃ、入るわね～美鈴」
それっていつも思うが、手を振りながら入るのってこの霊夢だけじゃないか？
その他は普通の魔法使いって例外を除いて門番のいるとこから入ってるしな。あと十六夜咲夜だとかってメイドくらいか。
ふむ、そう考えるとますますパチュリー達と仲の良いこの霊夢が羨ましくなる。
もちろん、霊夢がこうな時点でそれ以上はないが。
逆に色々と教えて貰えて助かるし。パチュリーの事とか、今の幻想郷についてとか。
霊華って奴がやけに霊夢に対して過保護気味だから、そろそろ勘弁してほしいのだが。本人も呆れてるし。
…まぁ、これは先代の巫女がいないとこでその本人から聞いたことなんだけどな。

閑話休題。

紅魔館に入ったのはいいんだが、咲夜って急に現れたりするよな。
……移動してる姿の方はシュールそうだからあんま想像しないようにしてるが。
いや、ナイフとか紅魔館の掃除が大変なんだったな。特に後者は…

まぁ、仕方ないんじゃね？
　中の方がこんなにも広いんだからな。どこのお城だよってレベルで。日本じゃそんな広さの場所の方が少ないからな。
「あら、いらっしゃい。霊夢達と結輝、およびにジンオウガとやらね？」
「咲夜、私が抜けてるのはわざとかー？」
「ええ、そうよ。なにせ貴方は素行が悪いんだもの。冗談で外されても文句は言えないはずよ？」
「全く相変わらず酷いぜ。今回はなーんもしないってのにな。素行が悪いのも咲夜がそう感じるだけだと思うぜ」
　そういう魔理沙に軽くあしらうかのように対応する咲夜。見慣れたものだ。
「はいはい、そうね」と言うあたり、たぶん聞き流してるんじゃないか？

　そのあとは部屋まで咲夜と魔理沙が、霊夢と俺とジンきゅんが他愛ない話をしながら進んだ。
　若干パチュリー関係もいれたが、普通に教えてくれた。さすがに魔導書とかも読んでるとかって話はよく分からなかったけどな。
「さて、こちらにお嬢様〝達〟がお待ちになられてます。どうぞ、ごゆっくり」
　……ん？達のところを強調するなんてどういう風の吹き回しなんだ。
　しかも、さり気なく俺の方をチラって見てきたし。こんな奴だったっけ？
　まぁ、いいや。別に今分からなくても入りゃ分かるしな。
「あぁー……咲夜がなんかやったのね。なんか珍しいことをするわね」とか「お、おい待てよ霊夢。私にはどういうことか全く分からないぜ」とか聞こえる気がするけど

『へぇ、なるほど。なんとなく僕も分かったよ。確かに、洒落なことをするんだね』
おおう…ジンきゅんがまさか遮るとは予想外だぞ、俺。
「相変わらず霊夢はどっかの誰かと違って天然じみてないし、察しがいいのね。ジンオウガは…意思疎通が可能なだけあって、理解もできると。お嬢様が気に入るのも頷けるわ」

――お前らなぁ。今度ふざける時は覚悟しろよ？
おもう存分ボケてやる。……予定にしておこう。
先代の巫女が真面目すぎてボケが通じないという悲惨なことがあったぐらいだしな。もう３０分も説明するのは勘弁だ。

とか思いつつ、入った先にはレミリア以外にパチュリーがいた。
いや、レミリアしかいないって聞いてたんだが!?
俺得だから別にいいんだけどな。…なんでだろうな？
霊夢が内緒にしていたのかもしれないとかは別にもういい。終わったことだしな。いやぁ、だからってこんな面子なんだろうな？

第11話　雷狼竜はある意味苦労人

……それで、俺とジンきゅんがレミリアとパチュリーの向かい合わせ、俺から見て左に霊夢と魔理沙、だな。
なんだこの組み合わせ。

「律儀に座っている辺り、その生き物はなかなか器用ね。本当、欲しくなるぐらい」
(そもそも幻想郷における妖怪というジャンルで片付けられないほどの強さな僕をこの吸血鬼や横にいる魔法使いなどが抑えておけないことぐらい分かるだろうに。吸血鬼の妹や門番にいる妖怪、妖精メイドなどもたぶん抑えれないだろうし。……せいぜい時を止めるらしい十六夜咲夜って人間だけかな。ま、とは考えるけどさ。たぶんその人1人じゃそのうち無理になるね。まだ亜種化した僕までしか見せてないから)
ジンきゅんさ…そう分かりやすくため息ついてやるなよ。ある程度は分かってて言ってんだろうし。
なにせ前回のあれでこりるはずだろうしな。

「はいはい、レミリアの冗談はさておき「あら、霊夢には冗談として聞こえるのね?」とりあえず、質問させてもらうわよ。お茶会を早めた理由とか何故結輝…今は外来人と呼ぶわね。それとあんたらにとって正体不明なままなはずのジンオウガ」
ほんと、あっさり無視するよな…。
いい加減、霊夢のその対応から手馴れ感がしてきてるような。
これがツッコミスルースキルか!

(ふむ、やっぱり普通に流すわね。想定内だから驚きもしないけど。咲夜に話した通りになっただけのことだし)

「俺的にはジンオウガって分かってるからいいんじゃないかな」

「結輝は幻想郷で通じないエルシャダイネタを使わないの。んで、レミリアとかはそういうのが分からないはずはないでしょう？」
別にいいだろ。ツッコミ役がいて、かつ元いた世界みたいにふざけてもよさそうだってのに、ふざけない訳ないだろう？
理解できそうなのは霊夢以外にジンきゅんと霊華ぐらいとは言え、ボケてふざけたいもんなんだよ。
「特に意味はないわ。強いて言えば正体がいまいち掴めてないとか恐れる必要がないってことかしら。まぁ、霊夢と先代の巫女の霊華は出来なきゃダメでしょうけど」
博麗霊華だけ先代呼びなのな。
別にいいんだけど。
「本当はそれだけじゃないのよ。レミィはある意味第3、第4の外来人にあたる貴方達に興味を持っているってとこかしらね」
「あら、パチェ？そういう貴方も以前より物知りな霊夢が教えてきた1人と1頭について珍しく気を引かれたそうじゃないの。だから咲夜だけでなく、今回は小悪魔にもどうにかそそのかせたというのに……」

どっちもどっちなんかい。
もうどっちも興味を持った同士でもいい気がするんだが？あ、でもあとで霊夢に感謝しておくか。
一応ここまでトントン拍子でいけたのは霊夢や魔理沙のおかげだしな。あとたまに霊華。
…いや、あの東風谷早苗とかいう人も含め…なくていいか。お台場にあるガンダ――――じゃなかったスパロボに出てきそうな物の話を熱く語り合っただけだから違うか。

「どっちも興味を持ったでいいだろ。それだったらまだあの霊華の方が馬鹿正直だぜ」
「とりあえず魔理沙、今のは本人の前で言ったらダメよ。どうなるか分かったもんじゃないから」

『まー、そうなったら僕は神社の屋根から魔理沙のことを見てるよ』
「おい、それ酷くないか!?」
「やれやれ。それだったら霊夢どころかパチェも遠目で見る程度でしょうね」
「お前らなー!?」
などと話すのはいいが、だいぶ本題とズレてるんじゃないか?
まあ、俺としてはこのままでいいと思うが。強いて言えばパチュリーと話を、だな……
――コン、コン、コン
「お嬢様達にお茶を作りました。失礼いたします」
(おっと…ちょっと魔理沙のこと、いじりすぎたかな?なんか本題からすっかり離れちゃったような…。そもそも本題ってなんだっけ?)
…そういや、お茶会かなにかだったな、呼ばれたの。
ふざけててすっかり忘れてたわ。むしろパチュリー見てて忘れた。
置くのを見てて思ったが――なにげにジンきゅんの分もあるんだな。

あ、そうだ
「なあ、咲夜」
「相変わらず貴方は私のこと〝も〟呼び捨てで呼ぶのですね。それで?なにか用でもあるのでしょうか」
レミリアもいる以上、敬語で聞いてくるんだな。
まあ、大した用事じゃないし、言うか。
(私のことも…って前々からしてたのか?いや、別にいいか。人懐っこい性格っていえばそこで終わりだもんな)
「いやなに、ガムシロップか砂糖でもないかと思ってな」
「……まさか」
まぁ、分かるよな。それだけで。
「なるほど、外来人の結輝は甘党なのね」

「私は分からなくもないわ。読書ばかりしてるとたまに甘いものが欲しくなるもの」

いやぁ、レミリアとパチュリー。霊夢を引っ張って――――先代の巫女は時々勝手についてくる――――紅魔館へ行くことが増えたが、話してないことがあったな。

俺、日によって紅茶を飲む時にガムシロップを１０個以上はいれるんだよな。もちろん、ミルクもいれるが。

（…あれ、咲夜が呆れてるような？気のせいかな。いや、なんかため息ついた）

「お嬢様、ところであの事は話されたのですか？」

「……これから話すわ」

やっぱり本題からズレてたのか。

「んで、貴方達。まずは――――」

紅魔館から出て、博麗神社に帰ってる途中から思っていたことがある。

ジンきゅんが先に幻想入りとはなにそれ羨ましい。出来れば俺と

ほぼ同時期にしてほしかった。
他にわがままを言えば、紅魔館の近くに出るとかそういうのがあれば……
っと、そうじゃないか。一応霊夢――――霊華も不器用ながらもやってくれた……のか？――――が手伝ってくれたからパチュリーともすぐに仲良くなれたのは事実だしな。うーむ…。
そういやレミリアを遮って霊夢が教えてくれたが、俺とジンきゅんを幻想郷に送り込んだ張本人は八雲紫ですらなく、音羽多麻（おとわたま）っていう知り合いの気まぐれってどういうことだよ。送られてありがたいじゃないか、こいつめ。
魔理沙が特に一番呆れていたような気がしたが、本当のことだからいいじゃないか。喜んでも。

それに中身がここにいる霊夢同様違うというのになんて奴だ。感謝しきれんぞ。
むしろお互い憑依しあうとかどんな状況？いや、片方はさせられてるんだとかどうとかってパチュリーやレミリアが言うが、俺にとってそんな些細（ささい）なことは別にいい。
次に重要なのはジンきゅんだ。
ジンきゅんの能力、まさか本人が亜種化する前に帯電状態になってるとそのまま亜種化するって強くないか？
その上、〝怒り時は〟という割にはそんなすぐに変わらなかったりしていたが、やっぱり本人がならないように出来たとはな。
なんとなく想像できてたよ。そうだろうなって。

じゃなきゃ穿龍棍もない幻想郷でジンきゅんを大人しくさせる方法がほぼほぼないに等しいもんな。

『ほんと、ご主人って本当想像力豊かだよね。僕の性別は分からなかったのに』
「想像力はそりゃ豊かだぞ？ゲームとかしてたわけだし。…性別の方

はさすがに無理だ。せめてジンきゅん達の子供、大人レベルに違わないとさすがに分からん」
その俺の言葉に少し呆れた笑みを浮かべたやつが前にいる。境内に立ってる、とでもいうべきか。
ほうきを持ってるを追加で。
「でもよくある話だと思うけれどね。そもそもあなたね、どんな妖怪にも幼体の時期があるものだから。吸血鬼……とか例外もいるけど、基本的に幼体の時の方が弱いのよ」
(はぁ……確かに僕は霊華の体を見たことあるから言いたいことは分かるけどさ。霊華ってやっぱり歴戦だったんだね。なんとなく戦い方で察してたからそんなに驚きじゃないけど)
「いや、さすがに吸血鬼の方は知らないな……」

ジンきゅん達の話――――ジンきゅんの幼体を群れで守るなど――――とかの話ならゲームじゃなくてもあるあるだから分かるんだけどな。
さ、さすがに吸血鬼系統は…なぁ?俺もさすがに知らん。

『霊華も弱いわけじゃないみたいだしね。まぁ、現代の博麗の巫女と違って僕のことを知らないであそこまで行ったんだから強いんじゃないかな?』
「あら、むしろ私は。いえ、私達は弱いってことは死を意味するようなものだったしね。そりゃその観察癖がつくのも無理はないわ」
「あぁ〜〜……当たり前だな。俺のいた日本は今の幻想郷みたいに平和だったからなんとも言えんが、納得した」
(ジンオウガとやらが〝だからって僕を育てたりするの、あれ貫徹だよね…〟と呟いているようだけど、貫徹?一体なんのことなのかしら)
「あなた、生死観だけは凄いことになってるのね。っと、それはいい

わ。私も外来人とやらを知り始めた時から色んな人間がいるということを理解したし。それで？あの大図書館にいる魔法使いとはどうだったのよ」

箒に両手、あごをそえてニヤニヤしながら聞いてくる霊華。

どう、とはなんのことだ？俺はパチュリーと仲良くなりたいとかしか話してないはずなんだが。

（ご主人が悩み始めた……ってそうか。僕が知る限りあの音羽多麻（おとわたま）って人との関係すら最初はただの友人とかクラスメイトだった人間なんだ。そんなご主人の恋愛に関しての感度は朴念仁クラスだっての忘れてた…！）

「そりゃあ、普通に紅茶もらって話をして終わりだが？前と違って話やらお茶やらしてもらえるから嬉しいけど、いつになったら俺も愛称でパチュリーのこと呼べるようになるんだろうなーって楽しみなんだよな」

あとできればもっと仲良くなって色々したいが、それよりも本に移りそうだな、俺。

もしかしたら興味のある外来本があるやもしれんし。

あれ、なんでため息なんてつくんだ？

「あー、いえ。あなたが分からないというのならそれでいいわ。仕方ないし。それはいいけど、やっぱりゲームとやらができないのはあれでしょう？」

『……あの霊夢、だから香霖堂とやらに……』

ジンきゅん――――狼ぐらいの大きさだからちょっと犬っぽくて可愛い――――が勝手に納得してる。

いつの間に行動を把握したし。いや、それ以上に仲良くなってね？まさか相性があったからこそ仲良くなったのか。

なら、パチュリーのことをもう少し聞き出してくれてもいいんじゃないのか？

「んで、それはいいんだが……霊華、なんでその巫女装束とやらが汚れてるんだ。あとジンきゅんも遊んだのか？」

雷光虫を一時的に離れてもらった上に電力を弱めてもらったおかげでジンきゅんに触れたからめっちゃ良かったけど。俺得。

ちなみに感想は硬かった、ってところか。あの蓄電殻辺りはそうでもないところがあったけど、なんも言わないでおく。

まあ、だからジンきゅんは責めない。責めないが、万が一部位破壊するほどの遊びだったらいくら歴戦の相手だとしても少し痛い目にあわせようとしたものだ。いや、多少ならかっこいいと思うけど。

…それで。考えるような仕草をするってことは本当に遊んだのか。しかも霊夢より表情が悩んでるって感じだし。

やることはどこの狩り人だよって思うけどな。

「あれ…ジンオウガ、あなた教えてなかったの？あのことは伝えてもいいよって言ったじゃない」

『あー……忘れてた。なにせ君と僕のやることは前にいた世界に一番近い事だったし。どこもおかしなことじゃなかったから別にいっかーってなってて……』

弾幕ごっこ…じゃないだろ、それだと。

「とりあえず1つ聞くがルールは適用してるのか？」

「下手にお手とやらを喰らえないから一応ね」

『してるよ。ハンターと違って出血多量の概念があるそうだし』

（あっ、まさかご主人……僕と霊華の遊びに混じりたかった、とか言わないよね？なんか言いかねない表情になってるし、怪しい）

「な、なんで……なんで俺を誘わなかった?!さぞやジンきゅんと2人きりで遊べて楽しかっただろうな!!」

「あぁ、そう。はいはい。それはそうと、私だってあなたがジンオウガとやらとたまにじゃれあってるの、見てるんだからね？それを忘れちゃダメよ」

（まあ、あの視線からして霊夢じゃないもんね。あっちはそもそも気

配を消しすらしてないし。今の博麗の巫女だし、それ以上に気配を消す方法なんて知らないだろうしね）

霊夢はまだしも、やっぱり素でそういう気配みたいなのを消すやつは苦手なんだよな。ジンきゅんが気づかなれば俺すら気づかないし。

いや、相手が相手だからなにもしてこないと分かるが、外の世界にいた時の友人と来たら……

「あっ、そうそう。確か霊夢があなた達にも下見したら？って提案してきた店があるから里に降りて見に行ってみたらどうかしら？カフェ、お茶屋、花屋……って言われたような気がするわね」

「そこならパチュリーも来てくれそうだ、と？」

その問いに霊華はすんなり首を縦にふった。よっしゃ！

そうとなればジンきゅんとデートみたいなことをしつつ、下見をしよう。そうしよう。

『はいはい、僕も行けばいいんだよね』

（どうせこのご主人、そういうタイプらしいし。しょうがないか）

おー、話の分かるやつだ。頭を撫でてあげよう。

「よし、そうとなれば今から行こう、そうしよう」

ささっと靴を履くと俺は狼サイズのジンきゅんを抱き上げ、おおよそ昼下がりの人間の里へと向かった。

後ろから「帰ってきたら、霊夢に感想を言うのよー！」なんて聞こえたが、そうだな。情報源である霊夢（あれ）にいえば、パチュリーにも繋がりそうだしそうするか。

さて、収穫はあるかねー。楽しみだ。

第12話　雷狼竜は○○○○をされる

うーん、昨日行った場所でいい場所、か。どっちも当たりなような気がして甲乙がつけられないんだよな。

そういえばあの下見の時、なんとなく周りを見渡していたらジンきゅんを連れ回していた時に霊夢が寺子屋とかその辺りにいたような気がするし、なんか〝写真撮って〟とかって言われていたような気がする。

なにしてたんだ、あいつ。

……んで、更に今朝から現在進行形でなにしてんだ、こいつ。

「なぁ、霊夢。俺の持ってるＧａｌａｘｙＳ９（ギャラクシーエスナイン）のようなスマートフォンと写真を見てなにしてるんだ？しかも色は俺の紫色と違って灰色みたいな感じだな」

そもそも現像できないだろ、それ単体じゃあ。幻想郷にそういうのなかったっぽいし。

「あー……別になにもしてないわよ」

「してないっていうならもっと隠せよ。それかそんなに広げないで確認しろよ」

いや、正座したまま半身だけ振り返ってくな。そしてそのわざとらしい驚いた表情をしてこっちを見るんじゃない。俺はつっこまんぞ。

（いやぁ、ちょっと紫に〝お願い〟してるだけだし。かといって彼に教える必要はないからなぁ。今んとこはパチュリー関連で充分か。……はぁ……最近の咲夜への無茶ぶりのお返しがちょっとだけ怖いかも……あれ？）

「はいはい。それはさておき、パチュリーとかジンきゅんとか言ってる結輝（あんた）の近くにジンオウガがいないのはどうしたのよ」

「最初俺と遊んだあと、博麗霊華とやらと軽い運動してるところだろうな。んで、明らかに写真だろ」

霊夢の部屋に入って霊夢の横に立つ。

やっぱり写真じゃないか。さりげなくジンきゅんのも混じってるし。……ん？

「なぁ、霊夢よ。そのジンきゅんの写真は？」

何枚かチラッと見えたが、帯電してるところや歩いてるところなどがあったように思う。もし本当に撮ってるんなら欲しいところだな。うん。

「なるべく撮るようにって阿求からの願いでね。もし永住してもいいように、というのもあるらしいわよ？」

（それは本人次第だって阿求にも言ったけどね。……分かった上での頼み事だし。あ、そのうちこの人にもお願いして撮らしてもらうかな？たぶんこの人の分も書くだろうし）

「なら渡さない分は俺にくれたり……」

「はいはい、だろうと思って既に結輝（あんた）にあげる分は別に取っておいたわよ。ほら」

そう言って仕分けしていた写真の中から霊夢がジンきゅんが写っているのだけ差し出してきた。仕事が早いな、こいつ。やりおる。

「いいのか？本当にいいのか？なんだったら買い取りとして金を渡してもいいんだからな？」

「さ、さすがにそれが冗談だとしてもいらないわよ……？使えるとか使えないとか関係なく、ね」

（半分冗談…とは思えないけど、いいか。んで、流したけどスマートフォンが同じとか言わなかった？霊華もなにと〝遊んで〟いるのやら。ほんと、実戦形式の弾幕ごっこをする相手によくやる……あっ、ジンオウガはそっちの方がいいのか）

「わりと真面目なのだが…。んで、その子供達が写ってる写真はどうしたんだと」

なんか呆れた顔になったが、もしかして折れて話してくれるのか？

「まあ、ちょっとね。それで？昨日の成果はどうだったのよ。霊華に

伝えるよう、教えたはずだけど」
「おっと、そうだったな。どっちも悪くはないが、本当にパチュリーが来そうな場所なのか？」

その俺の質問に対し、霊夢は「たぶん来るわよ。引きこもり若干卒業したはずだし…ね？」と少し顔をそらしながら答えた。
自信ないのかよ！
いや、でも来るかもしれないとこを教えてくれてたんだとしたら……
「あくまでも可能性よ。それ以上は実際に誘ってみないとなんとも…」
「いや、それだけでも助かる。助言ありがとな」
そう言っていい加減差し出したままで今にも下げようとしている右手からブレの少ないジンきゅんが被写体の写真――――スマフォの機能かブレが少ない――――を受け取った。
ちなみにその後聞いたことだが、どこぞの文々。新聞とかを書いてる烏天狗や花果子念報を書く烏天狗と違って弾幕を消せないらしい。めっちゃ普通のスマフォだな。

ジンきゅんが帰ってきたのはそういう話をし終わったおよそ1時間後。
霊夢にジンきゅんの写真撮影及びパチュリーを誘って来てくれそうな里の場所をついでいいからとお願いした。主にジンきゅんのは念を押した。

ブレのほとんどないかつ画質がいい写真なのは俺得だからな。むしろもっと欲しい。それかしおりにしてほしい。
あぁ、一応しおりも作れそうなら作ってくれるって話になったんだったな。〝八雲紫〟って名前が何故か出たけど、流すことにした。俺にはあんまり関係ないだろうし。

『それで妖怪の山って場所に来た理由は？』
「霊夢曰く〝ロボットを含めた外の世界関連の話が通じる相手〟だそうだからな。ジンきゅんの紹介がてら友達になる、っていうところか？」
『まぁ、あの動かない動かない大図書館を相手にそういった類の話はできなさそうだしねぇ。むしろ僕の背中にいる雷光虫達がある意味狙われてるし……』
（誰に、とはまだ言わないでおこうかな。もしかしたらすぐにレミリア・スカーレットだってバレるかもしれないけど。勘弁して欲しいね、あの吸血鬼。少しワガママがすぎるような…）
幻想郷にそんな雷光虫や蝕竜蟲（しょくりゅうちゅう）みたいなのに興味を持つような人物、いたっけか？
それ以外にも金雷公や極み吼える雷狼竜が連れてる方や不死種の幽明虫（ゆうめいちゅう）がいるが、それらを含めるとしても、いない気がするんだが。俺の気のせいじゃないよな？

「まあ、ジンきゅんは下手な極み個体より強いから無理やり採られそうになっても守れんだろ。さて、東風谷早苗とやらが霊夢並みの人間だといいんだが」
『それはご主人から見てツッコミ担当って意味でかい？』
「さすがにちゃうわ。せめてあの子供達に〝霊夢〟だとか〝れーむせんせー〟とかみたいに遊ばれ……戯れたり、里の人間達とよく世間話とかをしてなくてもいいからある程度普通だといいってことさ」
（写真を撮ってたりすることのどこを遊ばれてるって言うのかな。いや、見てない間にやられてそうではあるけど。僕も実はこのサイズの

おかげで弄ばれてたりする。今のところなんともないし、黙ってるけどね）

にしても…階段じゃなくてロープウェイを使うべきだったな。乗る場所を聞いときゃよかった。誰に、とは言わないが。

そりゃ小さいジンきゅんとは言え、重さが狼と同様なわけ、ないもんなぁ。

抱えていくのは登り始めから断念していたけど。もちろん、重たくてもてないってわけでは無い。

単純にそばで歩きたかった……の一点に尽きる。ほ、本当だぞ？

『やれやれ、ここまで来てなにもなかったら僕、飛んで降りようかな』

「あ、その時はジンきゅんの背中に乗ってもいいか？というか乗らせてくださいお願いします」

（やれやれ…仕方ない。ご主人には色々してもらったし…どうにかしてみるか）

『はいはい、分かったよ。そん時はしっかり捕まってよ？僕、普段の降り方するつもりだから』

（……そこで一瞬ガッツポーズをとるのもご主人、か。ま、でなきゃハンターを動かしてる時のあの動きとかないもんね）

「あれぇ？貴方はいつも博麗神社か紅魔館にいる神風結輝さんですよね。それで、いつもそばにいる雷狼竜っていうゲームの中にいそうな子を連れてるって霊夢さんが……ああっ！確かに本物は狼とも竜と

も言えそうな見た目をしてるわ！それが本当に狼サイズだなんて可愛い！」
前言撤回。守矢神社は言う通りあるし、人もいるようだ。
その３人中最低１人は話の分かるやつかもしれん。
「だろ？伊達に時間と愛情を込めて育てたわけじゃないからな。……ゲームで、だが」
『あー、うん。それはそれはありがとね、ご主人。んで、どちら様？それとその知識は明らかに霊夢からの入れ知恵だよね』
ジンきゅんはそういうけどさ、悪いけどこの幻想郷の住民でジンきゅんとかそういうの詳しい人ってあの霊夢だけっぽいぞ。
いや、分かってて言ってるのか？

「あっ、そういうってことは霊夢さんに言われて来たのね。たぶん守矢神社のことより私のことしか教えてなさそうだけども…」
ため息ついた後、やや小さめな声で「ようやくまともに宗教的なライバルとして見てくれるようになったんですけどね……」と呟いた。
聞こえなかったことにしよう。本来の姿でないにせよ、霊夢と早苗の関係性はこの幻想郷ならではだしな。ついでにジンきゅんの話を深く理解してくれっから凄く楽だしな。

「それにしてもその子が本当に牙竜種？とかそういうのなんて信じられないわね。諏訪子様や神奈子様もたぶん知らないと言いそうな感じがしますね…」
「それだったら俺が１から１００まで教えてやるぜ。ジンきゅんについてなら、だけどな」
『…いや、ご主人は僕達ジンオウガを通常種、亜種と関係なく捕獲してただけだし…それにその〝好き〟の影響でハンター視点でいう捕獲のできない極み個体達はあまりご主人やそのご主人の時の同行人によって狩猟された個体を除くと全員が捕獲……それ以上は黙っておくかな？』

べ、別にいいだろ？俺にとって一番好きなモンスターがジンオウガ、ジンオウガ亜種、極みジンオウガなんだから。
ジンきゅんが小声で言っているのは不思議だが。

「ジンきゅん……って確かジンオウガのことよね？最近来た1人と1頭の外来人はそう呼ぶって霊夢が教えてくれたような気がするし。私もある意味外来人かもしれないけども、もう幻想郷の住民だから関係ないハズよね？」
なんか後半言ったような気がするが、別にいいか。
『むしろそう呼ぶのご主人だけだから。それで、君は守矢神社へ戻るのかい？』
それに対し、階段から少し宙に浮いたままの早苗は頷いて「ええ、そうよ。同じ場所に行くなら案内してあげるけど、来る？」と返していた。
守矢神社ってシューティングゲームのあれを見てると真っ直ぐ向かっていたような気がするけど…やったの前すぎて覚えてないな。
「ええ、そのつもりですよ。なんでしたら案内しましょうか？」
「あ、それ頼んでもいいか？妖怪の山まで来たのはいいが、どこか分からなくってな」
『ついでに他のことも色々いいかな。僕のことはしっかり教えるから』
あ、俺だってジンきゅんのことを紹介したいんだが!?1人だけズルいぞ。
それを言おうとしたらジンきゅんから呆れたような目を向けられた気がする。まだなにも言ってないんだが、まさか……ジンきゅんとのキズナ!?

「とりあえず、守矢神社まで行きますよ？ただ、私は紅魔館にいるパチュリー・ノーレッジについてはあんまり知らないのでそこは勘弁してくださいね」
「あぁー…そりゃな。分かった」

（ま、あの様子じゃ宴会の時もあんまり他の人と絡んでる感じからして、お世辞でもなさそうだしね）

って、階段登らないとか空を飛ぶ能力が羨ましいな。

この世界にそういう空飛べる系のものないかね。変形してもいいから。

そう思いながら俺はジンきゅんの背中に乗らせてもらいつつ――――乗せてもらうのにあの世界でいうこんがり肉かこんがり肉Ｇみたいに肉を今度焼いてあげるという話で頼み込んだ――――東風谷早苗のあとをおった。

ふむ、あそこからは少し遠かったんだな。

ジンきゅんの背中を堪能してあんまり気づかなかったし、道中言われるまでいまいちピンとも来なかったけどな。そもそも早苗の話もほとんど右から左へ流してたが。

たぶん守矢神社とかの説明をしてくれてたんじゃないか？

それはともかく、俺達はパチュリーと仲良くなるついでに守矢神社で少し話を聞くことにした。そもそもパチュリーは守矢神社にいないが。

まあ、友人が多いことにこしたことはないだろ。あわよくば霊夢みたいにジンきゅんのことを話し合えるようにしたいし。今のところ

成果なしだが。

そのあとは特にたいしたことは話さなかった。変形するロボについて30分前後話して、お互い自己紹介して終わりだったし。

それで、曰く紅魔館に近いという博麗神社に帰ってからやることをやっていたら霊夢に見られた。

「霊華に夕ご飯の盛りつけを頼んであんた達を呼びに来たのはいいけども…ジンオウガを撫でたりしているなんて普通、想像するかしら？」

（普通は僕と雷光虫の電力で感電して気絶なりある意味〝翼をさずける〟ってなることを考えて触らないもんね。もちろん一部ハンターは除くけど。それにしても、狼みたいなサイズをいいことに〝モフらせろ〟って言ってくるとは……なんか撫で方も下手、ではないし。やれやれ）

「ん？あぁ、なんか前にジンきゅんのことを抱き上げてもなんともなかったし、モフれるかなー…と。あ、もうちょいモフったら行くけど、霊夢は待ってるか？」

『あ、僕のご飯はこんがり肉風にしてくれたー？』

「えぇ、肉ならちゃんとそうしたわ。ちょっと〝こんがり肉G〟の定義が難しかったから再現はできなかったけども。……いえ、あと少しなら待つわ」

そ、そんなに呆れんでも…。

これから毎日朝1回、夜1回モフると言うのにね。早く慣れてくれんかな。

あとジンきゅんの食べる肉、1度だけ焼かせてもらうか。約束したし。

――――ちなみにジンきゅんのことがモフれたのがあんまりにも嬉しすぎてモフりすぎてしまい、夕飯へ行くのに5分以上かかってしまったのは言うまでもない。

第13話　俺と雷狼竜は大図書館で

……幻想郷は春の終わりかけだったのが、やけに雨が降ったりするようになってきた。雷雨もときおりある。

ふむ、ついに梅雨だな。だが、おかげさまで少し肌寒い時はジンきゅんと共に寝たりできていい。

しかも水の滴る良い雷狼竜になるから、なおさらいい。帯電状態のジンきゅんも映える時がある。……いや、そんなにその状態をあまり見れてないが。

「紅魔館の大図書館へ一緒に遊びに行かないかと誘いに来たら…あんた、ジンオウガ相手になにしてるのよ。またモフモフと言いながらなでたりしてないわよね？」

「心外だな。ちゃんと見られても平気なように心の中でモフモフと言いつつジンきゅんをなでてるつもりだぞ」

ジンきゅんが小さな声で『声に出てる時があるんだよなぁ…ご主人』とか言ったが、気のせいということにしておこう。思わず出てないとは否定しきれんし。

蓄電殻とか帯電毛とか5分から10分ほど触って癒されてるわけだし、毛並みも悪くするわけじゃないし。むしろよくするわけだし。雷光虫にはなにもしてないからジンきゅんにとって損はないはずだが……

「それはともかく、紅魔館へ行く？私の用事は大図書館にあるし、あんたら…主に結輝、あんたにとってメリットの方が大きいと思うけれど。ジンオウガが来てもいいようにと本棚に耐雷をつけてもらったし」

そのあとに霊夢が「私も多少協力したからジンオウガがそこで帯電状態になっても平気なハズだけども……」とか小声で言った。聞こえてるぞ、俺に。ジンきゅんもなんか顔をそらしてるぞ？聞こえてないフリされてるんじゃないのか？

（まあ、この幻想郷でご主人以外に僕のことを知っているのはそこにいる博麗霊夢だけだもんね。仕方ないとは思うけど、さすがに本棚への耐性が多すぎない？耐弾幕とかまであるのに？やれやれ、相当なことがない限りはそこでじゃれたりなんてしないのに。フランだってじゃれる場所を考えてくれるというのにさ）

「それで、結輝達。紅魔館の大図書館へ行く？行かない？どっちにするかはあんた達に任せるわ」

『そうだねぇ、僕はいいかも。最近あの子と遊んでないような気がするから』

（あー…たぶんこのジンオウガが言っている遊び相手ってフランドールのことだよね。性別騒動が紅魔館のホールで起きた後に遊んでいたとかどうとかっていつだったか忘れたけど霊華から聞いたし。――あの霊華がいつ紅魔館へ行ったかはともかくとして、ね）

お、頷いた。

「分かったわ。んじゃ、もう少しで行く予定だから、来るならちゃんと準備しておいてちょうだい。ジンオウガとやらをモフってる場合じゃないんだからね？」

もう寝起きで十分したからもうモフるという名のなでなではしないんだけどな。だからしばらくはいいんだけど。

とろこで本になんか用事でもあるのかね？別になんでもいいか。

都合のいい誘いだし。里や他の場所でよさそうな場所はジンきゅんと探せばいいし。ある意味ジンきゅんとのデートにもなって一石二鳥だな！

よし、そうとなれば準備するか。

『やれやれ、ご主人はそういう時はほんと行動的なんだから……』

「べ、別にいいだろ。どんな理由であれ、俺的には得なんだ。好きな子がこの幻想郷に1人と1頭いるほど幸せなことはないんだしな」

（それって関係ないんじゃないのかい？……いや、雷狼竜（ぼくたち）などが大好

きなご主人だからそう感じるのはしょうがないんだろうけどさ。困ったご主人だ）

どうであれ、紅魔館へ行くきっかけができたのはいいことだ。

ふーむ、なにを着て行こうか。それとも物か情報でも持っていくか…。悩むな。

ん？足音がするが…感じからして霊夢がまた来そうだな。でもさっき、俺得な話をしたばっかりだろう？

「あー、結輝、ジンオウガ。あんた達ってもう1人追加で来る人がいてもいいかしら？」

「紅魔館へそのまま行っても怖がられないやつ、いたか？」

『博麗の巫女である霊夢、外来人のご主人、妖怪でもなんでもない珍しいモンスターの僕……いないねぇ』

あ、霊夢がなんか苦笑いした。

なんかおかしなことでも言ったっけか？

「ジンオウガ、1人抜けてるわよ。高麗野あうんっていたでしょ？その子よ」

「1人？って、その子かよ！」

（いやまぁ、うっかり教えるのを忘れてたんだけどね。高麗野あうんと結輝はほとんど会わないからなぁ。そもそも会う機会の方が少ないってのが正しいかな）

『あー、高麗野あうんのことかい？ふむ、僕〝も〟忘れてたね。それで、連れてく人って？』

おお、本題に戻すの上手いな。

「厳密的には人じゃないんだけどもね。そのあうんを連れてく予定よ」

そういや高麗野あうんって…もしかして、帰ってきたのを教え忘れてたのか？ダメだろ、それ。

まぁ、かくいう俺もすっかり忘れてたが。なにせほぼほぼパチュリーと仲良くなれることばかり考えてたし。

『あれ？いつの間に帰ってきたのさ。前まで出かけてたらしいのに』
「先週に帰ってきてたのを教え忘れてたのよ。ほら、ついうっかりってやつ」
（うっかりで通じるか不安だけどね…あはは……。ほとんど霊華と一緒にそういう話をしているもんだからすっかり、ね）
なんで霊夢（こいつ）、遠くを見るような目をしてるんだ？まあ、いいや。
「そうか。別にいいよな？紅魔館へ行くのかわんないだし」
『いいんじゃないかい。僕もご主人と同じく誰が増えようが増えないが関係ないし』
「あー、はいはい。ならいいわね。今から行くから準備しててちょうだい」と呆れたような口調で言うと霊夢は出て行った。
呆れる要素あったっけか？首をかしげるしかないな。

別にいいか。準備とかしとくべ。

準備とかもろもろして、境内にジンきゅんと出ると霊夢とこまいぬ……というか犬？みたいなあうんがいた。
「あっ、霊夢さん。来ましたよ、結輝さん達」
性格は特にそれっぽいよな。尻尾を幻視してしまいそうだが……いや、あるらしいんだったな。忘れてた。
「ええ、そのようね。んじゃ、あうんには悪いけど、一緒に行くわよ。こま犬として見ていたという時期のこと、たくさん聞かせてもらうんだからね」
「……そう言いながらほとんど自分の調べ物ばかり読んでるじゃ

ないですかー。まあ、以前の霊夢さんでしたら今みたいに私のことを扱いませんし、神仏をむげにしてないだけいいのですが。本人には悪いですけど、こうなってもらってありがたいばかりです」
（ま、まあね。一応あうんの話は聞いてたりするけど…だからってあうん以外が半目で呆れたように私のことを見なくてもいいんじゃないかな？小鈴ちゃんちだけじゃ調べきれないのもあるんだから、仕方ないんだけどね。……それとも、あうんが後半言ったこと？うぅん、呆れられるとこないでしょ）
『それはそれでいいのかな、と思わずツッコミたくなるけど。そだね、行こうか。ご主人もはやく動かない大図書館の魔法使いへ会いに行きたいだろうし』
ジンきゅんは話が分かる奴だな。
……それにしてもやけに常識人な気がするんだが。ツッコミ役としてはいいかもしれん。
「俺的には前の霊夢でもいいが、パチュリーとの仲介してくれるだけ良いと思ってる。んで、行けるなら行こうぜ」
なにせ仲良くなりやすいよう、やってくれるからな。怪しまれないようにもしてくれてるっぽいし。大助かりだ。
そう考えるとなんか俺と霊夢の関係って、友人や親友ってかもう幼なじみのような感じに思えてきた。
「それもそうね。行きましょうか」
「はーい」
という霊夢とあうんのやりとりを聞いて、ジンきゅんの方を向く。
……おお、目があったぞ。
とりあえず頷いてみると向こうも頷いた。分かってくれたのか。ならそのままついていくとするか。

紅魔館へ行く道中、高麗野あうんとやらが〝霊夢さんには悪いんですけど、中身が今のようになってもらって嬉しいんですよね〟とか話していた。……そりゃ霊夢も複雑そうな顔をするわけだ。なんとも言いにくいだろうしな。

だからといって部外者の俺とかがなんか思うわけじゃないけど。

っと、紅魔館とかが見えてきたし、もうつくか。ジンきゅんに乗ってると早く感じるんだな。そんなに乗ってない気さえするんだが……降りない訳には行かないよな。パチュリーんとこ行くわけだし。

「美鈴、大図書館へ行かせてもらえる？本とか読みに来ただけだから」

「霊夢さんは本当、来た理由を堂々と言いますね…」

「間違ってはないもの。小鈴ちゃんとこだけじゃ無いものもあるし、仕方ないわ」

（〝今の〟紅白…いや、霊夢はよく紅魔館へ来るが、相変わらず図書館…か。まあ、妖怪退治が激しくないだけマシか。以前のほぼ無差別敵だったからな…）

そーいや紅美鈴ってあんまり居眠りしないのな。と、いうか今の季節が春からもうすぐ夏だというのにまだ暑くないのか？

いや、半袖だからまだ分からんが。

パチュリーとかも外に出れば貴重な半袖をおがめるのか…!?

（ご主人はまたパチュリーのことでも考えてるんかね。やれやれ、どうせしょうもないことなんだろうけど）

「いつものね。んで？その1人と1頭はなに？悪さしないことは分かってるんだけど、一応ね」

『悪さというか、なんというか……レミリアがなにもしなければ、次はなんともないんじゃないかな？』

今のジンきゅん、呆れてる雰囲気がすっごい出てる感じがするな。なんとなくそう感じるだけだが、まあジンきゅんは可愛いから仕方ないな。

「あー…お嬢様が？妹様と違ってお嬢様はどちらかと言えば好奇心旺盛だから私にはなんとも。それに担当は門番と庭師だからね」
「へぇ、なるほど。んで、俺達は大図書館にいるパチュリーと暇つぶしに。霊夢とあうんがなんか調べものするらしいからその間な」
「ま、あんた達に悪影響はないんだし、通らせてもらうわよ」
　返事は聞かないけどな、と言わんばかりに入ってくのな。でもたぶん、このネタが通じるの知ってそうな今の霊夢ぐらいだろ。
　……そういや多麻の奴、なにかと共通話題があったのはいいものの、やけに幻想郷のことを信じてたっけか。
　画面の向こうにあるから行けなくて残念に思っていた頃とはいえ、なんだったんだろうな。別に構わんけど。
　話しやすかったし。

『…ご主人、背中にいるのはいいけど頬ずりはそろそろやめようか。中にはいるんだし、ね？』
「せっかく久しぶりの背中なんだ。紅美鈴まで見られてるんならとことん平気だろ？」
（博麗神社からたまにしてきてるのにまだするのかい？ほんと、困ったご主人だ）
　ん～、やっぱりジンきゅんの背中は格別だな。雷光虫がいるとか関係ないしな。ジンきゅんの背中でいて、やることがやれるのに静電気など気にしてはいられんっ！俺は頬ずりをするぞ、霊夢ー！

「とりあえず、そろそろやってることをやめるかジンオウガから降りたらどうかしら？もう大図書館前よ」
　だからってそこまで呆れんでもいいんじゃないか？
　ま、そんなんでやめる俺でもないが。
「あー、そだなー…んじゃ、降りるのはあとで」
『パチュリーの前でも頬ずりするのかい？ご主人』
「ええと…「あうん、彼女はジンオウガよ」あ、そうでした。よくジンオウガに乗っているこの人はなんともないですね」

「きっと牙竜種竜盤目四脚亜目雷狼竜上科ジンオウガ科みたいな感じでなんかあるのよ」
「おー、待て待て。ついていい嘘とダメな嘘ぐらいは分かるだろ、紅白ー」
といいつつ、ジンきゅんから降りて霊夢の頬をもてあそびに近寄る。
……上手いこと阻止しおるぞ、こいつ。というか、種族名全部言いやがった。こいつはもう詳しいだけじゃない気がする。
今度語り合ってみるか。もしかしたら色々と話し合えるかもしれない。それにあわよくばこの霊夢からジンきゅんを幻想郷全体に伝えてもらえるかもしれん。
今度時間とれっかな。

『やれやれ…。高麗野あうんだったよね？今度しっかり僕のことを教えてあげるね』
「あ、はい。色々と聞くかもしれないですけど、宜しくお願いします」

「そんなことよりその手を止めない？いい加減大図書館に入りたいのだけど」と霊夢が言い切る前か言い切ったあとに扉の開く音が左からした。
おや？大図書館の様子が…
「誰が外でふざけてるのかと思ったら……霊夢と神風結輝じゃない。霊夢はとりあえず入ってくりゃいいじゃない。前ほど血気盛んじゃないんだから。それでおまけは、雷狼竜と高麗野あうん…と。はいはい、いつものことだけど下手に暴れたり、本を盗ってかないでちょうだいね」
呆れた顔をするパチュリーもまたいい。あとめっちゃ手慣れてきたな、対応が。
とりあえず俺は先に入らせてもらうぜっと。

（さて、私もそのまま大図書館に入るかな）

「あっ、霊夢さん。無言で進むのは酷いですよー」
『やれやれ、この幻想郷は賑やかなもんだね』
「そうね、博麗霊夢がああなってからは大図書館も賑やかすぎて困ったものだわ」
（まんざらでもなさそうな顔にも見えなくはないけど…言わなくていいか。僕が気にすることじゃないし）

なんかあとから俺以外に霊夢とあうんが、ジンきゅんとパチュリーが入ってきたな。あとジンきゅんそこに混じらせろ。
「んじゃ、また呼ぶまで自由にしててもらえるかしら」
「へーい」
『そっちこそ』
そのまま高麗野あうんとやらを呼ぶと奥に消えたな。その入れ替わりで小悪魔が来るとかすげぇな。しかもなんか挨拶だけしてったし。
そのあと小悪魔がため息ついたように見えたけど、別に聞くことでもなさそうだな。

俺はパチュリーとちょっと話してみっかなー。
「…それで、神風結輝。今日は何か用？ジンオウガ…はあとで協力お願いね」
あー、なんて話すか。そのまんまじゃつまらんだろうし……うーん
『ん？あぁ、今日はいいよ。雷光虫にもそこそこ充電できてるし。なんだったら帯電状態に移行しようか？』
「今はやめてもらえるかしら。まだ読みかけの魔導書とかに障壁をはってないから…。あと対応しきれないわ」
「あ、俺も混じる。んで話しよう」

（それ、真顔でいうことかい？ご主人……おおよそ僕達雷狼竜の話であること以外想像つかないから、ね。あ、パチュリーもそろそろ慣れ

てきたのか半目になった。仕方ないね、雷狼竜のことなら亜種でも派生でもなんでもござれなご主人だし）

パチュリーだけでなく、小悪魔も呆れるのはなんでだ？不思議なもんだ。いや、ジンきゅんもっぽそうだな。

雰囲気がそんな感じだし。まあ、あとで聞けばいいか。

んで、そのあと普通に話に来たと伝えたら「最初からそう言いなさい。ま、ジンオウガという子から色々調べられるからいいんだけど。それに貴方からも情報を聞けるからいいわ」なんていわれた。

おぉ、ほんと雷狼竜とかのことに詳しくてよかった。獄狼竜とか極み吼えるジンオウガも込みで、な。

話してるうちに仲良くなれるべ。

なにせ距離が短く感じてきたからな。

さて、今回はなにを話そうかなー、と考えつつジンきゅん、パチュリーと共に大図書館のもう少し奥へ進んだ。

その日は有意義な時間を過ごせたと俺は思う。

番外編やｉｆなど

番外編　とある少女との女子会

あの場所から現代にやってきてもうだいぶ経つわね……。
お金をしっかり持ってないとダメ、とかアニメやらゲームやらと充実してるが電池やバッテリーを気にしないといけない、とか能力なんてそもそもない…とかに慣れてきたけども、やっぱり二次元は素晴らしいわ。むしろこういうのがあるのが凄いって感じだわ。
っと、そうじゃないわね。あちらもよくやってるようだし、私もあの面倒な〝憑依〟に関してまとめるとしようかしら。
今までは学校やらなんやらとし損ねていたし。今だって宿題を最近ハマってしまったゲームなどをするためだけに5日で終わらせたほどだもの。
もちろん、私がこれからノートにまとめようとしている奴――憑依のことね――とは盛大に関係ないんだけども、まあ仕方ないわね。学生の身である以上、どうしてもついてくるみたいだし。

でも、いい加減こっちに向けられてる視線が気になるのよね。
もしかして、摩多羅隠岐奈（またらおきな）とかなんとかって言った奴の視線？……まさかね。
話しかければ分かるかしら。

「…さっきから私を見てるのは誰？もちろん、両親じゃないのは分かってるからね。嘘はつかない方がいいよ」
「ふぅん、さすが元博麗の巫女。いや、むしろ外の世界に馴染（なじ）んだ今でもその感覚は忘れてないようね」

本当に素直に出てくるなんてね。逆にビックリだわ。
それにしても元巫女だとかどうとかってよく言うわね……といいたいところだけとも、この神兼賢者のやったことはある意味助け

られたようなもんだから複雑なのよね。
おかげさまで楽しいことを知り、遊んだりするきっかけができたわけだけども。
…それがあったからこそ今があるわけで。我ながらかなり変わったと思うほどにね。
「おかげさまでね。…んで、なにか用？私も長期休みのせいで、大量の宿題が出てるから終わらせたいんだけど」
「へぇ、〝背中の扉〟には気づけなかったわけか。…ほんとは終わってるくせによくいうわね。ま、そうでなくとも今日中に終わる話だからする予定ではあったけど」
最初の方に小声でなんか言っていたようだけど、なにを呟いたのかしら。
それに話ってなんの話をするのかしらね。なんだか怪しさ満点だわ。
「……内容によるかな。一応、こっちも事情をある程度理解してもらえたとは言え、家族がいるからさ」
幻想郷とか、そういうのはともかくして、私が少し訳ありで、過去のことを忘れてしまったとかそういう感じで……いえ、もうちょっと具体的にしたんだったかしら？うーん、あとで日記を見返すべきかしら。
それにしても、まさかとは思うけど…そのことも知ってるとかないわよね。
確かこの隠岐奈の担当ってこの〝外の世界〟だったはずだし。扉だかなんだかを開けるらしいし、ありえない話ではなさそうね。
「知ってる。でも、平気よ。憑依のことだから。…あっちではそれ以上のことも起きていたけど、今は貴方ともう1人のについて話し合う

つもりでいるわ」
「あぁー…なるほど。憑依のことか。ちょうどまとめようとしてたところなんだよね」

と、いうよりいい加減まとめておきたかったんだけどもね。
学校が長期休みなんて四季を通しても数回しかないし、その上に最近のマイブームのせいで約半分も潰れてしまってるもの。

「んじゃ、話しましょうか。まず、憑依の件について。…覚えてないでしょうけど、貴方は消えかけたのよ。しかも、不可抗力で。もっとも、異変のせいだったようだけど」
「消える消えないはさすがに分からないよ。…はいはい、そうみたいだね。たまに夢を通じてのみ会えるあの子と話をして聞いてたし」

なるほど、そんなに驚かないのね。
もしかして、知ってたとかそんなことを言い出さないわよね。……半目で睨んでやろうかしら。

「そんな呆れたような顔をされても、ねえ?あれはまだ人の手か妖のでまだどうにかなるからこそ、よかったのよ。うーん、問題といえばあの子が憑依したあとかな?」
「…まさかとは思うけど、精神が抜けたあとはもぬけの殻になる。そうなった人間は自我がないから死にゆく運命――とかなんとかいわないよね」

とか言いながら、勉強机に置いてあるノートから横に立ってるだろう相手の方へ顔を向けてみたんだけども…その通りっぽいわね。
「でも、それとこれとは関係ないと思うんだけど。そこんとこはどうなの?」

「直接的に考えれば、そうなるだろうね。でも、間接的には面倒なことになる可能性があるのよ。何故か、というのは貴方が言った通り、精神――――即ち、感情などが消えた人間は生きながらに死ぬってとこにあるわけ」

ふぅーん……そういうこと。

つまり、下手をすれば幻想郷にも影響があった…とでもいいたいのかしら？

「んだからー、それと私のことになんの関係性があるの？」

「あるわ。大ありよ。万が一は外の世界だけの問題じゃなくなり、幻想郷にも影響しかねないほどの問題があるわけ。順をおって説明するからちゃんと聞いてね」

やれやれ、どうせこのことは紫も承知の上なんでしょうね。

でなきゃ、精神の入れ替わりもどきが起きても放っておくなんてありえないでしょうし。なにせ下手をすれば幻想郷に大きな影響が出てしまう可能性があるもの。

ま、むしろ外の世界からの情報が入って、サッカーとかそんな感じのブームが来てもおかしくはなさそうだけどもね。

長話になりそうだから、と麦茶を持ってきたら平然と飲み始めるだなんて。

あれ、ペットボトルよね。いつの間に飲み方を覚えたのかしら。

――――だてに外の世界のことを見てないってわけね。

「それで、まず…貴方の話からね。貴方は一度、悪意の塊という謎の物体のせいで貴方の中に他人の人格が入り込み、消えかけた。……ここまではいいわね？」

「はいはい、そうみたいだね」

軽くあしらうかのように返事をしたというのになんともなさそうね。

いえ、むしろ私の方が変わったと言うべきかしら。…なんとも複雑ね。

「そこで問題があるのよ。――――そう、あの子はなんらかの原因で一部記憶喪失。未だ戻らないらしいけど、それはもうどうでもいいとして」

前言撤回。

私が変わったんじゃなくて、この神様がよくいる典型的な神様ってだけだったようね。

「あぁ、別に難しいものではないわ。単純にそのままだと、あの子が余計に参り、あんな戯言で死にかねないから。むしろあんな戯言で惑わされちゃ色々と困ってしまうわ」

「…実際に最初こそは惑わされていたようだけどね」

そこでため息をつくってことはやっぱり知っていたのね。

いえ、こんな典型的な神様が信仰心の欠片のある人間を前にして知って欲しいとかそういうのがあるのが当たり前だものね。特に幻想郷なら神様が人々を見る余裕もあるでしょうし、全部知っててもおかしくはなさそうだわ。

「それは仕方ないわ。今でこそ私の試験に合格したり、そのあとに出会って色々と教えても動じないほどになってるけど、当時の彼女はいつあいつが介入してもおかしくなかったからねえ」

結構遠くを見るような目をするのね。

…たぶん、あいつとやらはそこまで介入してこないと思うけれども。

ただ、それは私の知るあの性格のままならって前提込みってなわけだけども、今はなにやってるのかしらね。あいつ。

「そうなったらどうなるか、分かるかな？さすがにまだその勘は鈍ってはいないのでしょう？」

「……分かるよ。ほんと、あなた達はそういう言い回ししかできないの？」

「そういう言い回しとはとんだ語弊ね。これでもちゃんと考えてるのよ？例えば――憑依してしまったせいで、なんて悩んで悩み暮れてその結果、あの子はいなくなりました。なんて言ったら…どう？」

「だから、その言い方は…」

とまで言いかけて分かったのだけども、まさかこいつ…幻想郷どころかあの子にすら気にかけているというの？

へぇ、気づかない間に変わったのかしら。

意外なことを知れたわ。

「そのあともなにかしらで気にされたらいけないってことで消えかかっていた貴方をひっぱり、〝憑依〟してしまった人の体に〝憑依〟させたってわけ。私とあいつの能力で、ね」

「ふぅん…。そういうのを気にしてしまうのは外来人ゆえ、と。それなら辻褄（つじつま）があうね。万が一があれば先代の博麗の巫女とやらを代理にするなりなんなりして、次の代を探さなきゃいけなくなるわけだもんね」

そこまで頷かなくてもいい気がするんだけども…。別にあんたの仕事じゃ、ないんだし。
そりゃあ…多少はあるのかもしれないんでしょうけど…。
「ええ、それに外の世界から来てしまった幻想郷の歪みをそのままにするのも、名が廃るってもんでしょ？」
「そういうことか。てっきり後戸の国で、こっちのことを観察してるだけと思ってたけど…案外そうじゃないんだね」
心外そうにするけど、しょうがない気がするのよ。基本的に無干渉のことが多いのだから。
むしろ少ないと私は思うのだけどもね。
「ひどいこと。…ま、大体話したいことはこれくらいかな？貴方も十分情報を得られたでしょうし、そろそろ帰るわね」
「そうなの。んじゃ、またね」
私がそう軽く挨拶するとそのまま、能力で作った扉の中へ入っていった。
入ると消えるなんて便利そうね。
さて、今のを考えつつ、私もまとめていこうかしら。
今あるこの人生を楽しみながら、ね。

番外編　雷狼竜のとある一日

幻想郷とやらにご主人と来てからそこそこ経つけど、ここの妖怪って能力こそは良いものだけどなーんか弱く感じるんだよなぁ。
今のところ強くて八雲紫って妖怪とかその辺り。拍子抜けもいいところだよ。
まだ僕が話で聞いた泡狐竜の方が厄介そうだね。曰く二つ名持ちの個体でも泡で苦戦するハメになるだろう、だとかなんとか。
まぁ、違う個体から聞いた嵐龍の方もなかなかに厄介そうだったけどね。

もちろん、話を聞く限りでは、って前提だけど。

『そう考えるとここは弱いのが多いね？』
「それを私に言われても困るわ……。それにあんたはあの人間同様、外の世界から来た生きものっぽいから余計にね」

と、返してきたのはいきなり僕に暗闇の中襲ってきたルーミアとかいう妖怪。
迅竜のと似たような条件だな、とは思ったけど…暗闇にしてるのは本人で、本人自身もその暗闇のせいで近距離に来るまで相手の位置が分からないみたいなんだよね。それじゃ、暗闇にする意味とかあんまりないよね？
ま、僕は見えなくてもやれることはやれるし、僕と雷光虫の分の電力があれば僕の周りは多少は分かるし、別に困らなかったんだけどね。
それに狼に近い小さなサイズじゃなく、今の僕は普通のジンオウガよりは二回り以上も大きいあの普段のサイズだしね。
そもそも、視覚を奪われたら咆哮して相手をひるませつつ、自身の周りをなんらかの攻撃手段で対処したらある程度の敵なら退けられると思うんだけどな。

退けることができなくても最低限、相手に軽傷ぐらいは負わせることができるだろうし。

「そもそもあんたは食べても良さそうな奴と一緒に来た食べて良い奴じゃないのー？」

『うん、だからといって無闇やたらに襲うから反撃に会うんだよ。それに襲うんなら反撃するかもしれないってことを考えておかなきゃ。常識じゃないの？』

攻撃すりゃ反撃される。

そんなの当たり前なのにさ。なんでこの妖怪は分からないのかな？

「うー……この幻想郷じゃ反撃がそんなに痛いやつなんてほとんどいなかったのに。……あぁ、でもあんたはこっちで言う私みたいな人喰い妖怪とかそーいう類じゃないってのはよく分かったし、別にもういいんだけどねー」

『へぇ、君はあっさりしてるね。んで、そろそろご主人達が茶葉を選び終えるころだろうから人間の里に戻りたいんだけど』

今の相手が木の日陰（ひかげ）にいて、能力を使ってないからって油断をしないわけじゃない。

いつでもさっきルーミアにした咆哮（ほうこう）や雷光虫弾が放てるようにしつつ、聞く。……何故呆れられたのか僕には分からないけど。

警戒はして損はないはずだし、うーん。

「いや、なんでもない。そもそもあんたは食べれそうにないからね。それに私も負けたからこれ以上あんたにはなにもしないわ」

『そっか。じゃ、僕も見逃すことにするよ。あんまり時間をかけたくないし』

警戒を少しずつ解きながら言ってやるといきなりルーミアとか名乗った妖怪が両手を広げた。広げても広げなくても君達は空を飛べ

るんじゃないのかと。なんかするわけでもないのにね。
僕は空なんか飛べなくても場所を行き来する術があるし、人のこと言えないんだろうけど……。飛ぶ違いだろうしなぁ……。
やれやれ、人間に合わせるのは苦労するよ。

そう思った僕は闇をまとい、再びどこかへ飛んでいくルーミアを尻目に人間の里へと向かった。
もちろん狼に近いサイズへなることも忘れず。
ちなみにサイズは僕視点じゃなくてご主人視点でのサイズ。僕からすれば大きさは大した問題じゃないしね。
……狼サイズが全く分からないって言うのは黙っておくとして。

少し散歩した距離だったからそんなに遠くなかったな。
さて、霊夢とご主人は……と。
いたいた。お茶屋のとこからようやく出てきたところか。

「一応咲夜から聞いた紅茶の話だから、飲んでくれるとは思うんだけども…」
「いや、むしろ当たりさわりのないプレゼントの方が仲良くなれるってお前が教えてくれたからな。別にいいさ」
『プレゼント?……なら、どうして霊夢から紅茶の話が出るんだい?』

聞いたところでどうした、という話ではあるんだよね。それになん

となく想像できるし。
……なんで想像しやすいのか、僕には分からないけど。
「そりゃあ今度紅魔館へお茶会に招待されただろ？ってことはパチュリーと仲良くなれるチャンスだと思わないか?!」
「まあ…想像ついてたわよ」
だからって本人の前でため息をつくのは……その本人が今のご主人だから気にしないとは思うけど。
「別にいいじゃないか。なにせ最初から俺は目的を教えたわけだし」
『そうだね、聞いてた聞いてた』
（なんだかジンきゅんに飽きられてる気がするんだが……俺の気のせいか？）

にしても博麗霊夢というやけに外の世界に詳しい人物がいるからこそ、パチュリーとご主人は知り合えた上に仲良くなれたんじゃないか。
そう思うようになったね、最近は。
『それで？ご主人達の買い物はもういいの？』
「んー…他にある、と言いたいが…」
「甘味類なら普通に飲食できるわよ。コーラ系はないにせよ、確かカフェとかはあったはずなんだけども…。あとは団子屋とかその辺りになるけど…」
確かそう言った話はご主人が食いつきやすいはず……
「出来れば案内してくれれば助かる。あわよくば食べたい」
「顔が本気と書いてマジになってるんだけども……？まぁ、行くわよ」

『ご主人はそういうの好きだからねぇ』

ぼやくようにいった僕の言葉にご主人は「別に甘いのが好きでもいいだろ？」と返してきた。

男である以前に人間というものだし、そういうものかなとは思うんだけどね。

それよりも知りたいのは

『んで、行くの？行かないの？』

「あー、もし行くなら今でお願いしてもいいかしら？」

…紅茶の茶葉しか入ってなさそうな袋なら、別に一旦戻ってもいいだろうに。

それか、僕とご主人だけでもカフェとかは見つけられないことはないと思うんだけど。

「なんでだ？最近は俺1人でも平気だし、今はジンきゅんもいるから痛い目を見るのは相手だと思うんだが……」

『僕だけじゃなくて、雷光虫にも対応できないとね。今のところ対応できる妖怪は少ないからご主人達からしてオーバーキルってとこかな？』

「そうじゃ……」

と僕がいうと霊夢はなにかを言いかけたと思ったら、いきなりため息をついた。

こうも霊夢や咲夜、天然混じりの早苗とかは真面目で困る。ご主人でいうとこの冗談がつけないじゃないか。

それに君はまだご主人がいた世界のことも知ってるみたいだからのってくれてもいいんじゃないか？

そう、あの先代の巫女のようなツッコミを…ご主人とかに、ね。

「まあ、でも…適当に行くよりは安全そうだな。悪いけど頼むわ」

ご主人のそれは適当に行くんじゃなくて、行き当たりばったり。
よくぞまぁ、今まで平気だったもんだよ。ここでなら僕が幻想郷における拠点である博麗神社へ連れて帰れるけどね。まだ黙っておこう。

いや、ご主人と共に案内してもらってあれなんだけどさ。
カフェとやら、あるんだ…。
幻想郷なだけにカフェ、というよりまだ民家みたいな感じだけど。
むしろここの人達にとってはこれが普通なのか…。

『まさか、食べていくのかい？』
「いいとは思うけどな。味の方も確認したいとこだし」
――――だと思ったよ。大体そうだって、よく聞こえてきたからね。
……よく、っていうのはただの表現にしかすぎないけど。

「なら、食べていきましょ。休憩がてらにはちょうどよさそうだし。ジンオウガはどうする？」
「いや、僕は話相手がいるからやめておくよ」
厳密に言えば、話相手なんかじゃないんだよね。
ね、どこからか見つめてくる、どっかの誰かさん？博麗神社へ分かりやすく行ってやるから素直に姿を現してよね。
「そう。じゃあ、私は結輝とここで一休みしてから行くわね」
「おみやげ、ジンきゅんのも込みで買ってやるからなー」
やれやれ。

僕のご主人は相当な物好きだな。だから、パチュリーにも呆れられるんだよ。
ま、その性格のおかげでパチュリーから本読み友達としてなら、と受け入れてもらえたらしいんだけどね。
『そ、そっか。そういうのはご主人の好きにしてよ。僕はよく分からないし』
人間のとこにいたわけでも、教わったわけでもないしね。仕方ないね。
でも、ご主人も「はいよー」とか言って霊夢とお土産とやらを買いに向かったし、僕は相手のために都合のいい場所でも探すかな？
妖怪の山の麓辺りにあったような気がするし、そこへ行くとしようかな。

……うん、だからってこうも都合よく見つかっても、なあ。
木は生えてるけど、そこそこ円形に開けてる。花はその近くに生えてる。
挙句の果てには僕の背中などにいる雷光虫の動きを、僕の動きを邪魔するようなものがない。
なんか、雅翁龍（がおうりゅう）が作りそうな形にも似てるような。
でも、今はすごくちょうどいいかな。
なにせさっきから感じる気配が僕についてきてくれてるっぽいし。

ついでに〝挨拶〟もできるし、ちょうどいいね。

『いい加減、出てきてもいいんじゃないかな？……ずっと前から見てきてるのに、姿すら現せないのはどうかと思うよ』

と言っても出てこないのは想定内、なんだよね。

それで姿を現す方が少ないから。むしろ現れないのが正解に近いだろうしね。

なら、姿を現すようにこちらが仕向けるまで。

この幻想郷の住民とは言え、相手は姿を隠したままの状態でこっちを見てられるんだ。相応の覚悟で見てるに違いないし、いいよね。

『んじゃ、出てこないんなら…僕から軽く挨拶がてらのことをやらせてもらうね』

そう言って、僕は電気を高めつつ、雷光虫にそれを与えながら周囲に広がるよう、小声で指示した。

ついでにどんな相手でも打ち上げられるよう、準備もしておく。

それであとは簡単。できる限り大きく吠えるだけ。

『アウォオォーーン!!』

「〜〜〜〜〜っ!?」

ご主人達やハンターの間でいうとこの超帯電状態にしてからの、相手を打ち上げ――なんか気持ち相手が重いけど、槍とか銃槍とかっていうのを持ったハンターと似たりよったりだから軽いね――そして、範囲放電！

……お？立ち上がれるんだ。

確かに弾幕ごっこっていう幻想郷の遊戯に威力は調整したよ。そ

れでも霊夢や博麗霊華曰く〝かなり強い〟とか〝ラストスペルかラストワードクラスね〟と言われるほどの威力はあるはずなんだけどな。

あ、1回しかしてないからか。

「――なるほど。挨拶代わりには確かにちょうどよすぎるものね」

『うん。それは別に聞いてないけどさ、君が最近見てくる正体か。今のスペルカードもどきはどうだったかな?』

僕から見てハンターよりも小さい女の子。

あと特徴的なのは確か鎖?とひょうたん?とかその辺りかな。他にもおまけがついてたりするけど、1番目立つのはその二本の角かな。

幻想郷でいう妖怪の類……にしてはピンピンしてるな。

「伊達に妖怪ならざる者ではないってことはよく分かった。でも、霊夢達すら気づくのに時間がかかったのによく分かったね」

えっ?なにを言ってるのだろう、この子は。

あんなに視線を向けておいてよく言う。これ以上ないほどのヒントだったのに。

『そりゃあね。んで、君はなんて言う名前なんだい?僕は一応ジンオウガ、と名乗ることになってるんだけど』

(へぇ、ほとんど霊夢から聞いた通りか。雷を操る妖怪ではない存在。……でも、聞いた時に〝鬼と飲む時代が来るなんてね〟とか言った霊華や紫もいたけど、霊夢の方があいにくと情報量が多かったね)

「私は伊吹萃香、鬼よ。妖怪とは別ってことぐらい『いや、霧になる妖怪なんてこの幻想郷で見かけなかったし、霧になってる相手を見てると雷光虫とかで攻撃できそうだなあーと』」

でも、不意打ちは挨拶にならないし、相手の実力もある程度知りたかったから声をかけたのに。

うーん、避けなかったのを見るとよく分からないんだよな。

「紫や霊夢が思うより外の世界な存在だね。んでも、鬼ってものは知ってるかしら？」
一応素直に言っておくかな。
『知らないよ。そもそも僕は妖怪ですら曖昧だし。…とりあえず、ある程度の強さを持つ妖怪はそんなにいないって感じかな』
（あの外来人とはおおよそ違うとは思ってたけど、ここまでとはね。強さもそりゃそこそこあるし。逆に勇儀がここにいないのが彼女にとっていい事なのかどうなのやら…）
「そうなのね。ならとにかく鬼は嘘が嫌いってだけ覚えておいてちょうだい。私はつかない…とは言いきれないけど。んで、気づいたのはいつかな？」
気づくもなにも
『ずっと前からだよ。大体……紅魔館へご主人と行ったり来たりするようになってから、かな？』
「なるほど。それで挨拶に来なかったのは？」
『――――いやぁ、ちょっと幻想郷流を覚えるまでに時間がかかったもんでね。それで仕方なく、かな。そういう君は挨拶がなかったのを気にしてるのかい？』
半目で見ながら聞いてきたもんだからしれっと言ってみたけど、半目どころか呆れたような感じになったね。
一応納得はしてくれたみたいだからいいんだけど。
「まあね。あの外来人は仕方ないとは言え、あんたはいつでも来れるだろう？そこまで気づいていて、何故来なかったのか。……と、いうわけでやらせてもらうよ」
お？おおっと。
まさか急にこっちへ殴りかかってくるとは思わなかった。避けれたっちゃ避けれたけど…。
なるほど。なんとなく分かったぞ。

『そうか。君がそういうつもりならこっちからもやらせてもらうよ。ただこれで僕が耐えるなり勝つなりしたら、今やった全てを君への挨拶とさせてもらうとするよ。もちろん、君が仕掛けてきたのも含めてね』

「へぇ、なかなかに出来た子ね。伊達に外の世界で雷狼竜などと呼ばれてるわけじゃないってことか。……いいよ、私もそういうの嫌いじゃないから受けてあげる。ただし、負けたら負けたであなたは私を今度宴会に誘うこと。これを条件にさせてもらうよ」

『やれやれ、それに関しては探すのが大変そうだね。でも、なにもないよりは楽しそうだからその話にのるとしようかな』

僕がそう告げると嬉しそうに笑う伊吹萃香。

……変わった形のそれを飲むってことは飲料系なんだね。ハンター達でいう硬化薬とか鬼人薬みたいなもんなのかな？想像がしにくいや。

……前言撤回。ふらつき始めた辺り、お酒のようだ。

なるほど、能力はまだ読めないけど増えたり本人が巨大化する辺り、そういう1つの能力で出来るのだろう。

いいね、ほかの妖怪達よりはこの鬼と名乗る子は強そうだ。

『じゃあ、挨拶という名の弾幕ごっこ…始めようか』

「あなたみたいに話の分かるやつは嫌いじゃない。どんな相手か見させてもらうよ」

――後日、とある烏天狗によって新聞にされてしまったのは別の話。

霊夢にお仕置きしてもらえたのでぼくはもうどうでもいいや。

番外編　博麗の巫女の企みもどき

――元いた人格がどうなったか？
――お前は〝本当に〟そうなったと思い込んでいるのか？
――記憶が誰かの意図によって作られたものだと何故信じて疑わない？
――間接的な人殺しじゃあ、なんも感じないんだろうなあ？なぁ、お前さんよ――

ふむ、過去の夢を思い出すと色々とあることないこと言われたような気がする。
少し二人称があれな気がするけど、たぶん偶然だろうし。……ふむ、正常な判断ができないとはあの時のことを言うんだろうな。
っと、そうじゃない。本題に戻ろう。
最初に思い出していたのはだいぶ前に夢の中でさんざん言われたこと。似たりよったりなものはあったけど、大体はあの言葉ばかりだった。

あれをほぼ毎夜見せられればそりゃあ精神だって参るし、疑って相談もしなくなる。
しかし、それはもういい。今もまだ忘れられなかったりするけど、いい。
問題は別にあるのだ。

「……ねえ、紫。人が掃除をしているのに誰かさんはのんびり縁側で横になってるみたいなんだけど、知らない？」
「あらぁー？それは誰かしらね。貴方こそ知らないのかしら？」
いや、あなただよ。あなた。

最近綺麗だけど、つい癖でやってる掃除を眺めてるだけなのはあなたでしょ。
『僕にはスキマ妖怪しか見えないけど。やれやれ、それで強い妖怪とか本当信じ難いね』
「いや、あんたは紫とも戦ったじゃない。一応あれで1週間は寝込んだそうなんだからね？」
『そりゃあ亜種にも極みにもなったからね。僕が亜種化してからようやく本気出すんじゃあ遅すぎだよ』
「……貴方ねぇ。まあ、博麗大結界の管理とか色々をそこの普通な楽園の巫女がほぼやってるようなものだから、確かに本気を出せないことはないけども」
（結局出すつもりはなかったっていうことだよね？）

「ジンオウガ、凄いわね。あの妖怪、まがりなりにも幻想郷の賢者なのに本気を出すのは面倒って言ってるわよ」
『みたいだねぇ。まだようやく僕とまともにやりあえるようになった霊夢や結輝の方がまだマシだよ。あ、それと霊夢。先代の巫女は例外だから。忘れないでね？』
そりゃそうだ。先代の巫女は元々歴戦の巫女。
ジンオウガのいるシリーズで言えば〝上位〟とか〝G級〟だとかそういう位の強さをほこってるんじゃないかな？
結輝の方は最近2つほど武器となるものを作ってもらっていたんだから。
太刀、穿龍棍とあの世界で呼ぶものだ。
見た目も同じだけど、太刀は片手で持てる長さにされている。細長い刀と鞘（さや）。
鞘の方はジンオウガの素材なだけあって少しギザギザしていた。
穿龍棍はなんていうか…外の世界でいうトンファーみたいになっていた。
先端が尖っていること以外はほぼジンオウガっぽいそれは太刀みたいにかっこよかったと思ったっけ。

今の2つをあげた理由はもちろん、彼の自衛のために。
本人は〝死ぬ時は死ぬ〟ってタイプみたいだし、いらないとか言っていた割にはジンオウガの武器であることに喜んでいるようだった。ちなみに製作者は目の前にいるスキマ妖怪。
私が無理やりその役を押し付け……熱心にお願いした。
なにせ彼はどこか達観しているような気がするから。

…本題に戻ろうか。
「忘れるわけないじゃない。あの生真面目な先代の巫女の強さを。――それで？紫が私とジンオウガだけにして、結輝を紅魔館の大図書館にスキマで送り込んだのはどういうつもりかしら？なにか私達にだけ話したい内容でもあったわけ？」
「あー、そうだったわね。忘れてたわ」
語尾に音符マークがつきそうな口調でしゃべる時は大体がわざとだなと思う。
今回もか。
「……ジンオウガ。博麗神社のルール破ってあの妖怪に攻撃「分かったわ、ちゃんと目的を話すわよ」」
（やれやれ、この霊夢は〝霊夢〟や霊華と違って僕のことや牙竜種のことなんて知らないだろうに。ご主人と僕が来た幻想郷が偶然こうなだけで、本来は僕とご主人を除く全員が知らなかったはずだろうに。……かくいう僕もご主人のとこのハンター達やそのペット――家族と呼ばれていた気もする――から聞いたんだけどね。もちろん、相手は僕と同じく牙竜種とか鳥竜種などと呼ばれる存在しかいなかったけどね）
「……人間の里でのことよ。本来ならそこにいるジンオウガは大きさこそ変えれるとはいえ、その見た目。本来は大変なことになるんじゃないかしら？」

『そこに追加の質問いいかな。僕の食べるあれ、肉が多い割には僕が食べれそうな野菜類を気持ち入れてるよね。その上、肉も食べてみりゃ焼けてるのは外だけで中身は生ですっごく食べやすかったし。霊夢は僕のことをどれだけ知ってるんだい？』

まあ、そろそろ来るとは思っていたよ。でなきゃ紅魔館に〝外来人の結輝がもしかしたらそっちへ行くかもしれないわ。その時は客として迎えいれてくれると嬉しいわ〟なんて言わないし。

それに八雲紫（あなた）ならもう気づいてるんじゃないの？

――無闇に里の人達が怖がらないように。騒がないように。ジンオウガを化け物として見ないように。

そうしたことなんて。とっくに分かりきってるだろうに。

ジンオウガのも、本人？には悪いが里の人達が見ても完全な肉食だと勘づかれないように。あとついでに食持ちすればいいな、ということでジンオウガにやっても問題なさそうなものを霊華や永遠亭にいる全員――輝夜を含めていいのかなぁ――に聞いたりしてるしね。

聞いたあとは私が仕分けるんだけど、それは別として。

「…まず、紫の方からね。それは幻想入りした2人のことを私と霊華とで書いて出したのよ。もちろん、その2人が人間の里へ降りる前にね」

『……まさかとは思うけど、それ繋がりで僕の食べる肉を生焼け肉風にしているわけじゃないよね？たまにこんがり肉風が出てくるのも関係してたりしないよね？』

（やけに僕のことを知ってるし、ご主人がハンターとして遊んでいた時によく言っていた〝生焼け肉〟とか〝こんがり肉〟って言って通じたらもう確信犯だよね。だいぶ前からそんな感じだったし、それならそれで違和感はないしね。…G級という言葉を理解してる時点で既に怪しかったけどね）

「あー、たぶんそれは偶然の産物よ。単純に肉の表面を殺菌したかっただけだから。中身まで焼けてるのは大体加減を間違えただけよ」
そこで紫がため息をつく。なんでや。
私が博麗の巫女としてしっかり幻想郷のバランスをとることを前提に外の世界からの知識などを使わせてもらってるじゃん。今さらやめろとかなしだよ？
「…いいえ、霊夢。なんでもありませんわ。ただ相変わらず博麗の巫女として天然というかなんというか…。そのおかげで参拝客や依頼をしてくる住民がいるのだから咎めはしないけど…やれやれ、歴代の博麗よりまともなのはその幻想郷と外の世界どちらにも通じる常識だけね」
「ふん、悪かったわね。そんな巫女で」
（あぁ、うん。センスで口元隠してるつもりだろうけど、雰囲気から察すると彼女がそういう質（たち）だって分かっててからかってるだろうな。たぶん口元緩んでるだろうし）

「それはともかくとして――ジンオウガ、貴方は本気をまだ出していないでしょう？でなきゃ紅魔館の連中があんなんで済むとは到底思えないわね。例え貴方の性別を勘違いしていたからとキレたとは言え、ね」
あー…伊達に外の世界でモ○スターハ○ターファンタジーとかなんて言われないもんね。私は詳しくないけど。
『そりゃあねぇ。従来通り戦ってもいいけど、幻想郷の住民がハンターと違いすぎるからなぁ。外から来たらしいのも含めて、だよ？』
（逆に言えばハンターなら倒せるんだけど……なんだっけ？〝プレイヤースキル〟とかっていうよく分からない奴や〝スキル祭り〟とかもしっかりやらなきゃいけないとかご主人達は言ってなかったっけ。僕には理解できなかったけど）

「確かにね。私ですら致命傷を避けられるかどうかでしょうし。あの霊華――――この場合は先代の巫女と呼ぶことにするわね。あの人ですら傷は免れないし、霊力を込めた拳をしても痛めるかどうか…」
あっていれば、だけどね。なにせ私の持つ情報は古すぎるし。
今回みたいに外来人が来れば別だけど。
「そう。あぁ、それと霊夢。――――外の世界じゃモンスター系のペットにあげる餌は〝生肉〟、〝生焼け肉〟、〝こんがり肉〟、〝こんがり肉G〟で影響が相当変わるそうよ？あと、あげるモンスターの肉によっても変わるそうだから。じゃあね」
そう言って、八雲紫は空間に穴――――向こう側に様々な目が見える――――という名のスキマを開くとそこに入ってスキマごと消えた。
……。

「さ…さり気なく外の世界で情報収集きてるじゃないの、あのスキマ妖怪。ちょっと退治してくるわ」
そうとなれば、八雲紫の場所を探しに
……

「ねえ、ジンオウガ。雷光虫を私の周りに、しかも上にすら逃げ場を作らないように囲わせるってちょっと酷くないかしら？」
『いや、前に君のぐ…んんっ、話からして八雲紫とやらの家なんて見つけられないと思うけど。モンスターとかが見つかるようなもんじゃないんでしょ？』
(なんかこう…言いかけたのをやめたり、霊夢やご主人にツッコミを入れてしまう辺り、モンスターなのに常識人だよねとかって言われそうだな。たぶん言う相手はいないと思うけど)
なにか言いかけたよね。いや、愚痴って言いかけたよね。

別にその通りだからなんも言わないけどさ。私はとにかく頷いておくことにした。
「まあね。でも、スキマ妖怪だし一応退治に……」
『その理屈はおかしい。って、僕は君とコントするために雷光虫を飛ばしてるわけじゃないんだよ？だからそうやって短距離の瞬間移動をしないでよ』

あ、そういや雷光虫が後ろにいるような。気がつかなかったなあ。
「瞬間移動はさすがに知らないわよ？…面白いからアリでしょ？コントもどきも。だって普通はジンオウガってしゃべれないんだから」
（……やれやれ。その通りだけどさ……）
『はいはい、それでご主人はどうしてると思う？』
あぁ、どうなっても大図書館に行くよう、紅魔館の面子にお願いしたわけだから…えーと…
「たぶん、大図書館に案内されてパチュリーがどうにか相手でもしてるんじゃないかしら？」
『わぁお、ご主人得。なのに霊夢はなにをしようとしてるの？』
あ、もしかして最近増えてきたように感じる雷光虫を見てるのバレた？
そのうち言うつもりだったけど、ジンオウガには先に言っておくか。
「――ちょっとしびれ罠というのを自作できるか試そうかと思っていたのよ。もちろん河童達のいるあそこを借りて、ね」
私がそういうと『あー…ご主人の楽しみが増えてく…。そうなるとパチュリーとかって子といつ仲良くなれるんだか先が読めなくなっていくんじゃあ…』とかって悩み――雰囲気的に真面目に、かな――始めた。
私もいるし、たぶん仲良くなれるよ。親友以上は本人達に頑張ってもらうけど、友達か親友になるなら……ね。

幻想郷縁起　ＥＸＴＲＡ

雷狼竜と共にいる外来人
神風　結輝　　ｋａｍｉｋａｚｅ　ｙｕｕｋｉ
能力
Ｇ級ジンオウガを家族とし仲良くする程度の能力
身体能力がかなりよい程度の能力
危険度
普通
人間友好度
普通
主な活動場所
博麗神社

博麗神社にて住まう外来人。
基本的にジンオウガと共におり、よく紅魔館へ行く姿を見受けられるらしい。

★

◆外来人なのに◆
結構外の情報が偏っているようだが、我々の住む幻想郷への理解が高い。
それに外来人としては珍しく死に対する反応が達観していて、私も少し驚いてしまった。
しかし、能力や独自に覚えている体術など対人間に関する自衛はバッチリなようだ。
まあ、人間のほかに妖怪がいるので、自衛がバッチリとも言いきれないが。

◆容姿◆
男性が故に身長はやや高い。十六夜咲夜より少し高いかその辺りだと思われる。

髪はとても短く、漆黒を連想させるほどの髪色をしている。目はよくあるブラウン系のようだ。
元々外の世界では〝学生〟という、我々でいうところの寺子屋にいたらしく、〝制服〟というものを着ていた。現在はとある博麗の巫女の計らいで和服を着ている。

無双の狩人
ジンオウガ　　ｚｉｎｎｏｕｇａ
能力
フロンティア仕様の強さ
怒っている時は亜種化する程度の能力
自身の大きさを変更できる程度の能力（ニホンオオカミサイズから最大サイズ）
意思疎通可
かなり怒っている時は極み個体になる程度の能力
危険度
激高
人間友好度
高
主な活動場所
博麗神社など

牙竜種とかいう存在らしい。竜っぽくはないが、博麗霊夢とそのジンオウガを連れている外来人曰く〝竜ではあるが陸で生活する竜〟であるとかどうとか。
全くもって不思議な存在である。
★
◆妖怪ではない？◆
外来人と同じ日に幻想入りした妖怪。
ではなく、モンスターという存在らしい。なにが違うのか私には

さっぱり分からないが、とにかく別なようだ。
だが、彼女は雷を操るなど他の幻想入りした存在の中で危険な個体とも言える。
帯電する際、雷光虫という昆虫?にも静電気などを送るらしいが、それだけであそこまでの強さの雷を作れるのだろうか。

◆この雷狼竜について◆
そして、彼女は思いっ切り話の通じる相手であり、機嫌をそこまで損ねない限り、危険度はかなり低いと言える。
なのだが、あまりにも不機嫌になると場合によっては自分の意思で〝獄狼〟や〝極み吼えるジンオウガ〟というものに変わるようだ。
なので、その状況になると普通の人間には対処がしきれない為、彼女をあまり怒らせない方が良い。

◆容姿◆
目立つのはその胴体部の青い鱗と頭部や背面、腕部にある黄色い甲殻だろう。あれは〝蓄電殻〟と呼ばれる部位らしく、曰く〝絶縁性が高く、自身の電気で感電しない〟だそうだ。とても理にかなっていそうである。ちなみに頭部の方は角に見えなくもない。ただ私にはあれが角に見えた。形がそれに見えるのだから仕方ないだろう。
他は腹部や首周りの帯電毛、強靭に発達した四肢、そして肉食が故の爪だろう。
超帯電状態ともなるとさきほど記した蓄電殻を開くらしい。そこから放電するのだとか。爪もその分攻撃的なものに変わるらしい上に前腕はもっとも発達しているようなので、死にたくなければ〝雷狼竜〟、〝獄狼竜〟、〝極み吼えるジンオウガ〟のいずれかの超帯電状態の時は近寄らない方がオススメである。
もっともはそもそも刺激せず、下手に近寄らない方が良い。

永遠の巫女

博麗　霊華　　hakurei　reika
能力
空を飛ぶ程度の能力
博麗の巫女としての能力
霊気を操る程度の能力
身体能力、体術
危険度
激高
人間友好度
高
主な活動場所
博麗神社など

★

◆先代の巫女◆

まず、名前は本人がそう名乗っているだけであることを記しておく。

なので本名か偽名かは不明だ。それと博麗の巫女こと博麗霊夢との関係性も不明である。

しかし、彼女がその巫女の先代であることは間違いないだろう。

戦い方や鍛えられ方も先代なだけあって、完全に違う。やはりスペルカードルールのない時代の者であると改めて理解させられた。その為か、赤白い巫女装束の下には古傷の跡がたくさんある。

それこそ歴戦の強さを感じさせるほどに。

◆容姿◆

やや博麗霊夢に似た雰囲気があり、髪を長く伸ばした状態が彼女と言えるほど。髪の色も同じである。

シンプルなリボンで一つに結いている、露出の低い巫女装束を着ている身長が博麗霊夢より頭二つか三つほど大きいなど違いがかなりある。なのでよほどのことがない限り二人を間違えないだろう。

目も大体霊夢の目付きを少しキツくしたようなものが彼女なので、

怖い人だと勘違いされそうである。

楽園の素敵な巫女
博麗　霊夢　　hakurei　reimu
能力
空を飛ぶ程度の能力
博麗の巫女としての能力
霊気を操る程度の能力
幸運、直感
神降ろしの能力
身体能力、体術
危険度
低（異変解決時は普通）
住んでいる所
博麗神社

★

◆博麗の巫女◆

前よりは里の人間から信頼をおかれるようになったほど、活動的な巫女。

以前の〝博麗の巫女異変〟にて人格そのものが変化してからの再度記録ではあるが、上記のこともあり博麗神社には以前より多少参拝客が来ているようだ。しかし、妖怪が来ていることも変わらない為、そんなに増えていない様子。

だが、彼女がいなくとも襲われない。何故なら先代の巫女がいるからだ。

彼女自身も苦手意識が多少なりともあるようなのでどうかと思うが。ちなみにその原因は先代の巫女の方にある。

◆博麗霊夢◆

さきほども記した通り、彼女は以前の彼女ではない。

〝博麗の巫女異変〟にて、外来人が無理やり憑依させられて以降が今の彼女である。なので、以前の彼女を知る者としてはとても不思議だったことだろう。
それにむしろ今の方が安全なので例え異変解決時に近寄ってしまってもしっかり本人に伝えれば見逃してもらえるようになった。
その分、博麗霊夢ではなく博麗霊華の方が危ないので、安全に通りたい時は彼女に頼るといいだろう。そうすれば襲ってくる妖怪、妖怪退治中の先代の巫女から身を守ることができる。

◆博麗の巫女異変◆
最後に記すのもどうかと思うが、残しておく。
そもそも異変のことはあまり分かっていない。というか覚えていないものが多いため、なんとも言えない。
本来の博麗霊夢も人格が消失する寸前に摩多羅隠岐奈の手によって外来人の肉体へと移されているのもあり、詳細を知る者は〝本来の博麗霊夢〟、〝博麗霊夢〟、〝八雲紫〟、〝博麗霊華〟だけとなっているようだ。
これからもその話が広まることはないらしい。

◆容姿◆
黒に近い茶色の髪で、肩につくかつかないかの長さらしい。目はやや赤身がかかった濃いブラウン系の色のようだ。
巫女服は博麗霊華とはまるっきり違うので見たら分かると思われる。
ちなみに先代の巫女の方が身長が高い。

祀られる風の人間
東風谷　早苗　　ｋｏｔｉｙａ　ｓａｎａｅ
能力
奇跡を起こす程度の能力

危険度
低
人間友好度
高
主な活動場所
守矢神社など

★

外の世界より来た外来人。最近やってきた神風結輝と違い、神社ごとの引っ越しのようだ。

◆風祝◆

生来の博麗霊夢であれば穏便に済ませられなかったであろう行為をしたが、ある異変により博麗霊夢の性格人格が別人だった為に博麗霊夢、霧雨魔理沙などの協力を経て幻想郷の一部住民達と和解。

現在は博麗霊夢に神職や巫女の助言をしたり、博麗霊華から自身の神二柱と話をしたいと言われたりなど、意外と苦労人))。

情報源は匿名希望から来たものだが、彼女は一応学生だったらしい。

◆早苗と霊夢◆

外の世界からの多少の知識、今ある少ない知識を用いて行う博麗霊夢と外の世界でしっかり神職を全うしていた東風谷早苗とは大きな差があるが、時折祭りの時には互いの出店も出すように二人が互いを誘っている。

恐らく切磋琢磨するのにちょうどいいのだろう。しかし、早苗は元外来人な為、少し感覚がズレており、間抜け。今の霊夢も早苗ほどではないが、感覚がズレている。

◆容姿◆

胸の位置まで伸びた緑髪で、左側一房を髪留めでまとめ、前にたらしている。　瞳の色は新緑で、かえるの髪留めや蛇のような髪飾りな

ど博麗霊夢との違いは分かりやすい。
むしろ幻想郷内で間違える者はいないほどである。
ちなみにお祓い棒がそれぞれ違う。

神色自若の狛犬
高麗野　あうん　　ｋｏｍａｎｏ　ａｕｎｎ
能力
神仏を見つけ出す程度の能力
危険度
激低
人間友好度
激高
主な活動場所
博麗神社、守矢神社

★

◆狛犬として生を受けた者◆
とある異変以来、博麗神社にて姿を見受けられるようになった。どうやら一人で獅子と狛犬の性質を持ち合わせている狛犬のようだ。
本来の博麗霊夢を知っている辺り、だいぶ前から博麗神社にいたらしい。というのも、彼女はその異変まで博麗神社に置かれている狛犬の石像だったためである。
しかし、どうやら能力外に二人に分身する力があるらしいが、理由は不明。

◆容姿◆
全体的にカールした緑色の髪が腰まで伸びている。
額には一本角、耳は狛犬だからなのか、その耳が生えている。
服装は何故かアロハシャツのような感じがするらしい。ズボンも似た感じである。素足に下駄をしているようだ。
それと普段は見えにくいが、髪の毛のようにカールした緑色の尻尾

が生えているらしい。

他にもいるが、大ざっぱに違うものだけ残した。これには賢者の方にも許可を得ている。

それにしても幻想郷第一、といっていたわりには親バカな雰囲気が出てきたような気がする。記した先代の巫女の方が酷いが、賢者になにがあったのだろうか。